

知恵と知識

－ 神学の理想と理性主義の現実 －

古牧徳生 *

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

【要旨】人間の認識能力の限界に突き当たり懷疑主義に陥った哲学は、慈悲深い神の存在を前提とする神学へと変化した。だが12世紀に入りアリストテレスの哲学が知られるようになると、聖書との矛盾から神学と哲学の違いが意識されるようになった。事態を憂慮した神学者たちは神学を哲学から守ろうとするうちに矛盾した主張を応酬するようになり、結果として神学の権威が損なわれることになっていった。全体の構成は次の通りである。

1 章はアウグスチヌスから修道院神学まで。

2 章はスコラ哲学の発生とアリストテレスの流入。

3 章は13世紀後半における神学と哲学の関係。

4 章はトマスの神学をめぐるドミニコ会とフランシスコ会の論争。

読者は、神学者たちが「絶対確実な知識」として神学をどんなに称揚しても、人間の限られた認識能力の前では虚しい理想にすぎないことに中世の人々が次第に気づいていったことを理解できよう。

キーワード：理性主義，二重真理，実体的形相単一説

序論

ローマ帝国第二代のティベリウス帝（在位14-37）の世に出現したキリスト教はたびたび弾圧を受けたにもかかわらず拡大を続け、二世紀末には帝国の全域にまで広がった。この宗教の発端はイエスという人物が「私は神より遣わされた」として始めた街宣活動であり、イエス自身にどの程度の自覚があったのか不明だが、本人が悲惨な最期を遂げたことにより逆に生前の彼の言行は高度な象徴性を帯びることになった。残された弟子たちは彼の死に宗教的意味を見出そうと躍起になり、かくしてイエスは神格化されるようになった。

- 天地を創造した唯一の神はナザレのイエスを地上に遣わした。
- イエスは神の子だったのであり、だからこそ十字架に架けられて死んでも三日後に復活した。
- 神がイエスを遣わした目的は、彼を救世主として信じる者に永遠の生命を与えるためであった。

—— やがて世界の終わりの日が来る。その時、イエスは再び現われて、すべての人間を天国と地獄へ審判する。

こうして本来はユダヤの民を大国の隷属から解放する政治的指導者を意味した「メシア」は、すべての人を死から解放する救済者「キリスト」という霊的な概念に変わった。

だが合理的に考えれば、キリスト教の主張は不条理である。天地の創造主と言うが、「宇宙は永遠にして無限」と考えることも可能であるから、創造者などいなくても構わないだろう。また、死んだ人間が復活したというのは実は死んではいなかったということであるから論理的に矛盾しているし、誰も見たことのない神が何を考えているのか誰にも分からないだろう。となればこの世の終わりを云々しても無駄ではないか。

古代の懷疑主義を代表する二世紀後半のセクストス・エンペイリコスが神の存在について明確に疑義を呈している。

「……いかにして我々は神の概念を得ることができようか —— 神の実体であれ、形であれ、存在している場所であれ、同意された事柄を我々は何一つもっていないとすれば」¹⁾

神がいるかどうか分からない以上、そんな神の性質を云々しても無駄である。

「……ちやうどディオンを知らない人は、またデ

2015年12月8日受付：2016年2月15日受理

責任著者 古牧徳生

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail : hurumakius@nayoro.ac.jp

イオンの諸属性をも、ディオンに属する者として思惟することができないように、そのように我々は神の実体を知らないのであるから、神の諸属性についても、それらを学んで概念を得ることは不可能であろう」²⁾

こうしたエンペイリコス（Empiricus）の懐疑は、誰であれ合理的に思考する者なら、極めて当然である。となると信仰を擁護しようと思うなら、一番簡単な方法は合理的思考そのものを拒否することである。この立場を代表するのがエンペイリコスとほぼ同時代にカルタゴで活躍したラテン教父のテルトリアヌス（Tertullianus）（160頃-222頃）である。三世紀の初めに書かれた『異教徒たちへの異議の書』には有名な一節がある。

「まことにアテネとエルサレムに何の関わりがあるのか。アカデミアと教会に何の関わりがあるのか。異教徒たちとキリスト者たちに何の関わりがあるのか。我々の教えは、素朴な心で主を求めよと自ら説いたソロモンの柱廊より出るものである。ストア的、プラトンの、弁証論的キリスト教をもたらした者どもは見るがよい。我々はイエス・キリストより後にはいかなる詮索も、福音より後にはいかなる探求も、必要としない。信じるとき我々は信仰を越えて何も望まない。なぜなら信じることを越えて為すべきことなど存在しないということを何よりも我々は信じているからである」³⁾

ここで言うアテネとは哲学、エルサレムとはキリスト教のことである。つまり「キリスト教と哲学は無関係であり、信仰に理屈はいらない」ということである。いや「理屈はいらない」どころか彼は明確に哲学を虚偽として否定している。

「……いったい哲学者とキリスト教徒との間にいかなる類似点があるというのか。哲学者はギリシアの弟子であるが、キリスト教徒は天国の弟子である。前者は名声の仕事にいそしむ者であるが、後者は生命の救いの仕事にいそしむ者である。前者は言葉の業に励む者であるが、後者は行為の業に励む者である。一方は誤謬の建設者であるが、他方は誤謬の破壊者である。一方は真理の毀損者であるが、他方は真理の回復者である。一方は真理の剽窃者であるが、他方は真理の監視者である」⁴⁾

こうした反理性主義ともいうべき態度はテルトリアヌスだけではない。キリスト教の実質的創始者である使徒パウロ（Paulus）（10頃-65頃）が既に述べていた。

「人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり空しいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい」⁵⁾

ここには哲学を、全くの理屈だけで人心を籠絡する口舌の学として警戒する姿勢が窺える。

だが注意すべきはパウロの場合、哲学はまったくの警戒の対象ではなかったということである。というのは同じパウロ自身が神の存在は理性で把握可能と認めていたからである。

「世界が造られたときから、目に見えない神の性質つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」⁶⁾

つまり世界をよく観察すれば、神が世界を創造したことは理解可能というわけである。恐らくパウロはこう言いたかったのだろう。

—— 生物の体の仕組みを観察してみよう。例えば眉毛や睫毛や瞼を見れば、眼球の保護という合目的性が潜んでいることは明らかだ。それらが揃って偶然に出来るはずはないから、当然それらを設計した者が存在していたと考えるしかないだろう。つまりこの世界の創造者である。ゆえに神は存在する。

—— 果樹を見てみよう。まだ熟れていない果実は青くて目立たない。しかし食べ頃になると赤や黄色になって、周囲の葉の緑から目立つようになる。こんな現象が自然に発生するだろうか。これは、世界を創造した方が我々人間に食べ頃が分かるように考えてくれたからではないだろうか。ということは神は慈悲深い方といえよう。

このような考え方をするなら、哲学はキリスト教に対立するものではない。むしろ、哲学を通して神に至るわけであるから、哲学はキリスト教と調和することになろう。するとテルトリアヌスのように哲学を虚偽として一概に否定するのではなく、哲学にも正しい哲学と虚偽の哲学があると考えなければならない。正しい哲学ならキリスト教に調和するはずなのである。こう考えると哲学が神へと至る正道を歩んでゆけるように、理性を正しく導くことが何よりも大事ということになろう。すなわち信仰である。すると理性による推論をいきなり始めるのではなく、まずキリスト教を信じて、次にその信仰を前提に、信仰の枠内で推論を展開していくことが正しい哲学の手順ということになるだろう。

一章 知恵の理想

一節 アウグスチヌスの場合

神へと至る哲学 —— この理想を明確に示した神学者がアウグスチヌス(354-430)である。彼はもともと哲学徒だった。哲学に入ったきっかけは19歳のとき、キケロの『ホルテンシウス』を読み、真理について強い関心を懷いたことだった。

—— まず真理とは何だろうか。

—— それは絶対に確実な知識であろう。

—— では知識が確実であるためには何が必要だろうか。

—— それは対象を確実に認識することだろう。

—— では確実に認識するためには何が必要だろうか。

これについて390年の『真の宗教』でアウグスチヌスはこう述べている。

「認識とは、それが永遠にして常に自己に留まるものの認識でない限り、確実な認識ではありえない……」⁷⁾

つまり確実な認識とは「永遠にして常に自己に留まるもの」についての認識である。それが神なのである。400年から二十年以上かけて書かれた大著『三位一体論』では神について哲学的に性格づけている。

「……まことに神以外で本質 *essentia* ないし実体 *substantia* と呼ばれるものは、大小さまざまの変化を生じさせる偶有性を受け取るが、神にはそのようなものは全く付随せず、神たる実体あるいは本質のみが不変なのである。こういうわけで、本質という名が由来する『在ること』そのものの *esse ipsum* が最高・最真の意味で神なる方について言われる。およそ変化するものは、『在ること』そのものを保持しえず、また変化の可能性を持つものは、いまは現に変化しないとしても、かつてあったものであることはできない。それゆえ、いま現に変化しないだけでなく、変化の可能性を全く持たないものだけが、何の疑惑もなく真に在ると言われなければならない」⁸⁾

すなわち神は純粋な存在であるから、変化はあり得ず従って永遠である。するとこうした神について認識することは絶対確実に存在しているものの認識であるから、確実な認識であり、従ってその知識は絶対確実な知識つまり真理というわけである。

かくしてアウグスチヌスは神を認識するために最

初は聖書に手を伸ばした。しかしその文章の余りの素朴さに呆れ、代わりに近づいたのが当時流行していたマニ教だった。マニ教は「信仰を前提にすることなく、ただ理性だけで人を神へと導く」ことを謳っており、⁹⁾ その合理性にアウグスチヌスは惹かれたのである。

「とにかく私は目に見えない事柄に関しても7足す3が10になることが確実であるのと同じくらい確実に把握することを欲していました。私は……私の感覚に直接触れていない物體的なものであれ、あるいは霊的なものであれ、とにかく他の事柄も算数の確実さと同様に理解することを欲していました」¹⁰⁾

7足す3が10であることは両手の指を数えていけば誰でも理解できる。それくらい確実に彼は神について知りたかったわけである。

だがマニ教の話をいくら聞いても、神について期待していたほどの合理的理解は得られなかった。そのため次第に、神を認識することは人間には不可能ではないのか、という懐疑の念が頭を擡げるようになった。¹¹⁾ そしてそうした懐疑をいかに乗り越えるべきかを考えていくうちに、マニ教が嘲笑していた信仰を前提にする以外にないのでは、という気持ちになっていった。

「……しばしば僕には、真実は発見できないものと思われ、僕の思索の大波はアカデミア派の主張に同調する方向へ吹き寄せられて行った。僕は、……しばしば繰り返し考察しているうちに、真理というものは、その探求の方法が真理そのものの中に隠されてはいるが、真理それ自体としては決して隠れているものではないこと、また真理探究の方法はある宗教的権威から受け取るべきだということを考えるようになった」¹²⁾

こうして386年8月、アウグスチヌスは信仰を前提にする立場に旗幟を易めた。算数のように始めから理詰めしていくのではなく、まずはキリスト教を信じたうえで、その前提に立って神を認識すべく哲学を構築していこうとしたのである。

こうした信仰と哲学の関係について、アウグスチヌスの言うところを確認しよう。

先に触れた『三位一体論』によれば、存在するものには二種類すなわち(1)偶有性を含む可変的なものと(2)偶有性を含まず、従って永遠不変なものがあるわけであり、後者が神である。

すると認識についても二種類つまり(1)の可変的なものを対象にした認識と(2)の永遠なる神を対象にした認識があることになる。しかし(2)については、神はこの世界を超えた存在であるから、(1)の可変的なものを認識するような仕方では認識できない。となると神を対象とした認識はあくまで特別な能力によらねばならないだろう。同じ『三位一体論』でアウグスチヌスはこう述べている。

「……永遠的な事物の知性的認識は知恵のもので、時間的な事物の理性的認識は知識のものであるということが知恵と知識の正しい区別である……」¹³⁾

つまり(1)の可変的事物は理性 *ratio* により認識され、それによって知識 *scientia* がもたらされるのに対し、(2)の永遠的事物つまり神は知性 *intellectus* によって認識され、それによってもたらされるのが知恵 *sapientia* と呼ばれるわけである。そして注目すべきは、知識と知恵は秩序を成していることである。

「物体的なものは身体感覚によって知覚されるが、永遠にして不変な霊的なものは知恵の働きでもって知解される。しかし感覚的欲求は知識の働きの近くにある。なぜなら、身体感覚によって知覚される物体的なものを認識することは知識の働きだからである。それゆえ精神がその物体的なものを、目的としての最高善に関係づけるために認識するならば、その認識は正しいであろう。しかし偽りの幸福の中に休むべく、それらを善きものとして楽しむために認識するならば、その認識は悪しきものである」¹⁴⁾

ここでは「知識は物体的なものの認識、知恵は霊的なものの認識」とされたうえで、物体的なものを最高善に関係づけて認識するなら正しい認識であるが、そうでないなら悪い認識とされている。最高善とは神であるから、たとえ物体的なものに関する知識であっても神へと向けられなければならないということになる。つまり知識とは知恵を目的にした、そのための手段なのであり、またその限りでなら、つまり知恵のための知識なら、はかない可変的事物に関する知識もまた善いのである。

「被造物を愛してはならないというのではない。

愛 *amor* が創造者に向かうならば、それは欲望 *cupiditas* ではなくて聖い愛である。被造物をそれ自体のために愛する愛は欲望である。そのとき、被造物はそれを用いる人を助けず、それを楽しむ人を墮落させる。被造物は私たちに等し

いか、私たちよりも劣るかのどちらかであるから、その劣るものは神のために用い、等しいものを神にあって楽しむべきである」¹⁵⁾

ここから、つまり被造物はあくまでも神のために用いるべきであるということから、享受 *fruitio* と使用 *usus* の区別が強調されることになる。ある説教ではこう言われている。

「永遠なるもの、それはおおいに享受すべきものであります。時間的現世的なもの、それは使用するべきものであります。時間的、現世的なものに私たちは遍歴者として関わるのであり、永遠なるものにはその住民として関わるのです」¹⁶⁾

すると一口に事物の認識と言っても、永遠なるものの認識は享受すべきだが、現世的なものの認識は使用するということになる。すなわち享受すべきは知恵であり、その知恵に到達するために知識は使用されるべきなのである。このことは学問についてもあてはまる。396年頃に書かれた『キリスト教の教え』ではこう言われている。

「……神を畏れ、幸福生活を求める、熱心で才能のある青年たちに次のように勧めることがふさわしいと思われる。キリスト教会の外で習ういかなる学問も、いわば幸福生活に至るための配慮なしに追求すべきでなく、これらの学問を覚めた気持ちで、しかも熱意をもって評価すべきである。……このようなすべての学問において『過度を避けよ』という格言を守るべきであり、とりわけ時間に包まれ、空間を占めている身体感覚に属する学問の場合、心して守るべきである」¹⁷⁾

そしてイスラエルの民が出エジプトに際してエジプト人の金銀を持ち去った話¹⁸⁾を例に挙げて世俗の学問を活用するように説いている。すなわち「異教徒たちのすべての学問は、偽の、迷信的な像と、無意味な労働という重荷を背負っている」¹⁹⁾がゆえに嫌悪し回避しなければならないが、そこにはまた「真理のために用いるのがふさわしい自由学芸やきわめて有益なある種の道徳律」²⁰⁾も含まれているから、これらについては「福音を宣べ伝えるという正しい目的のために用いなくてはならない」²¹⁾し、「キリスト教的に利用することに方向を変える場合には許される」²²⁾とされる。そしてこれは哲学にも当てはまる。むしろ積極的使用をアウグスチヌスは推奨する。

「哲学者と呼ばれる人々が、たまたま真実なこと

や、我々の信仰と合致することを述べたとき、とくにプラトン主義者の場合、彼らを単に怖れてはならないばかりでなく、いわば不正な所有者からのように、彼らから返却を要求して我々のために役立てるべきである」²³⁾

こうした哲学の積極的使用の勧めは初期の386年に書かれた『秩序』において既に現れている。そこでは、知恵のために哲学を用いない者は実は知恵を愛していないのだ、とさえ言われている。

「……『哲学』というギリシア語は、ラテン語に訳すと『知恵への愛』ということになります。それゆえ、あなたが熱心に愛読しておられる聖書も、必ずしもすべての哲学者を避けたり軽蔑したりせよとは命じているのではなく、この世の哲学者を避け、軽蔑せよと命じているのです。(『コロサイ』2-8)しかるにこの私の眼からはるか遠くにあつて、少数の健康な知性が見るところの別の世界があることを、キリストご自身が十分に教えたもうているのです。彼は『私の国は世のものではない』と言いたまわず、『私の国はこの世のものではない』(『ヨハネ福音書』18-36)と言われました。哲学をすべて避けるべきだと考える人は皆、私たちが知恵を愛さないよう望む人なのです」²⁴⁾

つまり避けるべきは地上にのみ向かう哲学である。この世を超えた永遠の世界に向かう哲学はむしろ推進されねばならない。そのためには、哲学をこの地上の世界に限定してはならない。この世界を超えた永遠の世界への視点を忘れてはならないのである。だからこそ**信仰 fides**が必要なのである。『真の宗教』ではこうある。

「権威は信仰を要請し、人間を理性 **ratio** へと準備する。理性は理解 **intellectus** と認識 **cognitio** へと導く。そういっても、理性は、誰が信ぜられるべきであるかを考えるとき、権威を完全に捨ててしまうのではない」²⁵⁾

その数年後に書かれた『自由意志論』ではこうある。

「……信ずること **credere** と知解すること **intelligere** は同じではなく、また我々が知解を欲する重大な神に関する問題についてはまず信ずべきである」²⁶⁾

これこそ有名な「**知解を求める信仰**」**fides quaerens intelligentiam**である。

—— まず我々は永遠不変な存在として神が本当に

存在することを信じる。

—— その信仰を前提にして我々は、神という絶対確実な存在を把握するために、哲学を実践していく。

—— 最終的に我々は神という絶対に確実な知識つまり真理に到達し、それを知恵として享受する。

要約すれば、哲学という世俗の知識は、信仰を土台にすることにより、知恵の獲得を標榜する神学にならなければならないのである。**目的は知恵であり、知識は手段**なのだ。そう考えたからこそアウグスチヌスはキリスト教に回心したわけである。

では回心により彼は実際に知恵を享受できたのだろうか。

「けれども、これまで多くのことを述べてきたにもかかわらず、あの言説を絶する至高の三位一体にふさわしいことを、私は何一つ述べなかったとあえて表明しよう。いや、むしろ、その不思議な知識は私の力を越えていて、私はそこへ至りえないと告白しよう」²⁷⁾

何ということだろうか。有名な庭園での回心から『三位一体論』に至るまで実に35年間も「知識は知恵へと向けられるべきであり、神への信仰に基づいて哲学をしなければならない」と一貫して説き続けながら結局、アウグスチヌスは知恵へと到達できなかったのである。

二節 知識の衰退

西暦476年、西のローマ帝国が滅亡すると西欧はいわゆる暗黒時代に陥った。ゲルマン諸族の侵入と相次ぐ戦乱により都市が荒廃し学校が消滅したため、学問は廃れてしまった。トゥールの司教のグレゴリウス(538-594)は嘆いている。

—— ガリアでは学芸は衰退し、今や消滅に瀕している。世の中の出来事を書き記すことができる人はもはや見当たらない。だから人々は嘆いている。文芸の滅んだ我々の時代は悲しい、と。²⁸⁾

だが学問が完全に消滅したわけではなかった。偉大な古典的教養が急激に失われていくなかで、わずかにキリスト教会が古代の文化を伝えていた。その中核となったのは各地の修道院だった。

本来、修道院とは信徒が世俗の塵埃を離れ祈祷に専心する修行の場であるから、その多くは人里離れた山間部に建てられ、周囲から隔絶された別世界を

おのずと形成していた。そんな孤立した環境だったからこそ、都市文明が崩壊し、蛮族の移動が相次いだ古代末期の混乱にあって結果的に古典文化を伝える孤塁となったのである。ただし修道院であるから、そこで伝えられた文化の根幹はやはり聖書であり教父たちの著作であった。だが時代が下り、日常言語とラテン語との解離が進んでくると、まずはラテン語から教えなければならなくなった。そこでローマの古典が教材として使われ、またその理解のために世俗の学問についての知識も不可欠とされることになった。

同じ古典でもギリシア古典は事情が違った。もともとローマではギリシア古典のラテン語訳は意外に少なかった。知識人の多くはギリシア語を学び、直接、ギリシア古典に触れるのが学問の本道だった。だが帝国の東西分裂が固定化し、東のギリシア語圏と疎遠になっていくと、自然に西方の知識人たちがギリシア古典に接する機会も減っていった。それを憂いたボエチウス(480-525)がプラトンとアリストテレスの全著作の翻訳に着手したものの、政敵の讒言により東ゴート国王に処刑されてしまい、結果的に彼によりラテン語に訳されたのはアリストテレスの『範疇論』と『命題論』の二論理学書だけだった。

このボエチウスの悲劇が思想史に与えた影響は大きかった。実際にはアリストテレスの著作は論理学関係だけでも『分析論前書』、『分析論後書』、『トピカ』、『詭弁論駁論』と続くのであるが、六書あるうちの二つしか伝わらなかったのである。そのため以後の西欧の知識人は十二世紀後半にイベリア半島からアリストテレスの翻訳が入ってくるまで、アウグスチヌスを土台にしてプラトン主義的に神学を構築するしかなかった。²⁹⁾

非業の死を遂げたボエチウスとは対照的にカッシオドルス(485頃-583頃)は栄誉と長寿に恵まれた。ボエチウスの失脚を承けて東ゴートの宰相になった彼は引退後、自らの修道院で聖書を研究する傍ら、修道士たちに学習の順序を示した『聖俗の学問の綱要』(543-555)を著した。そこでの方針は聖書解釈のために世俗の学問を用いるというもので、知恵に知識を従属させるアウグスチヌスの理想を踏襲するものだった。二巻より成る同書の第一巻は聖書の要約であるのに対し、第二巻は自由七学科を取りあげ、なかでも論理学や算術や音楽関係はかなり詳しくまとめられていた。そのため聖書の概略を知りたい者

は第一巻を写したのに対し、第二巻は自由学芸の手引書としてさかんに筆写された。だがカッシオドルスが意図していた聖書と世俗の学問との有機的連携という点から見ると、第一巻のみ、第二巻のみの写本は多く現存しているが、両方含んだ写本は三部しかないようだから、神に関する知恵と世俗の知識は既に当時から別のものだったことになるう。

西暦 800 年、フランク王国のカロルス 1 世(742-814)は法王レオ 3 世より帝冠を授けられた。最近ではこの年を以て古代末期と中世の区分とすることで史家の意見は一致している。

広大な領土をまとめる共通語としてラテン語を使える官吏を養成するため、カロルスは以前からあった宮廷学校を拡充し、首都アーヘンに内外から多くの学者や知識人を集め、学術を振興した。また各地に教会や修道院を建設してキリスト教による社会の統一を推進した。その一環としてイングランドからアルクイヌス(730頃-804)を招聘し、ヴルガタ版聖書を校訂させたり、ディアコヌス(720/26-795/99)に典礼での朗読用に教父の著作から撰文集を作らせたりした。これにより古代のギリシア・ローマの文化とゲルマン文化がキリスト教精神の下で融合し、西欧社会の精神的原型が形成されることになった。

だが、こうしたカロルス指導下のカロリング・ルネサンスは狭い宮廷の中での文芸復興であったから、彼の死後に王国が分裂すると、おりからの北方のノルマン人の跳梁も相俟って、文芸復興の機運は衰退してしまった。学問の復活が本格化するのはいずれから約一世紀に及ぶ停滞のあとだった。

三節 理性主義の萌芽

世情が落ち着き、知的活動を再開しようとする機運が高まってくると当然のことながらキリスト教の教えを論理的に理解しようとする人々が出て来た。その典型的人物がトゥールのベレンガリウス(1000頃-1088没)である。清廉な人柄と豊かな学識で知られていた彼は『聖餐論』において権威よりも論理を重視する姿勢を示した。

—— 君は私に言う。「聖なる権威を捨てて君は弁証論に逃げているが、信仰の奥義について答えたい私は弁証論的理性よりも、むしろ聖なる権威に耳を傾け、答えることにしたい」と。それに対して本当のことを教えてやるのも我々の仕事の一部だろう。君が弁証論

を知らないばかりに、この私が君の依る聖なる権威を捨てた、などと思われたいためにね。³⁰⁾

ベレンガリウスに言わせれば、信仰の真理を説明するために聖書や聖人といった権威を持ち出すと、そこにはどうしても恣意性が入り込んでしまう。聖典といえども読む人次第でどうにでも解釈できるからである。

——「聖なる権威を捨てた」と君は私を疑って止まないが、そう言う君こそ真理によってではなく曲解に基づいて書くことになるのは、神に対する近さという点から明らかなだよ。だって君の場合、聖なる権威を世間に持ち出す必然性という点で、そういうことをするかしないかの余地が生じてしまうじゃないか。これに対し、真理の認識においては理性を働かせる方が、事実関係が明らかなから、比較できないほど優れていることは、精神錯乱の盲目でもなければ誰も否定しないだろう。だから主自身が言っておられるのだ、「あなた方の中に光がある、歩きなさい」とね。³¹⁾

——真理を明らかにするために弁証論的言辞を用いることは、論理学へ逃げ込むことではない。神の知恵と神の能力は決して弁証論を嫌がりはいないよ。そうではなくて神の敵たちを学問で論破することなんだ。³²⁾

——人間に最もふさわしいことは、あらゆる面において弁証論を活用することだ。弁証論を活用することとは理性を活用することだ。だから弁証論を用いない者は、そもそも人間は理性という点において神の像へと向けて創られたのだから、自分の名誉を捨てていることになるわけで、神の像への更新を自ら不可能にしているのだ。³³⁾

つまり「人間は神から理性を受けられたのだから、理性を積極的に使うことは神の創造の目的に応えることである。すると権威を持ち出すよりも、弁証論に則って理詰め思考していく方がより神の意志に沿っている」とベレンガリウスは言いたいのである。かくして彼は弁証論を聖餐に適用した。周知のようにカトリックでは、典礼において司祭が祝福するとパンはキリストの肉に、葡萄酒はキリストの血に、見た目は変わらなくても、本当に変化するとされる。これが聖体変化 transsubstantia の教えである。

しかしベレンガリウスに言わせれば、偶有性は実体ぬきにはあり得ず、そして司祭が祝福を与えてもパンには依然としてパンの外見や味や匂いなどの偶有性が留まっている以上、そこにあるのはパンの実体であって、キリストの肉ではないと主張した。だから聖体拝領と言っても、それは象徴的意味に理解すべきだと言うわけである。

このベレンガリウスのように理性による論理的思考を重視する態度を**理性主義 rationalism** と呼ぶ。この立場をつきつめてゆけば、いずれは教会の権威にも疑問がつけられるのは明らかである。当然、多くの反論が寄せられた。例えばオスティアの大司教ペトルス・ダミアニ (1007-1072) は一部の聖職者に論理学や修辞学を過大に評価する風潮があることを憂い、世俗の学問を過信することを戒めた。『神の全能について』と題された小論には有名な一節がある。

「学者たちや人間的な学問にはいかなる知識 peritia も見出されないから、彼らは好奇心の雲によって教会の純粋な教えをかき乱すことになってしまう。まことに弁証論者たちや修辞学者たちの様々な議論から出てくるものを安易に神の神秘の能力に当てはめるべきではないのだ。……だが人間の学問の知識を、仮に聖なる言葉を論ずるために適用するなら、先走って誤ることがないように、傲慢にも自分に教師の権限を持たせてはならず、あたかも侍女が女主人に対する如く、隷属の従順さによって仕えなければならない。そして人が外的な言葉がもたらす帰結に従う限りは、内なる能力の光と真理の正しい小径を失ってしまうのである」³⁴⁾

世俗の学問は聖書に先んじるものではなく、あたかも女中が奥方に仕えるように、聖書に従うものでなければならない —— これこそ中世における哲学の地位を如実に示すものである。

哲学は神学の婢女

Philosophia Ancilla Theologiae

ペトルスによれば神は全能であるから、神を認識するのに特別な知識が必要なわけではない。素直に信じればいいのである。³⁵⁾ そうすれば真の知恵である神が自ら真の光を与えてくれるはずなのである。³⁶⁾

ノルマンディーのル・ベック修道院長のランフランク (1004-1089) も同じような見解だった。

「知恵が弁証論的に語られるところでは、それにより、十字架すなわちキリストの死は、それを単純に理解する人々によって空虚なものにされてしまうようである。『なぜなら神は不死である。だがキリストは神である。従ってキリストは不死である。だが不死なら、彼は死ぬことはできなかった』というように。こうしたことは乙女マリアの出産やその他のいろいろな秘跡についても同様である。だが慧敏に考える者たちには弁証論は神の秘跡に矛盾するものではない。もし弁証論が非常に正しく理解されるなら、様々な問題を吟味するさい、それらをより豊かで確かなものにしてくれるのである」³⁷⁾

この引用の前半でランフランクスは知恵 *sapientia* つまり神に関する事柄を、世俗の知識である弁証論 *dialectica* を用いて論理的に理解しようとする愚を戒めている。しかし注目すべきは後半である。彼は弁証論を無礙に斥けはしない。つまり理性が正しく使われるなら、信仰に属する事柄と矛盾はないと言うのである。いや、矛盾しないどころか、弁証論によってより確実なものにされるとまで述べている。となるとランフランクスの言わんとすることは、あくまで信仰を前提にしたうえで、聖書の教えの枠内で弁証論を積極的に活用せよ、との知識活用の奨めであろう。この立場を実践したのが弟子のアンセルムスである。

四節 アンセルムスの場合

しばしば「スコラ学の父」と呼ばれるカンタベリーのアンセルムス (1033-1109) は「アウグスチヌスと一致しないことは全く書いていない」³⁸⁾ と明言するほどアウグスチヌスに傾倒していた。北イタリアに生まれた彼は1059年にル・ベック修道院に入り、院長のランフランクスの下で研鑽した。そして副院長時代の1076年に修道士たちの求めに応じて執筆したのが『モノロギオン』である。その序文によると、修道士たちの要望とは次のようなものだった。

「(彼らは) そこで行う黙想 *meditatio* はどのようなことも聖書の權威に全く頼らず、個々の研究を通して達した結論はどれも平易な文体、一般向けの立証、そして単純な討議によるもので、それは推理の必然性が簡潔に要求し、真理の明晰性が明らかに証明するものであることを表示してほしいとした」³⁹⁾

なんと修道士たちは、聖書抜きに、つまり全くの

理屈だけで神について教えてほしい、と要求したのである。修道院に入るくらいだから相当な信仰を持っていたと思うのだが、そんな彼らでも出来ることなら理性的に知りたかったのである。この一例からも、人間はいくら強く信じたとしても、それを理解できなければ絶対に満足できない動物であることがわかる。

こうした同僚たちの何とも不遜な要望に応えるため、アンセルムス自身も「ただ思考することによって」 *sola cogitatione* 考察する者になったつもりで論述した。⁴⁰⁾ 実際、彼に言わせれば、神とその被造物に関する信仰の多くは普通に理性を働かせれば理解可能なことだった。

「最高にして自己充足している一つの本性が存在し、他のすべてはそれの全能の善性によってあること、ならびに我々が神について信じている他の多くのことを、ただ理性だけがおよそ納得させることができるのである」⁴¹⁾

このように理性だけで神について多くを知ることができるとする姿勢は次の『プロスロギオン』にも窺える。

「……ただ一つの論証 *argumentum* で、しかもその論証自身の証明に他の論証を必要とせず、それだけで神が真に存在すること、神が他のどのようなものをも必要としない至高の善であり、全てのものがその存在と幸福のためには神を必要としていること、そして神の実体について私たちが信じている全てのことを証明するに足るようなものがないものかと自分に問い始めた」⁴²⁾

つまり『モノロギオン』のように多数の論証を複雑に操るのではなく、神の存在からその属性に至るまで一切を、それ一つで説明できるような論証が何かあるだろうか、と自問自答したのである。これだけ聞くと、同僚の求めに応じているうちに、いつしかアンセルムス自身も理性主義に陥っていたような印象を受けるが、絶対に見落としてならないことは彼のこうした理性的姿勢にはあくまでも信仰が先んじていたということである。

「主よ、私はあなたの高みを極めることを試みる者ではありません。……しかし私の心が信じ、また愛しているあなたの真理を、いづれかでも理解することを望みます。そもそも私は信じるために理解することは望まず、理解するために信じています」⁴³⁾

つまりアンセルムスは神について、そのすべてを

理解できるわけではないが、理解可能な範囲内で理解しようと努め、そのために信じると告白しているのである。まさに知解を求める信仰である。そして実際に彼は、神に対する信仰から神の存在を導き出していく。⁴⁴⁾

- まず我々は、神とは「それよりも大なるものが何も考えられ得ない何か」 *aliquid quo nihil maius cogitari possit* であると信じている。
- この「それよりも大なるものが何も考えられ得ない何か」は少なくとも私の理解の内には存在する。
- しかし、この「それよりも大なるものが考えられ得ない何か」が私の理解の内には存在しないということはある得ない。なぜなら、理解の内には存在しないものよりも、理解の外にも存在しているものの方が「それよりも大なるものが何も考えられ得ない何か」だからである。
- すると「それよりも大なるものが何も考えられ得ない何か」は必ず存在している。かくして神の存在は理屈だけで確実に導かれる。

有名な神の存在論的証明である。この論理の有効性については当時から賛否両論あるが、アンセルムスは神の存在を証明できたとして次々に信仰を合理的に理解しようとしていった。1098年の二巻の書物『神はなぜ人間となられたか』では著作の内容をこう説明している。

「(第一巻では)キリストに全く何事も起こらなかったかのように彼を括弧のうちに入れ、どのような人間も彼なしでは救われることが不可能であることを必然的推論 *rationibus necessariis* で立証する。一方、第二巻では、キリストについて同じように何事も知られていないこととして、全人間すなわち肉体も霊魂もいつの日か至福の不滅性を味わうように人間の本性が創られたこと、また人間について、その創造された目的は果たされなければならないが、それは人・神を通してのみ行われること、さらに私たちがキリストについて信じていることはすべて必然的に実現すべきことを同じように明晰な推論と真理によって証明する」⁴⁵⁾

ここには信仰を土台としつつも、同時にその信仰の対象であるキリストをも括弧に入れて、つまりキリストの権威を借りることなく、理性によって受肉

と救済の真実を解き明かそうとする姿勢が如実に現われている。すると、たとえ部分的であれ信仰箇条が理性によって説明可能なら、祈り中心の修道院の生活よりも理屈中心の生活の方が知恵に到達するうえで有利であろう。しかし祈ることは誰でもできるが、理屈は学ぶ必要がある。すると知恵を究めたいと願うなら、まず理屈を教えてくれるところに出向く必要がでてくる。かくして登場するのが学校 *schola* である。

二章 知識の復興

一節 中世の春

各地の司教区を統括する司教が居住する教会の礼拝堂には司教専用の椅子が置かれている。それが司教座 *cathedra* である。ゆえにその教会を特別に司教座教会と呼ぶ。

11世紀から12世紀に入り、気候の温暖化や農業技術の改良などで生産が増大し流通が拡大すると各地に都市が復活するようになった。都市が発達するにつれ、司教座が置かれている礼拝堂も大きなものが作られるようになった。それが大聖堂 *cathedrale* である。人口の増加は聖職者の需要の増加ということでもあるから、各司教区は聖職者養成のために司教座聖堂に付属する形で学校を設置し、司教あるいは主として事務方において司教を補佐する聖堂直属の聖職者 *Canonicus* で構成される聖堂参事会 *Capitulum* が運営に携わった。それが司教座聖堂付属学校あるいは司教座聖堂参事会学校である。

都市に多くの人が集まるようになると、学問の主役もそれまでの修道院から、これらの都市の学校に移った。そこでは、神に近づこうとする霊性が支配する修道院とは異なり、司牧のための実践性や平易な言葉で語る論理性に教育の主眼が置かれていた。そこで十二世紀は僧院の堅苦しさから世俗の快活さへの脱却が始まった時代として今日ではしばしば中世の春とか十二世紀ルネサンスと呼ばれる。

世俗化の流れが出てくると、かつてのベレンガリウスのように神に関する事柄をも論理的に理解しようとする風潮がまた現われてくる。パリのノートルダム大聖堂参事会付属学校で教えていたペトルス・アベラルドゥス (1079-1142) はまさにそうした時代の申し子だった。生来、才知にあふれていた彼は騎士の長男であったにもかかわらず相続権を放棄して

パリに出た。また好学の士であった父も息子が学問の道に進むことを許した。ちなみに父の名は奇しくもベレンガリウスだった。⁴⁶⁾

パリで弁証論を学んだアベラルドゥスはたちまち師をしのぐ名声を得た。それを妬んだ師から袂を分かち自立してのち、三十代になってから別の師の下で神学を学び始めた。しかし陳腐な事柄を繰り返すだけの師に失望し、余り授業に出なくなった。その当時の出来事が彼の自伝に出てくる。それはまさに彼の学問観を伝える逸話である。⁴⁷⁾

仲間の学生たちから「聖書を読むことについてどう思うか」と尋ねられ、彼は「魂の救済を教えてくれるから、これ以上に有益なことはない」と答えて続ける。

—— でも聖人たちの書いたものを理解するのに、彼らの書いたものや注釈だけでは足らず、他にも手引き *magisterium* が必要だなんて、僕には不思議だね。

—— ほう、すると君は自分一人で理解できるって言うのかい。こういう大事なことは熟練することで少しずつより確かな釈義を作り出していかなければ駄目だよ。

—— いや、僕はそう思わないね。熟練 *usus* を通してなんて僕のやり方じゃないよ。僕のやり方は才能 *ingenium* によってだよ。

熟練ではなく才能 —— つまり自分の生来の能力を恃むということである。「誰がこう言っている」とか「あの本にはこう書いてある」など権威を持ち出すのではなく、あくまで自分の頭で勝負するというのであるから、これは既に見たように権威よりも論理を重視するベレンガリウスの態度と軌を一にする。当然、周囲からは白い眼で見られたが、そんな彼のところに多くの学生が押しかけた。

1119年、女性問題で心身共に傷ついたアベラルドゥスは聖ドニ修道院入りを余儀なくされた。だが彼の才知がそれで萎えてしまうことはなかった。修道士たちに乞われて神学を講じていくうちに、信仰の玄義をめぐる生来の探究心に火が点いたのである。これについて彼はこう書いている。

「たまたま私は我々の信仰の基礎を人間の理性の類推によって説明しようと思い、私の学生たちのために『神の一性と三性について』という神学の論文をまとめた。彼らは人間的また哲学的理由を求め、言われ得ることよりも理解可能なことを強く願っていた。彼らが言うには、理解

が伴わないことをいくら言っても、それは言葉が表面的に膨れているだけであり、まず理解されないことには信じられることはあり得ず、だから当人もそれを聞く人々も知性によって把握できないようなことを他の人々に説教するのは滑稽なのであり、まさに『盲人が盲人たちを手引きする』なのである」⁴⁸⁾

キリスト教信仰を理性で解明しようとしたこの論文は1121年、ソワッソンの公会議にかけられ、著者自らの手により焚書に処された。当初の告発の理由は「三つの神の存在を説いたから」だったが、いくら審問してもそれを裏付けるような語句は見つからず、最終的には「法王庁や教会の権威によることなく公に注釈をしたこと、また多くの者に筆写させたこと」が咎とされた。⁴⁹⁾ この事実から我々は、権威に依ることなく信仰を理づめに理解しようとする理性主義に教会がいかに神経質になっていたか見て取ることができよう。

焚書の憂き目に遭いながらもアベラルドゥスの知的探究心は怯まなかった。聖ドニ修道院から隣接地の領主の下に身を寄せ、荒野に庵を結びながら彼は聖書の論理的理解のために執筆を続けた。

そもそも修道院学校や司教座聖堂付属学校では権威として教父たちの言葉が広く教えられていたが、彼らの言うところには多くの矛盾があった。そこでアベラルドゥスは「人間の信仰は理性にもとづくべきか否か / 神は単一である否か / 神は全能であるか否か」など矛盾する命題ばかりを158も選び、『然りと否』を作成した。序文において彼は、回答を出すのではなく、思考力を刺激することが自分の願いであると述べている。

—— 言語が様々であるように、聖人たちが語っていることも様々であり、それらの中には見たところ矛盾しているものも多い。⁵⁰⁾

—— しかし真理であるキリストは聖人たちに「話すのはあなたたちではなく、あなたたちの中で語る父の霊である」と言っている。すると聖人たちに恵みが欠けていたわけではなく、それを読む我々に恵みが欠けているということだろう。⁵¹⁾

—— まことにアウグスチヌスも述べているように聖書そのものは常に絶対に正しい。そこに矛盾があるとしたら、写本が不正確なのか、翻訳の間違いなのか、我々の理解が足りないかのいずれかなのである。⁵²⁾

—— となれば我々は聖人たちの矛盾について、考えねばならない。そのためには熱心に問い続けねばならない。矛盾した箇所が集められ、かつその著作の権威が保障されているほど、読む者は刺激を受けて真理の探究へと駆り立てられるものである。⁵³⁾

このように『然りと否』は読む者を懐疑に陥らせることで逆説的に真理探究の炎を掻き立てようとしたものだった。彼は言う。

「……我々は疑うことによって探求するようになり、探求することによって真理を把握するのである」⁵⁴⁾

ここにはアンセルムスのように「理解するために、まず信じる」という姿勢は窺がえない。「知りたいから学ぶ」という探求心が前面に出ている。このような態度はアウグスチヌスなら欲望 *cupiditas* として強く非難したであろうが、アベラルドゥスにしてみれば「知りたい」という人間の自然な欲望に問題などあろうはずがなかった。なにしろ彼は肉欲すら肯定していたからである。

「肉の自然本性的快楽は何であれ罪に帰せられるべきではなく、またそれが達成されたときに快楽が感じられることが必然的であるようなことにおいて、我々が快楽を得ることは咎とみなされるべきでないことは明らかである」⁵⁵⁾

このようなことを公言したため、彼は当時のキリスト教界に絶大な影響力を誇っていたクレルヴォー修道院長のベルナルドゥス (1090-1153) から告発された。徹底した清貧と霊性の人であったベルナルドゥスにしてみれば優秀な若者が知識を求めて都市へと向かう風潮が墮落と感じられ、恐らく驕慢なアベラルドゥスこそ元凶に思えたのだろう。

1140年、サンスの公会議でアベラルドゥスは「邪悪な信仰を作り上げたキリスト教の敵」として異端の宣告を受けたが、幸いにもベルナルドゥスと親交のあったクリュニー修道院のペトルス・ヴェネラビリス (1092頃-1156) に保護され、同修道院で失意のうちに最晩年を過ごした。

二節 大学の発生

都市がさらに発達していくと、貴族や聖職者などの支配層と農民とのあいだに第三階級として市民が発生した。都市に生きる彼らは世俗的で実用を重んじたし、国家も行政組織の整備に乗り出すようになっていたから、法学のような世俗の学問に対する需

要が高まった。その結果、司教座聖堂付属学校や修道院学校には属さない世俗の知識人が現れるようになった。彼らには聖職禄のような固定給などなかったから、生計を立てるためには多くの学生を集める必要があり、そのためには分かりやすく魅力的に教えなければならなかった。すると当然、学問にも変化が出てこよう。すなわち**知識の体系化**である。

北イタリアの交易の要衝だったボローニャではイルネリウス (1050-1130) がユスティニアヌス法典を註解するという形を採ることで学問としての法学を確立した。

さらに同じボローニャで1140年頃、修道士のグラティアヌス (1100頃-1150頃) が『法令集』を著し、これにより教会法が神学から独立した。4世紀から12世紀半ばにかけての法王、公会議、司教などによる3500以上の法令を含む同書は聖職者の職能に関するミニストリ、裁判や訴訟関係のネゴティア、典礼や秘蹟関係のサクラメンタの三部より成り、同一の主題について矛盾する条文を併記し、どれが選ばれるべきかを立法者の権威、日付、場所、立法の成立事情などから総合的に判断するというもので、ほぼ同時期に哲学においてアベラルドゥスが『然りと否』で示した方法に通じるものがあつた。

このように市民法と教会法のいずれもがいち早く学術化されたボローニャには既に12世紀半ばにはアルプス以北からも学生が来ていたようである。各地から集った学生たちは、当時の同業者組合 *guild* になり互助組織を結成した。それが学生組合 *universitas* である。彼らは一斉退去をちらつかせることで、都市の商人たちから下宿料などで有利な条件を引き出そうとした。さらに教師に対しても受講放棄をちらつかせることで授業改善を約束させた。例えば1317年の学則では許可なしに休講しないこと、正規の講義に5人以上の聴講者を確保できなかったら罰金、鐘と共に初めて次に鐘が鳴ったら1分以内に終了すること、などが規定されていた。

このように注文の多い学生たちに対抗するため、教師たちも教師組合 *collegium* を結成するようになった。こちらはまさに学匠たちの純然たるギルドであるから、それに加盟するには、教えるだけの力量があると認められねばならない。そこで希望者は教師や学生たちの前で討論 *disputatio* を行い、出席者の過半数の同意を得た者に師範免許 *licentia docendi* が授けられるようになった。こうして晴れて免許状を

手にした学生は卒業式を兼ねた組合入会式 *inceptio* に臨み、その夜は本人主催の盛大な祝宴が開かれた。

こうした学生組合と教師組合がいつしか一つになり今日の大学が誕生した。遅くとも12世紀末までにはボローニャ、パリ、オクスフォードに大学が自然発生していたようである。これらのうち最も規模が大きかったのはノートルダムの司教座聖堂附属学校を中心に複数の学校が連合したパリ大学で、1200年には国王のフィリップ2世（1165-1223）から学生の法的優遇について勅許状を得た。同大学は人口十万のパリにあって三千とも五千ともいわれる学生を擁し、基礎科目である七由学科を教える学芸学部 *Facultas artium* の上に神学部、法学部、医学部が設けられていた。もっとも上級の三学部に進む者は少なく、学生の三分の二は学芸学部に所属していたらしい。そのため教師の数も学芸学部が突出して多く、時代は下るが1348年の時点で神学部が32人、法学部が18人、医学部が46人だったのに対し、学芸学部は514人もいた。⁵⁶⁾ ちなみに大学の角帽の四つの角はパリ大学のこれら四つの学部を表わしているらしい。

1215年に法王庁特使のロベルトゥスにより定められた同大学の最初の学則によると、学芸学部では学生は少なくとも六年は聴講したあと、試験と論文により、まずバカラレウス（免許候補者）となった。多くの学生はその時点で故郷に帰ったようだが、実際に教師を志望するバカラレウスについては、見習（バカラレウス）として教授の指導下で学生相手に最低でも二年間、原典講読を行ったあと、学部の教師3人とノートルダムの司教座聖堂参事会の文書局長が指名した3人の教師とによる詮議で過半数を得られれば、師範免許が認められた。ただし21歳以上でなければならなかった。⁵⁷⁾

続く神学部は少なくとも八年間は在籍せねばならなかった。制度上、上級三学部のすべての学生は学芸科目の師範免許を持っていたから、その多くは学芸学部の教師を兼ねることで学費を稼いでいたらしい。彼らは特定の教授の講義を五年にわたり聴講して神学のバカラレウス（見習）となったあと、聖書講師として聖書の講読と注釈を一年行い、それが終わると今度は命題集講師としてペトルス・ロンバルドゥス（1100頃-1160）の『命題集』を二年かけて註解した。1150年から52年にかけて成立した同書は神の属性、天使や人間の創造、キリストの受肉、世界の終末などに関する教父たちの言葉を四巻にわたり編集したもので、その体系性と明晰さから教科書と

して広く用いられるようになったものである。⁵⁸⁾ 全四巻の註解を終えると、神学部教員の過半数の同意を得たうえでようやく神学の師範免許が交付されたが、こちらも35歳以上という年齢制限がつけられていた。⁵⁹⁾

パリ大学神学部の教授 *magister* の定員は1254年の時点においては15人で、職務として講義 *lectio*、討論 *disputatio*、説教 *praedicatio* の三つがあった。講義は1215年の規定では朝の一、二時間目は主として教授が授業をしていたようで、見習たちはそれを聴講したあと、三時間目以降に自分の授業をしたり、学芸学部に出向いていたようである。⁶⁰⁾

ちなみに1309年のトゥールーズ大学の学則によると、学芸学部の一時間目の開始は午前6時だった。午前中に90分授業が四回行われ、一時間目と二時間目は教授（マギステル）による正講義、三時間目は見習が教授の授業を繰り返し、四時間目は特に指定はされていなかった。五時間目は見習たちの会合の時間で、午後三時から六時間目には教授や見習が特別講義を行ったようである。⁶¹⁾

討論は神学部生必修の毎週の定期討論と年二回の自由討論があった。後者については冬学期は降誕祭の頃、夏学期は復活祭の頃に行われ、一般にも公開されていた。定期討論も自由討論も実際に討論するのは学生や見習だったが、議論を整理し最終判定を下す裁定 *determinatio* は必ず教授が行なった。

三節 アリストテレスの流入

12世紀まで西欧で知られていたアリストテレスの著作は、先にも述べたボエチウスによる論理学関係の最初の二篇すなわち『範疇論』と『命題論』だけだった。1128年頃、ベネチアのヤコブが残りの『分析論前書』、『分析論後書』、『トピカ』、『詭弁論駁論』をギリシア語からラテン語に翻訳した。さらにトレドのドミニクス・グンディサリヌス（1110頃-1190頃）がイスラムの哲学者アビケンナ（980-1037）による一連のアリストテレス註解書をアラビア語からラテン語に翻訳した。すなわち『自然学』、『天と地について』、『靈魂について』（有名な『靈魂論』 *De Anima* ではなく自然学小論集の第六論文）、『形而上学』である。さらに彼はアルガゼルの『形而上学』、アビケブロンの『生命の泉』も翻訳した。

だが同じトレドの翻訳者と言うなら12世紀後半のクレモナのゲラルドゥス（1114頃-1187）を忘れるわけにはいかない。もともと彼はラテン語の学問に通

じていたが、ラテン訳がなかったプトレマイオスの『アルマゲスト』に惹かれてトレドへ赴いたらしい。すると多くの分野にわたりアラビア語の書物があることを知り、アラビア語を学んだと言われている。かくして1187年に死去するまで『アルマゲスト』はもとよりアリストテレスの『自然学』、『天体論』、『生成消滅論』、『気象学』(1, 2, 3巻)、『分析論後書』、エウクレイデスの『幾何学原論』、テオドシウスの『球面幾何学』、ヒポクラテス、ガレノスさらには三冊の錬金術書など実に71冊ものアラビア語の書物をラテン語に訳した。

さらに13世紀前半には、やはりトレドでミカエル・スコトゥス(1235年頃没)がアリストテレスの『靈魂論』、『天体論』、『自然学』ならびに靈魂関係の論文集とそれらについてのイスラムの哲学者アベロエス(1126-1188)の注釈を訳した。

このように12世紀半ば以降、アリストテレスを始めとする古代ギリシアのラテン訳文献が大量に流入したことにより、世紀が変わった頃には西欧でも自然学関係のアリストテレスの学説が教えられるようになった。その結果、西欧思想史に重大な地殻変動が発生することになった。

既に見たように人間の究極の幸福とは神を認識することであり、それが知恵であった。聖書は神の啓示によって書かれたものであるから、そこにはまさに知恵が秘められているはずで、だからその知恵を解き明かすために世俗の学問は用いられるべきだと考えられていた。

知恵のために知識を用いる —— このアウグスチヌス以来の理想を実現するうえで今や新しい道具が手に入ったのである。その結果、聖書を、とりわけ『創世記』をアリストテレスによって解き明かそうとする機運が高まった。

だがアリストテレスやアピケンナ、アベロエスはキリスト教とは無関係だったから、彼らが展開する思想はキリスト教の教えに合致していなかった。もちろん無関係というならプラトンも同じだったが、プラトンの場合は、回心前のユスティノスやアウグスチヌスがプラトン哲学に親しんでいたことから窺えるように、肉体を「魂の牢獄」と蔑み天上のアイデアを希求する神秘的な点などキリスト教に通じるところが多々あった。具体的には『パイドン』では靈魂不滅、『ティマイオス』では神による世界の創造、『法律』では神の摂理などが述べられており、それら

はキリスト教的に換骨奪胎することが可能だった。

ところがプラトンに比べてアリストテレスは地上的で、およそ宗教性には欠けていた。そのため聖書やキリスト教神学とはまるで違うことがアリストテレスにおいて理詰めにも語られるとき、読む側としては「聖書とアリストテレス哲学のどちらが正しいのか」と疑問を懷き、次第に「啓示に基づく神学は本当に学問と言えるのか」と考えざるを得なくなっていたのである。

西欧のキリスト教徒たちが感じたアリストテレス哲学の問題点は主に三つだった。

- (1) 世界の永遠性
- (2) 神の摂理否定
- (3) 知性単一説

(1) 聖書では冒頭に「初めに神は天と地を創造した」とある。さらにキリストは再三にわたり世界の終末を語っていた。ということは世界には始まりもあれば終わりもあるわけである。

しかるにアリストテレスによれば世界は三層構造である。すなわち最下層には生成消滅し運動する地上の世界、その上には永遠不滅で運動する星たちの世界、そして最上層に永遠不滅で不動の神々の世界である。これら三つの世界は上の世界が下の世界の運動の原因になっている。最上層の神々が永遠である以上、それによって動かされる星たちの世界も永遠であろう。つまり世界には始まりも終わりもないことになり、キリスト教が説く天地創造ならびに世界の終末に反する。

それだけではない。アリストテレスによる限り、永遠不動なる神々によって動かされる天体たちは永遠に同じ動きをする。ということは、そうした天体たちが地上に引き起こす結果も永遠に同じであるから、地上界は生成消滅の世界ではあっても全く同じ出来事が現われては消えていき、それが永遠に繰り返されるはずである。つまり永劫回帰である。すると人祖アダムが創造される以前にも別のアダムが創造されていたことになるし、ティベリウス帝の世に出現したイエス・キリストよりも前に別のキリストがいたことになろう。同じ理屈が未来においても無限に繰り返されるわけである。これでは、人類史上たった一度の奇蹟としてのキリストの受肉や救済の有難みが薄れてしまう。同じくカトリック教会にしても、過去において存在し、これから先も出現する

であろう無数の教会のうちの一つというように相対化されてしまう。

(2) さらに聖書の神は有名な「紅海の奇蹟」に見られるように世界に介入する神であり、一人一人の人生も含めてこの世のすべては神の思し召し、つまり摂理 *providentia* による。

しかるにアリストテレスによれば神は不動の動者であるから、世界に全く介入しない。また神の活動とは「思惟の思惟」つまり自分で自分を認識しているだけだから、被造物に無関係である。すると世界は神の意志とは無関係に動いていることになる。こうなると、いくら信仰しても、神から何の報酬もないわけだから、信じる意味がなくなってしまう。

(3) またアリストテレスによれば、靈魂は人間の形相である。これについて『靈魂論』ではこうある。

「しかし靈魂は我々がそれによって第一義的な意味で生き、感覚し、また思惟するところのものである。こんな次第であるから、従って靈魂は一種の定義、あるいは形相であるということになるだろう……」⁶²⁾

人間の場合、身体の形相である靈魂とは理性 *nous* であり、理性である以上、その機能は「知ること、認識すること」である。だが「知る」とか「認識する」というのは「知らない状態」から「知った状態」へと変化することであるから、理性にはある種の可変性があることになる。そこで、まず措定されるのが受動理性 *nous pathētikos* である。だが受動理性それ自体は「知りうる」という可能態であるから、それを実際に「知った」状態へと引き上げるためには、既に現実態にあるものが予め存在していなければならない。そこで考えられるのが能動理性 *nous poiētikos* である。すると生じる問題は、この能動理性をどこに置くか、ということである。

「従って靈魂のいわゆる理性……は、思惟する以前は、現実的にはあるものどもの何ものでもないことになる。それゆえまた理性が身体に混合されているというのは道理に合わない……ただし靈魂はその全体がではなく、むしろ思惟的な靈魂がそうであり、またそれは現実的にそのエイドスであるのではなく、可能的にそうなのである」⁶³⁾

アリストテレスの文章は曖昧で昔から多くの読者を悩ませてきたが、どうも能動理性については身体

の外にあると考えていたように思われる。身体という滅びるものから離れているとすると、当然この能動理性は不滅ということになろう。ではその正体とは何なのか。

当時、アリストテレスの最大の註解者とされていたアベロエスは、能動理性は全人類で一つであり、それは天上に存在していると考えた。この天上の能動理性が一人一人の受動理性に働きかけることで認識が成立するのだが、その際、様々な表象から抽出されたアイデアを各人の受動理性が受け取る際に個人の意識の差が生じるとした。喩えて言うなら、能動理性とは宇宙の彼方にある超巨大な脳であり、我々一人一人はその端末なのである。情報を処理するのはあくまで能動理性であり、だから答えは一つのはずなのだが、端末である受動理性の能力に個体差があるため、現実には真から偽まで多様な結果が出てくるというわけである。

このように考えると、各人に固有なのはあくまで受動理性だけで、それは身体と共に滅びてしまうということになる。当然、個人の靈魂の不滅は否定されるし、生前の個人の行動に対する神の応報も不可能になる。やはり信仰は無意味になってしまう。

四節 アリストテレス禁止令

このようにアリストテレスの学説には基督教信仰に有害なものがあつたから、1210年、サンスで開かれたパリ教区会議はアリストテレスの自然学関係書を禁止した。

—— パリにおいては公的であれ私的であれ、アリストテレスの自然哲学に関する著作ならびにそれらに関する註解を読んで是不なる。違反者は破門する。⁶⁴⁾

だが最新の知識の流行を止めることなど不可能である。学生たちはアリストテレスを理解しようと努め、教師たちもアリストテレスの教授を売りにするのは当然である。そこで法王庁が直々に規制に乗り出した。既に本章の二節で触れたことだが1215年、法王インノケンティウス3世は枢機卿のロベルトゥス(クールソンのロベール)を遣わし、パリの諸学校が一つに組織化されることを認めた。名実ともにパリ大学の誕生である。そうすることで法王としては大学を教会の知的支えにすると同時に、強大化しつつあったフランス王権に対する御目付としたい意図もあった。

注目すべきは、このときロベルトゥスの主導下で

制定されたパリ大学最初の学則において、1210年にパリ教区が出したアリストテレス禁止令が学芸学部に対して再確認されていることである。

—— アリストテレスの六つの論理学書はすべて正規の課程において読まれねばならない。だが『倫理学』と『トピカ』の第四巻は祝日でなければ読むべきでないし、『形而上学』や自然哲学に関する書物やそれらの注釈書は読んではならない。⁶⁵⁾

この規定から逆に、学芸学部ではアリストテレスの著作が広く読まれていたことがわかる。学生の三分の二を占める学芸学部で流行しているとなれば、神学部にもアリストテレスが入ってくるのも時間の問題だろう。そこで教会側は(1)学芸学部にごくした読書規定を定めると同時に、(2)神学部を学芸学部の上に位置づけることで自由学芸の師範免許を神学部に進学するための実質的要件にし、(3)そのうえでその師範免許の認定に教会の意向も反映されるようにすることで過度に哲学に染まった学生の神学部流入を防ぐと同時に、(4)「知識はあくまで知恵のために用いられるべきである」というアウグスチヌスの理想を制度的にも示したわけである。

だがアリストテレスの自然学関係が禁止されたのはあくまで学芸学部であり、神学部ではアリストテレスが個人的に読まれていたようである。既に1220年代において神学部のギレルムス・アルティシオドレンシス(オーセールのギョーム 1231頃没)は100回、フィリップス・カンケラリウス(総長フィリップ 1236没)は130回、ギレルムス・アルベルヌス(オーベルニュのギョーム 1180頃-1249)は無数にわたってアリストテレスの著作から引用していた。⁶⁶⁾ こうした状況は1228年7月7日に法王グレゴリウス9世がパリ大学神学部の教授たちに宛てた手紙からも明らかである。

「パリで神学を教えている教授諸君に。…… 神学的知性はあたかも男性のように全ての学部にも君臨し、精神のように肉が正義の道から逸れないよう支配しなければなりません。しかるに天上の神の言葉を、哲学者たちの教説と不埒にも混合して、自分の能力に慢心し、純粋さを知らずに、それを哲学的理解へと向けている者がいます。…… 彼らは聖人たちの公認の伝統に則して神学を説くべきであり、神の知性に対抗しようとする驕慢の城壁を神への堅信により破壊すべきであり、あらゆる知性をキリストへの従順に

復帰させるべきなのですが、様々な異教の教えに囚われて本末転倒してしまい、女王を婢女に、つまり天上の教えを地上の教えに仕えさせています……」⁶⁷⁾

これを裏返せば、聖書と聖人たちの権威によるよりも、理性で神を理解しようとする神学者たちが存在していたわけである。そこでグレゴリウス9世は1231年4月13日、あらためて教書『諸学問の父』を發し1210年と1215年の禁止令を更新した。

—— 学芸の教授たちは …… ある理由により教区会議で禁止された自然学関係の書については、それらが審査され誤謬の疑いが一掃されるまでは、パリで使用してはならない。⁶⁸⁾

—— 神学の教授ならびに教員たちは、彼らが専門とする学部においては …… 自分を哲学者として見せるのではなく神学者たるべく努めるべきである。彼らは …… 神学と聖なる教父たちの書物を通して解決するにふさわ問題だけを論じるべきである。⁶⁹⁾

だが単に禁止を繰り返しただけではなかった。直後の4月23日、ギレルムス(オーセールのギョーム)、プロバンスのステファヌス、オーティのシモンの三人に法王より指示が出された。

—— 聖なる知恵に、その他の知識の書物は従属すべきである …… パリの教区会議で禁止された自然学の諸書は有用なものと無用なものを含んでいると言われているから、有用なものが無用なものにより損なわれないように …… それらの書物を精緻かつ賢明に審査して、そこに誤りあるいは読者にとって躓きや禍いになりそうな推論を見つけたら徹底的に削除し、残りの部分の疑わしい箇所については躊躇なく自在に吟味すべきである。⁷⁰⁾

この命令はギレルムスの死により実行されなかったようであるが、結果的に法王も条件付きでアリストテレスの使用を認めたとも取れよう。そこで神学部の教師たちは、それこそ聖なる知恵に知識を従属させるべく、アリストテレスを積極的に使い始めた。例えば1234年頃、ドミニコ会士で最初にパリ大学神学部教授に就任したクレモナのローランド(1259没)は彼の神学の大全書において実に672回もアリストテレスを引用している。⁷¹⁾ 1245年頃にはロジャー・ベーコンがパリで『自然学』や『形而上学』などを教えていたようであり、⁷²⁾ 1245年から48年ま

でパリ大学神学部教授を勤めたドミニコ会士のアルベルトゥス(アルベルトゥス・マグヌス)は1250年頃から、当時知られていたアリストテレスの全ての著作に注釈をつけ始めた。もはやなし崩しである。

学芸学部を席卷するアリストテレス哲学に神学部は危機感を持ったようである。1241年1月13日、ノートルダムの司教座聖堂参事会文書局長と神学部教師たちは「神学の真理に反する」として十箇条を挙げ、信仰を哲学的に理解することに警鐘を鳴らした。

—— 第一箇条。「神の本質そのものは人間によっても天使によっても見られないだろう」ということ。⁷³⁾

『第一コリント書』13章12節には「私たちは今は鏡におぼろに映ったものを見ている。だがその時には顔と顔をあわせて見ることになる」という有名な言葉がある。これは至福 *beatitudo* つまりキリスト教徒が死後において神を直視すること *Visio Dei* を述べたものであるが、この第一箇条はその可能性を明確に否定するものである。だが神学からすれば「神はその本質あるいは実体において、天使や聖人たちによって見られるであろうし、栄光を受けた霊魂によって見られている」⁷⁴⁾ と言うのが正しいのである。

—— 第四箇条。「栄光を授けられた霊魂は天使たちとともに最高天にいるのではないし、栄光を授けられた肉体もそこにいるのではなく、最高天と恒星天のあいだの水晶天にるのであり、聖母もそこにいる」ということ。⁷⁵⁾

カトリックの信仰によれば、たとえ天使ならぬ人間の霊魂であっても、死後においては栄光を受けることにより神をあるがままに見るのであり、従ってそうした至福にある霊魂は天使や聖人たちが住まう最高天に憩うているのである。それなのに、この第四箇条は祝福された死後の霊魂の地位を過少評価しているがゆえに間違いというわけである。

—— 第七箇条。「神とは別に、多くの真理が永遠からある」ということ。⁷⁶⁾

カトリックにとっては永遠の真理はただ一つ、神だけであり、それを明らかにするのが神学であるから、この第七箇条を文字通りに受け取ると、神学以外にも真理を教える学問があることになる。すると、これは「聖なる教え」を標榜する神学部の沽券に係わる大問題となる。仮に神学とは別に真理を教

える学問があるなら、神の啓示を前提にして議論を進めていく神学ははたして本当に学問と言えるのか疑問になってこよう。

このことは神学者自身も気にしていたようで実際、当時の神学部の看板教授だったアレクサンデル・ハレンシス(1185頃-1245)は最初の大全書*Summa*として知られる彼の『神学大全』を「神学の教えは知識であるか」*Utrum doctrina theologiae sit scientia*という問いで始めている。彼によれば知識には二種類あるが、神学は他のあらゆる知識を超えているから、特別に知恵 *sapientia* と呼ばれるべきだとしている。⁷⁷⁾

三章 理性主義の台頭

一節 1270年の弾劾

当時のアリストテレスの流行を如実に示すものとして必ず挙げられるのは1254年3月19日のパリ大学学芸学部のカリキュラムである。そこでは必読文献として当時知られていたアリストテレスのほとんど全ての著作が挙げられており、『自然学』も『形而上学』も含まれていた。⁷⁸⁾

このように台頭する理性主義への憂慮からであろうか、法王ウルバヌス4世は1263年1月19日、パリ大学に警告を発した。

—— 我々を非常に喜ばせてくれる知恵の仕事をしている諸君が我々の恩恵に応えてくれる限り、我々も諸君の功德に見合った愛顧を否定するものではない。だが諸君の安息を願うがゆえに我々はグレゴリウス法王に倣い、諸君について懸念するものである。教授あるいは教師の誰であれ、大学において、あるいは仲間の講師や監督者や他の者に対して、法王庁の特別な許可なしに、疑わしい見解や禁止されている見解を流布してはならない。仮に流布したとしても、法的に無効であり無益である。⁷⁹⁾

これはアリストテレスを読むこと自体を禁じたものではない。ウルバヌスが懸念しているのは、あくまでもパリに広がる危険な風潮だった。すなわちアリストテレスが当たり前になってくると、次第に、学説としての是非は脇に措いて、アリストテレスを書いてある通りに読もうとする傾向が出てきたのである。テキストに忠実に読むということは信仰ではなく論理に従うということであり、読んでいる本人に他意はなくとも、聖書と哲学との食い違いが露わ

になる。だが、それだけではない。アリストテレスをあるがままに理解しようとする事実重視の姿勢は結局のところ、理性による推論を重ねることで知識を拡大していく哲学こそ最高の学問であるとする主張に拡大していったのである。ステンベルヘンが言うところの**急進的アリストテレス主義 Radical Aristotelianism**である。

当時のそうした風潮を伝えたものとして我々はダキアのボエチウスを挙げることができよう。生没年不詳のデンマーク出身のこの人物は1270年頃にパリ大学学芸学部で教えていたことが分かる程度であるが、その『最高善について』は小著ながら哲学に寄せる彼の熱い思いが伝わってくる論文である。

—— 人間に可能な最高善とは人間の最善の能力に即したものである。人間の最善の能力とは理性もしくは知性である。すると人間に可能な最高善とは知性に即したものである。⁸⁰⁾

—— 知性に即した、人間に到達可能な最高善とは真理の認識とそうした認識によって得られる喜びである。認識されるものが高貴なほど、それを認識する知性の喜びも大きい。すると第一原理の認識こそ人間の最高善なわけである。⁸¹⁾

見ての通り、これはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』そのままの主張である。アリストテレスにとって最高の生活とは哲学者の観想的な生活だった。同じことをダキアのボエチウスも述べている。

「……知性能力遂行の内に最善でかつ最も完全なものが存在するとすれば、すべての遂行は本性的にそうした遂行のために存在する。そして人間がそうした遂行に携わるとき、彼は人間にとって可能な最善な状態にあると言える。そしてそうした人間こそ、知の追求に人生を捧げる哲学者なのである」⁸²⁾

アリストテレスの場合、神学とは形而上学（第一哲学）のことだった。それに携わるのはあくまで哲学者であり、哲学者とは別に神学者がいるわけではなかった。ダキアのボエチウスはどうか。

「……哲学者は第一原理に対し最大の愛をもつ。それゆえ哲学者は第一原理とその善の観照において最大の喜びを感じる。そしてこの喜びだけが正当な喜びである。哲学者の人生とはこうしたものであり、誰であれこうした人生を送っていない者は正しい人生を送っているとは言えない。ところで、私は自然の正しい秩序に即して

生き、人生の最善で究極的な目的を獲得した人間を哲学者と呼ぶ。しかもわれわれが語ってきた第一原理とは、永遠に祝福される栄光に満ちた至高なる神にほかならないのである」⁸³⁾

これは大変な断言である。いま仮にボエチウスが言うように「第一原理の観照だけが正しい生き方で、それを実践しているのは哲学者のみ」とすると、聖なる学に携わっている神学者たちはどうなるのだろうか。あるいはアリストテレスが考えていたように「神学者とは実は哲学者のこと」と言いたいなら、その場合、哲学が神学に従属するのではなく、逆に神学が哲学に吸収されることになるだろう。どちらにしても哲学とは別に神学が存在する理由はなくなってしまふ。またそうすると「知識とは別に知恵があり、知恵に到達するためには信仰の光が必要」とも言えなくなろうから、学芸学部の上に神学部が置かれている理由が無くなってしまふ。これでは神学者の顔色なしである。

こうした余りの理性主義についに堪忍袋の緒が切れたのだろう、1270年12月10日、パリ司教のステファヌス（エチエンヌ・タンピエ 1279没）はアベロエス派 **Averoistas** と呼ばれていたパリのアリストテレス信奉者たちについて、世界の永遠性、決定論、知性単一説、神の摂理などを挙げて以下の13箇条を非難した。⁸⁴⁾

- (1) すべての人間の知性は数的に同一である。
- (2) 「人間が知性認識する」というのは誤りであり、不適当な述べ方である。
- (3) 人間の意志は必然的に意志し、あるいは選択する。
- (4) この地上で働いているものすべては天体の定める必然性に服している。
- (5) 世界は永遠である。
- (6) 最初の人間というものは決して存在しなかった。
- (7) 人間である限りの人間の形相としての靈魂は身体の消滅にともなって消滅する。
- (8) 死後に身体を離れた靈魂は物的な火に苦しめられることはない。
- (9) 自由意志は受動的な能力であって能動的な能力ではない。自由意志は欲求されうるものによって必然的に動かされる。
- (10) 神は個別者を認識しない。

- (11) 神は自分以外のものを認識しない。
- (12) 人間的行為は神の摂理に支配されない。
- (13) 神は、消滅しうるもの、あるいは死すべきものに対して、不死性あるいは不滅性を与えることはできない。

こうした急進的アリストテレス主義排斥の動きに反応したのであろう。1272年4月1日、パリ大学学芸学部は論理学ならびに自然学の全教師たちに通達を出した。

- 学芸学部のいかなる教授も見習も、あたかも自分に定められた限界を超えて、三位一体とか受肉とかそうした類の純粋に神学的な問題を裁定してはならないし、さらには討論してもならない。……仮にそんなことをしたら、その時点で我々のあいだから永久に除名する。⁸⁵⁾
- さらにパリのいずれかにおいて信仰と哲学に同時に触れると思われる問題を討論して、信仰に反する裁定を下したなら、その時点で異端として我々のあいだから永久に除名する。⁸⁶⁾

これを裏返せば学芸学部の教師の中には信仰に関わる問題を議論する者がいたということだろう。だから学芸学部としては当局の介入を未然に防ぐため組織防衛に動いたものと思われる。

このように、12世紀後半にはじまるアリストテレス流入とそれによる理性主義の台頭は、聖書が教える啓示との関係をめぐり1270年代には深刻な状態に達していた。そのアリストテレスに対する態度として当時の思想界には大別すれば三つの傾向があった。

- (1) アリストテレスを書いてある通りに読み、論理的に理解しようとする急進的アリストテレス主義。
- (2) アリストテレスを啓示の光に照らし、あくまでも聖書の内容と合致するように受容しようとするトマス主義。
- (3) アリストテレスに批判的で、伝統的なプラトン主義的立場から神学を構築しようとする新アウグスチヌス主義。

それぞれ急進派、中間派、保守派と言ってよい。それらの代表的人物として以下にブラバントのシゲルス、ドミニコ会のトマス・アクィナス、フランシスコ会のボナベントゥーラを取り上げ、彼らが哲学と神学の関係についてどう理解していたのか見てみよう。彼らの哲学に対する、ひいては人間を哲学へと駆り立てている理性に対する見解の相違から次第に人々は(1)神学に対する**哲学の独立性**を意識するようになり、さらに(2)**神学そのものの学問性**を疑うようになっていったのである。

二節 シゲルスの場合

パリ大学学芸学部を中心とした急進的アリストテレス主義の頭目とされていたのはブラバントのシゲルス(1235頃-1281頃)である。1269年から72年にかけて神学部でトマス・アクィナスの講義を聴講したアエギディウス・ロマーヌス(1247-1316)によれば、シゲルスは哲学において当時のパリで最も偉大な教師だったそうで、ダンテ(1265-1321)も『神曲』の天国篇において「麦藁の街で妬みを買うにいたった真理を証したシゲルス」⁸⁷⁾と歌い、トマス・アクィナスら高名な神学者たちと同じ第四天に置いている。

そんな彼の名が最初に登場するのは1266年8月27日、枢機卿シモンによる学芸学部での抗争をめぐる処理顛末書である。

当時、パリ大学の学生たちは出身地域ごとに構成された四つの民団 **nacio** のいずれかに所属していた。具体的には(1)おおよそパリ以南のラテン系言語を母国語とする学生たちから成るガリア団、(2)北フランスからフランドル地域の出身者から成るピカルディー団、(3)ノルマンディー出身者のノルマン団、そして(4)ブリテン島と神聖ローマ帝国諸邦の学生から成るアングリア団である。ところが学芸学部ではピカルディー団とガリア団とで仲が悪く、陰悪な状態が続いていた。あるときピカルディー団の者たちがガリア団に所属するギレルムスという人物を拉致監禁した。そこで仲裁委員会が組織され、ギレルムスの監禁は不当として身柄を解放させた。その際、ピカルディー団に所属していたシゲルス **Sygerus** という教師は委員会の決定を正当と認めたことが報告されている。⁸⁸⁾

この記録から、シゲルスという人はたとえ身内であつても駄目なことは駄目、おかしなものはおかしい、と筋を通す人物だったことが窺えよう。そして恐らく、このように原理原則を重んじ、妥協を許

さない是々非々の性格が彼の学問を作り、また彼に悲劇をもたらしたように思われる。

シゲルスは知識の原理には二種類あるとする。すなわち論証 *demonstratio* と啓示 *revelatio* である。ステファヌスによる弾劾後の72年頃と推定されている『形而上学問題集』ではこうある。

「いま述べられたことから次の事が明らかである。かの知識において、すべてのことに論証的方法でいこうとする人々は最悪の仕方に進もうとしているのである。というのは論証の諸原理とは感覚、記憶それに経験というやり方で知られねばならない。だが、かの知識の諸原理は、すでに見たように、神の啓示によって知られるものだからである」⁸⁹⁾

「かの知識」*illa scientia*とは神学のことである。一般に論証は感覚、記憶、経験によるが、聖書は啓示による—— ということは聖書から独立して、神学とは別の種類の知識があるということになる。するとアリストテレスの説くところが聖書と食い違っている、それだけの理由でアリストテレスの哲学を捨ててしまうべきではない。アリストテレスはキリストよりも前の人物だったのだから啓示の光を前提にして彼の著作を読んでも無駄である。あくまで理性によって理解するしかない。

「さらに『世界が端的に永遠であるとか同様のことを哲学者は意図しているのではない』と言う人々が試みていたように、信仰に属する事柄のために哲学者の意図を覆い隠すようなことはすべきではない。というのは既に言われたように、哲学者の意図を信じる道とは人間の理性であって、信仰に属する事柄を信じる道はそれとは別だからである」⁹⁰⁾

この言葉から当時は、聖書が教える神の世界創造と矛盾しないようにアリストテレスを読もうとする人がいたことが分かる。喩えて言うなら古文書を執筆者の時代背景から切り離して現代の価値観で読むようなものだが、シゲルスはたとえ聖書と矛盾してもアリストテレスは理詰めに読むべきだと主張する。なぜなら哲学とは理性の営みであり、信仰とは別だからである。違う以上は違う扱いをすべきだというのが彼の大原則なわけで、このあたりに先ほどのシモンの報告にあるように妥協を嫌い、筋を通す性格を感じるの筆者だけだろうか。

こうした原理原則を重んじる姿勢は同じく弾劾後

の73年から74年頃の著作と推定されている『知性的靈魂論』*Tractatus de anima intellectiva* ではもっと明確に示されている。

「……友人たちの求めに対し、我々に可能な限りで彼らの望みを満たすために、我々の方で何かを断言するのではなく、研究対象である哲学者たちが記述するところに従えば、前述の事柄についてどう理解すべきかをこの論考において述べることにしたい」⁹¹⁾

つまりテキストを自分に従わせるのではなく自分がテキストに従うのである。なぜそうするのか。シゲルスは言う。

「というのは、ここでは我々はただ哲学者たちの、特にアリストテレスの意図を問題にしているだけだからである。たとえこの哲学者が、自然理性では結論できない靈魂について啓示を通して与えてくれる知恵や真理とは異なることを考えていたとしても、である。しかし我々は自然の事物について自然的に論じたいと思っているから、目下のところは神の奇跡には全く触れないでおこう」⁹²⁾

つまり靈魂について、啓示とは無関係に哲学の論理をそのまま辿っていき、結果として聖書が説くところと異なる結論に達したとしても、そのまま哲学の主張を聞くだけ聞いておこう、というわけである。シゲルスとしては真理よりも哲学者たちが何を考えていたのか知りたいだけなのだ。⁹³⁾ そのうえで注意すべきは、哲学の教えるところが聖書の教えと矛盾した場合には聖書の方が正しい、と明言していることである。

「我々は、知性的靈魂と身体の結合について哲学者はこのように考えていたと主張する。だが仮に哲学者のこの見解がカトリックの聖なる信仰に対立しているなら、他のどんなことにおいてもそうであるように、我々は信仰の見解を優先したい」⁹⁴⁾

思想史においてブラバントのシゲルスというと「哲学と神学の二つの真理が矛盾したまま両立可能とする二重真理説を説いた人物」と長らく教えられてきた。だが事実は違う。哲学の言うところが神学と食い違った場合は両方正しいのではなく、必ず哲学の方が間違っているのだが、それでも間違いは間違いとして書いてある通りに読むべきだという態度を貫いた人物だったのである。真理とは別に論理を追求していたのであり、少しも二重真理の徒ではな

かった。

「我々はこれらのことをアリストテレスの主張を引用して語っているだけであり、真実と認めているわけではない」⁹⁵⁾

「だが哲学をそのように覆い隠すのはよいことではない。だからアリストテレスの考えていることが真理に反するものだったとしても、ここではそれを隠すべきではない」⁹⁶⁾

先に触れた72年の学芸学部に通達では「信仰と哲学に同時に触れるような問題を討論して、信仰に反する裁定を下したなら」除名とされていた。シゲルスとしては、議論をあくまで哲学に限定しているうえに、裁定では常に信仰に軍配を挙げているのだから、何ら問題はないと思っていたのだろう。しかし、それで神学部が納得するだろうか。シゲルスが唱えるように論理的に考えれば神学部の関係者はこう思うのではないだろうか。

—— 72年に学芸学部は「本学部の教師は神学的な問題には関与してはならない」と通達を出した。それを意識したのだろうか、しきりにシゲルスは「自分は哲学を、神学の婢女ではなく、理性だけの独立した学問として議論しているにすぎない」とか「アリストテレスの主張は間違いではあるが、どうして彼がそんな見解を唱えるようになったのかをテキストから論理的に解明したいだけだ」と弁解している。しかし論理を一貫させて得られた結論なら論理的に正しいはずだから、彼がやっていることは「神学が言っていることは論理的には間違い」と間接的に言っているようなものではないか。ということは結果的に学芸学部の通達に反していることになるろう。

さらに授業では触れずにいても、学外で信仰と哲学の矛盾を指摘する教師もいたようである。事態の深刻さに気づいたパリ大学は76年9月2日、すべての学部の教師に対し私的教授活動を禁止する通達を出した。

—— 聖典によって禁じられていることや、闇を照明して人間の精神を守る知恵（我々はその専門家である）に敵対することを教える様々な秘密の会合があることに我々は気づいた。我々は共通の利益に鑑み、暗躍する者たちの跳梁を阻止するため、合意により次のことを定め規定する。いかなる学部の教授も見習も私的な場所では書物を、そこ

から多くの危険が湧いてくる可能性があるから、講じてはならない。しかし、その場で教えられていることを忠実に記録できる人々だけが集まっている公共の場所ではよろしい。もちろん僭越などあり得ない文法書や論理学書は例外である。……この規定にあえて反した者は教師や学生のあいだから除名されるであろう。⁹⁷⁾

しかし、もはや遅かった。同年11月23日、パリの異端審問官バルのシモンはシゲルスと二人の同僚を異端の嫌疑で召喚した。シゲルスはパリから逃亡し、法王に直訴しようとイタリアに向かったらしい。その後の彼の行動は不明だが、数年後、ローマ郊外のオルビエトで発狂した秘書に刺され、かくして学問としての哲学の独立性を恐らく最初に意識し、「哲学のための哲学」を追求した哲学者は非業の死を遂げた。

三節 トマスの場合

中世哲学を代表する人物として必ず挙げられるトマス・アクィナス（1225-1274）の基本姿勢は**理性と信仰の究極的調和**であった。すなわち理性も信仰も神に基づく以上、両者は表面的には矛盾しているように見えても、大本である神においては調和しているはずなのである。1260年前後に書かれた『対異教徒大全』ではこうある。

「自然本性的に知られる諸原理の認識は我々のうちに神によって具えつけられたものである。というのも我々の自然本性の作者は神自身だからである。それゆえ神の知恵はこれらの諸原理をも含んでいることになる。だから、これらの諸原理に対立することは何であれ神の知恵に対立している。従って、そうしたことが神に由来するということとはあり得ない。だから神の啓示に由来し信仰によって捉えられることが自然本性的認識と対立することはあり得ない」⁹⁸⁾

既に見たように「啓示も理性も神に由来するのだから、両者は本当なら矛盾しない」という態度は古代からあった。同じ神のロゴスがユダヤ人にはイエスとして現われ、ギリシア人には哲学として現われたのだから、キリスト教とギリシア哲学に矛盾はないはずとした二世紀のユスティノスなどはその典型である。トマスも同じ立場である。

—— 哲学は、聖書とは出発点が違うにしても、神が与えてくれた理性を正しく用いていく

なら、誰でも同じ結論に達するはずであり、従って必然的に聖書と調和するはずなのである。それなのに哲学が聖書と対立しているとしたら、それは恐らく理性の使い方がまずいために間違った答えを出しているからに違いない。本当の哲学なら聖書に一致するはずであり、一致しないとしたら、それは間違った哲学なのだ。

実際、彼はこう述べている。

「こう言うべきである。恩寵の賜物は、自然を除くのではなく、むしろ完成するように、自然に加えられる。だから恩寵により我々に注がれる信仰の光は、我々に本性的に組み込まれている自然的認識の光を破壊しない。人間精神の自然的光は信仰を通して証されるものを証するには不十分であるが、信仰によって神から我々に与えられるものが、自然によって我々に組み込まれているものに反するなどということはありえない。……だが聖なる教えが信仰の光に基礎づけられているように、哲学は自然の光に基礎を置いている。ゆえに哲学に属することが信仰に属することに反するという事は不可能なのであり、そんなことは信仰からの背反なのだ。……仮に哲学者たちの言葉の中に信仰に反するものが見出されるなら、それは哲学ではなく、理性の欠陥による哲学の濫用なのである」⁹⁹⁾

整理すると(1) 哲学とは啓示抜き、理性による営みであるが、(2) その哲学のうちの正しい部分とは啓示と一致する部分だけであり、(3) 啓示と矛盾する部分は間違い、というわけである。

これを逆に言えば(2)の啓示と重なる部分については、啓示がなくとも理性だけで、啓示と同じ内容が、つまり真理が、導き出せるわけである。実際、『神学大全』の最初の問題では神について二種類の知識があるとトマスは認めている。

「知識の類には二つあることを知らねばならない。或る知識たちは……自然知性の光によって知られた諸原理から出発する。だが或る知識たちはより上位の知識の光によって知られた諸原理から出発する。……そして聖なる教えはこちらの仕方知識なのである。なぜなら、それはより上位の知識、すなわち神と至福なる人々の知識、の光によって知られた諸原理から出発するからである。ゆえに……聖なる教えは神によって自らに啓示された諸原理を信じるのである」¹⁰⁰⁾

喩えて言うなら同じ神という目的地へ向かって、理性だけを原動力にして走る「哲学」と、啓示に導かれて走る「聖なる教え」(神学)という二つの路線バスが並走しているわけである。筆者に言わせれば人間は本性的に理性的な動物である以上、目的地が同じなら「哲学」だけで十分だと思うのだが、なぜ啓示に基づく「聖なる教え」もあるのだろうか。これについてのトマスの説明。

——人間は神を直視するべく、神へと向けて秩序づけられている。そのためには神という目的が予め人間に知られていなければならない。ところが神は理性を超えている。そこで目的である神について、神からの啓示によって教えてもらう必要がある。それゆえ哲学とは別に聖なる教えが必要である。¹⁰¹⁾

——それに理性だけで神を知ろうとしても、理性的能力が発達したごく僅かの人しか出来ないだろう。それにしたところで長い時間がかかり、しかも多くの間違いが混じっていることだろう。だから真理の認識が、すべての人に、より確実に、もたらされるためには啓示に基づく教えが必要なのである。¹⁰²⁾

つまり少数の理性的な人間だけでなく、すべての人間が神へと向かえるようにするために哲学とは別に「聖なる教え」も必要というわけである。

だが、そうすると今度は「啓示に基づく聖なる教えというのは、あくまでも理性による自力本願ができない一般庶民の大衆のための、しょせんは方便にすぎないのではないだろうか」という疑問が出てくる。そこから当然こんな意見が生じよう。

——人間の本当の幸せは永遠不変の存在である神を正確に認識することである。そのためには理性に乏しい人の場合にはまず神の存在を信じなければならないだろう。しかし理性が十分に発達している人なら自分で哲学していけば、世界の第一原因としての神の存在にやがて行き着くであろう。だから理性で証明可能な事柄については、わざわざ信じる必要はないだろう。

イスラムの神学者アベロエスがこの立場だった。彼によれば人間にとって最善の生活とは哲学を通して神を認識することであり、宗教は哲学する能力に乏しい多くの人のための次善の手段と考えられていた。典型的な理性主義である。

これについてトマスは「理性を越える事柄だけで

なく、理性によって認識可能な事柄についても信仰される必要がある」と主張し、その理由として (1) 神の真理の認識により早く到達するため、(2) 神認識がより多くの人に共有されるため、(3) 確実性のため、の三つを挙げている。

「……第一には、神に関する真理の認識に人がより早く到達するためである。というのは神の存在とか神のその他の事柄に関する知識は、他の多くの知識を前提にしたうえで、最後に人間が学ぶべきこととして定められているからである。

だから人生の多くの時間を経過してからでないと人は神の認識に到達できないであろう」¹⁰³⁾

多くのことを学んだあとで、ようやく神について学ぶということは既に見たアリストテレスがそうだった。第一哲学であり神学とも呼ばれていた形而上学 *metaphysica* はリュケイオンではまさに自然学 *physica* を学んだ後 *meta* に位置づけられていた。中世においてもパリ大学神学部は学芸学部で七年間学んだ者にだけ入学が許されていて、しかもその課程は八年もあった。確かにこれでは神について知識を持つ前に寿命が尽きてしまう恐れがある。そうになると、つまり、すべての人間に開かれているはずの真理の認識が知力と気力と体力のある者だけに限られるとなると、普遍を標榜する「カトリック」の看板が泣く。これがそのまま第二の理由である。つまり知力、気力、体力など諸般の事情により神認識に進めそうもない人々のために、神に関する真理を信仰箇条として示してやる必要があるわけである。

ここまでの二つは、先ほど見た哲学とは別に「聖なる教え」が存在する理由と同じである。哲学者にも信仰が必要な一番の理由は第三の確実性である。トマスはこう述べている。

「人間理性は神的な事柄においては多くの間違いをする。その証拠は、人間の事柄について自然的探究をしている哲学者たちが多くの点において誤り、互いに反対のことを表明してきたことである。ゆえに人々が神について疑いのない確実な認識を持てるようにするために、いわば欺くことができない神によって語られたこととして、神的な事柄が信仰という形で人々に伝えられねばならないのである」¹⁰⁴⁾

つまりトマスはこう言いたいのだろう。

—— 哲学者たちは絶対確実な知識つまり真理を理性だけで得ようとしている。

—— でも人間に生まれながらに具わっている理

性だけでは、いま目の前にある自然を正確に認識できるかどうかとも疑わしい。

—— すると哲学だけで真理を追求するとしても、自分の理性による認識が正しいということのお墨付きが必要なわけである。

—— となれば、そうしたお墨付きを与えてくれる方の存在をまず信じるしかないだろう。

これはまさに「人間は絶対確実な知識を持つことは可能か」に関わる事柄であり、ピュシスの探求に始まる古代ギリシア以来の問題である。そして、数学ですら公理についてはその正しさを前提にしたうえで展開されてゆくように、哲学も「理性による合理的論理展開は正しい」としなければ懐疑の暗闇に陥るとなると、そうした人間の理性に「神の照明」と称してもっともらしく真理の灯を予め持たせておくのも、懐疑を回避する有効な手段であろう。そして実際これは古代哲学が取った手だったことは既に見た。すなわち**方法的信仰**であった。¹⁰⁵⁾

すると、たとえ哲学であっても、永遠不変にして慈悲深い神の存在を信じることから始めなければならないとすると、**哲学は、原理としては神学と異なる知識であるにもかかわらず、決して神学から独立した体系ではないこと**になろう。神認識をより早く、より広く、そして何よりも確実に実現するためには、哲学は神学に裏付けられねばならないのであり、その意味で神学に従属した体系なのである。もちろん神学に従属していても、理性という独自の原理の営みである以上、哲学はある程度は神について自力で理解できる。しかし理性を超えた事柄については哲学は全く無力であるから、そうした事柄については啓示を信じることによって理解していくしかない。

「……或る人が神について、一であることを論証的に知りつつ、その神が三にして一であることについては信じるということが可能である」¹⁰⁶⁾

つまり「神は存在する」とか「その神は一人の方であり複数ではない」などは理性だけで理解できるが、「その神は三位一体である」などはもはや信じるしかない。そうした限界があるとなれば、哲学は己の分を弁えねばならないことになろう。

「神の奥義を知性によって把握し尽くそうとする無謀を企てるような研究態度は許されない」¹⁰⁷⁾

哲学はあくまでも脆弱な人間理性による営みである以上、それによって得られる知識は、啓示への信仰に基づく知識よりも劣る。だから理性は啓示の光

に導かれなければならない、それゆえ哲学はあくまでも神学に従属したものでなければならない。いわば神学の手足として、下請けとして、哲学は役立てられねばならないのである。

「……この知識（神学）が哲学の諸学から何かを受け取るということはあるが、それは必要に駆られて、それらの学問を要するからではなくて、この知識において伝えられる様々な事柄をより良く解明するためである。だから、この知識はその諸原理を他の知識たちから受け取るのではなく、啓示を通じ神から直接的に受け取る。いわば上位の学問的知識として受け取るのではなく、それら諸原理をいわば下位のものとして、侍女として使用するのである」¹⁰⁸⁾

まさに哲学は神学の婢女なのである。神学が哲学を用いるのは、あくまでも啓示のより良い理解のためであり、またそのために、つまり**神学に資するために、哲学も学ばれるべき**なのである。これは、アウグスチヌスが「知恵のために知識は学ばれるべき」と再三述べていたところである。それなのに哲学を神学から切り離し、それ自体として理解しようとするなら、それは空しい世俗の知識を追い求めることに他ならない。しかし人間の本当の幸福は真理である神を認識することにあるから、こうした「哲学のための哲学」は結果的に人間を不幸にするだけなのである。ゆえにトマスは、真理を脇に措いて論理の追究に汲々とするシゲルスのような急進的のアリストテレス主義者たちを批判する。1271年と推定される説教『偽預言者たちに用心せよ』において彼はこう述べている。

「哲学を学ぶ者で信仰によれば真でない事柄を語っている人々がいる。彼らに対して『それは信仰に反している』と言うと、彼らは『それを言っているのは哲学者である。それを我々は肯定しているのではない、哲学者の言葉を復唱しているだけだ』と言う。このような者は偽りの預言者あるいは偽りの教師である。なぜなら疑いを提示しながらそれを解決しないということは、そのことを承認していることと同じだからである」¹⁰⁹⁾

まことに啓示と理性の究極的一致に立つトマスからすれば、このように「アリストテレスの間違ひは間違いとしてそのまま読む」というシゲルスの態度は許されないものだった。哲学は神学の婢女である以上、**哲学に間違いがあるなら、テキストに書い**

てあるように論理的に読むのではなく、神の啓示の光に照らして正して読むべきなのである。だからこそトマスは積極的にアリストテレスへの註解を続け、そうすることで哲学を神学の婢女として活用していたわけである。彼はこう述べている。

「聖なる学問において、世俗の叡智を駆使して、それを信仰の侍女たらしめる人たちは、葡萄酒を水で割るのではなく、水を葡萄酒に変化させているのである」¹¹⁰⁾

まことにトマスにとって哲学とは「哲学のための哲学」ではなく「神学のための哲学」だった。アウグスチヌスが示した「知恵が目的、知識はその手段」という学問のあり方をトマスとしては忠実に実践していたのである。

四節 ボナベントゥーラの場合

ところがそうは思わない者がいた。フランシスコ会第八代総長のボナベントゥーラ（1217-1274）である。1236年にパリ大学学芸学部に入學した彼は43年に卒業すると同時にフランシスコ会に入った。神学部ではアレクサンデル・ハレンシスに師事し、48年から50年まで聖書講師、50年から52年にかけて命題集講師として『命題集』を註解し、53年に師範免許を取得、57年にはトマス・アクィナスと同時にパリ大学神学部の正教授 *magister cathedra*tus となったが、フランシスコ会総長に選出されたため、教授として神学部で講義することはないまま、主にパリのフランシスコ会の神学院で後進の教導に当たった。

ステンベルヘンによれば、ボナベントゥーラはアルベルトゥスよりも早くアリストテレスに基づいた総合を試みた。実際、最初の著作である『命題集註解』ではアリストテレスを「哲学者たちの中でもより優れている」と評価している。¹¹¹⁾ ただし注意すべきは「より優れている」であり、一番ではないことである。

—— アリストテレスの関心は地上にあったが、プラトンは天上に関心を寄せていたから、プラトンの方が優れている。しかしアウグスチヌスは聖霊の恵みを受けていたから、プラトンよりさらに優れている。¹¹²⁾

キリスト教に帰依したアウグスチヌスが一番で、異教徒ではあるが天上のイデアを説いたプラトンは二番、イデアを否定し主に地上に関心を持っていたアリストテレスは三番というこの序列にボナベント

ウーラの生涯変わらぬ哲学観が象徴的に示されている。彼によれば、理性は感覚的なものに向かうと誤る恐れがある。

「信仰は理性を超えたものに関わるが、知識は理性の内にあるものに関わる。同一のものが隠れていると同時に顕われていても何の問題もないように、同一のものが或るものの認識の在り方と別のものの認識の在り方によれば、内にありつつ超越していても何ら問題はないと言うべきである。知られていることと信じられていることもそのような関係である。獲得された知識あるいは彼自身の内に内在している知識を通して永遠の力と神性が認識されとしても、ペルソナの複数性とか神が引き受けられた我々の人間性への遡りについては全く理性を超えており、また知識を超えている。そのため人が理性と知識の判断に依存するなら、可能的なもの信じないであろう……それゆえ信仰に依存しない限り、知識は神についての認識にほんのわずかしから到達しない。……だから使徒パウロは『神はこの世の知恵を愚かなものにした』（『第1コリント』1-20）と言ったのである。なぜなら信仰を欠いた現世での神についてのあらゆる知恵は真の知識よりもはるかに愚かだからである。それゆえ知識は信仰の照明によって正され支えられなければ、詮索の虚偽へと落ちる。だから知識は信仰によって追い払われるのではなく完成されるわけである」¹¹³⁾

信仰なき知識の典型としてボナベントゥーラが挙げるのがアリストテレスである。天使や霊魂といった「霊的実体の役目は物体を動かすことである」という意見に対して、ボナベントゥーラは天使の数の方が天使によって動かされる天球の数より多いことを挙げて批判する。そして言う。

「さらに霊魂が身体から離れても、復活によって身体を再び取るという点においてもアリストテレスは間違えている。これについても彼は知らなかったのだ。だから彼がこのように間違えるのも驚きではない。信仰の光線によって助けられなければ、知を愛する者であっても何らかの誤謬に転落することは必定なのだ」¹¹⁴⁾

かくして聖書による導きが必要となる。なぜなら理性よりも聖書の方が確実だからである。『命題集註解』に続く54年から57年にかけて書かれた『神学綱要』Breviloquiumではこうある。

「欺いたり、欺かれたりするようなものの権威は、確かな権威ではないのであって、神・聖霊より以外には、欺かれることも欺くことも知らないというようなものは何ら存在しないのである。それゆえに聖書は極めて当然のこととして、完全に権威的であるために、人間の探求力によって教示されるものでなく、神の啓示によって教導されねばならない」¹¹⁵⁾

なぜ理性より聖書の方が確実なのかボナベントゥーラは全然説明していないが、とにかく聖書は絶対に正しいというのであるから、これはただ信ずるしかない。かくして聖書は絶対に正しく、それについての知識は最も確実となれば、神学こそ知識の基準ということになる。

「聖なる書あるいは神学は救いに必要な段階に応じて、我々旅する者にとって、第一原理について十分な知識を与える学である」¹¹⁶⁾

このようにボナベントゥーラにおいては第一の学問とは神学以外にないのであるから、哲学はあくまで神学に導かれるべきである。そのうえで、つまり信仰に基づいて、信仰に資するように哲学するなら、哲学もまたおおいに有用なのである。要するに彼が言いたかったことは「哲学について語るなどということではなく、それに拠りかかるなどということ」¹¹⁷⁾であり、**哲学の節度ある使用**であった。

だが哲学に対するボナベントゥーラの態度は次第に陰しくなっていた。十年後の1267年の四旬節にパリ大学で行われた『十戒についての講話』には思想的に興味深い言葉がある。

「私は学生のころ、アリストテレスが世界は永遠であると教えていることを聞いた。そしてこのことを証明するために示された理由と議論を聞いたとき、私の胸はかき乱され、どうしてそうなるのか、と思うようになった」¹¹⁸⁾

ボナベントゥーラが言う学生時代がいつのことなのか不明だが、学芸学部なら1230年代後半、神学部なら40年代である。とにかく13世紀半ば頃には聖書に反することが大学内で語られていたわけである。そのようなことになる理由としてボナベントゥーラは哲学のやり方に問題があるとする。

「様々な虚偽のあらゆる偽りにして迷信的なでっち上げは、間違った哲学的探究か、聖書の歪んだ理解か、人間の肉的本性の倒錯した愛着のいずれかに由来する。哲学における誤謬は『世界

は永遠である』とか『あらゆるものにおいて知性はただ一つ』といった間違っただ哲学的探究に由来するのである」¹¹⁹⁾

不適切な哲学的探究とはどういうことか。翌68年の同じく四旬節に行われた『聖霊の七つの賜物についての講話』で彼は哲学と神学の違いについてふれ、哲学の独走に対し警戒を呼びかけている。

「哲学的知識は探求可能なものとしての真理についてのある種の認識に他ならない。神学的知識は信仰可能なものとしての真理についての敬虔な認識である」¹²⁰⁾

哲学は探求可能なものの認識、神学は信仰されるものの認識であるから、両者は別である。だが別だからといって、哲学的知識だけを追究していたら、その人は必然的に誤りに陥る。

「人が至高の諸実体にまで及ぶ自然学的ならびに形而上学的知識を持ち、そこに安らぐ境地に到達したとしよう。だが、これは信仰の光によって助けられなければ、つまり善性の究極の流入により、三にして一、最強にして最善なる、神を信じなければ不可能であり、いやそれどころか誤謬に陥るだろう」¹²¹⁾

信仰の光がないため誤謬に陥った悪例として彼は再三にわたりアリストテレスを挙げている。1273年春にパリ大学で教師たちを前に説かれた『創造の六日間についての講話』によれば、アリストテレスは師のプラトンが措定したアイデアを否定した。それにより範型説、神の摂理、真理の三つに対する無知が生じ、さらにこれら三つの無知から世界の永遠性、能動知性単一説、死後の報酬の否定、が生じたとする。¹²²⁾

見ての通りアリストテレスに対するボナベントゥーラの評価は悪くなっている。約二十年前の『命題集註解』では間違いはあるもののアウグスチヌス、プラトンに次ぐ三番目の哲学者に位置づけられていたが、今や彼が陥った一連の誤謬ばかりが列挙されるばかりで評価する言葉は見られない。また時期不明だが、ある説教ではこう言われている。

「聖書を愛する者はまた哲学も愛する。それによって信仰を堅めるために。しかし哲学は、真理に虚偽が混じっているから、善悪の知識の木である。それなのにあなたが哲学者たちを真似て『どうしてアリストテレスが間違っていたのだろうか』と言って聖書を愛さないなら、あなたは必然的に信仰から転落する。仮にあなたが『世

界は永遠だ』と言うなら、あなたはキリストについて知らないのだ。仮にあなたが『すべての人間に知性は一つである』と言うなら、来世の幸福も死者の復活もないのだ。仮にあなたがこの善悪の木から食べるなら、あなたは信仰から転落するのだ。哲学に属することを学ぶ人たちは用心しなければならない。キリストの教えに反することはすべて、霊魂を滅ぼすものとして遠ざけられねばならない」¹²³⁾

この文脈でいくとアリストテレスは知識の木がつける実のうちのどうも悪い方のようなものである。これらの言葉から、13世紀の50年代から70年代にかけて哲学が神学から自立する傾向を見せるのに反比例して、ボナベントゥーラは哲学への警戒を強めていたことがわかる。「哲学的知識は他の様々な知識への道である。しかし、そこに留まろうとする者は闇に陥る」¹²⁴⁾ という彼の言葉は、哲学を神学に従属させず、哲学をあくまで哲学として講じようとする人々すなわち急進的アリストテレス主義者たちに向けられた警告に他ならなかった。

だが急進的アリストテレス主義者だけではない。同じ『創造の六日間についての講話』にはこんな言葉が見出せる。

「聖書という葡萄酒に哲学という水を混ぜて葡萄酒から水を生じさせるようなことはするべきではない。そんなのは最悪の奇蹟だ。聖書ではキリストは水から葡萄酒を生ぜしめたとあるのであり、その逆ではないのだから」¹²⁵⁾

これは誰がどう見てもトマスへの当てこすりであろう。シゲルスのようにアリストテレスを聖書から切り離し一つの独立した哲学として読むのではなく、あくまで聖書の枠内で、聖書に沿うように読み、そうすることで哲学を神学に役立てようとしたトマスでさえボナベントゥーラにはもはや危険だったのである。これは裏返せば、神学においても理性主義の影が懸念されるようになっていたということだろう。

第四章 神学者たちの争い

一節 1277年の弾劾

1277年1月18日、法王ヨハネス21世はパリ司教ステファヌスにパリの状況について報告を求めた。

—— これまで多くの清らかな流れを豊かに湧き出し、地の涯までカトリック信仰を広める救霊の生きる泉であったパリにおいて、あ

る幾つかの謬説が蔓延していると言われて
いる。誰が、どこでそのようなことを説いて
記しているのか調査し、貴卿はどう思うか、
何か発見したかを文書で速やかに提出する
よう命ずる。¹²⁶⁾

そこでステファヌスは16人の神学者たちからなる
委員会を組織し、3月7日に219箇条もの命題を異端
として弾劾した。

- 学芸学部では多くの教師が学部本来の限度
を超えて、明らかな忌まわしい誤謬を論じ
ている。彼らはそれを隠すために、単なる
疑わしいものと偽装して議論している。¹²⁷⁾
- さらに彼らは自分たちが仄めかしている謬
説を実際に認めているのだと思われないう
ように、自分の回答は隠している。それとい
うのも、それらは哲学によれば真であるが
カトリックの信仰によれば真ではない、と
彼らは言っているからである。まるで二つ
の反対の真理があるかのようだ。¹²⁸⁾

いわゆる二重真理説である。今日では、実際に二
重真理を説いた者はいなかったことが定説となっ
ているが、少なくとも教会にはそのように見えたわけ
である。それにしても七年前の弾劾では13箇条だっ
たのが今回は219箇条にまで増えているのは、それ
だけ理性主義の風潮がいよいよ強まっていたのだろ
うだろう。それらの中にはこんな命題があった。

- 哲学に専念すること以上に卓越することは
ない。¹²⁹⁾
- 世界の中で知恵ある者は哲学者のみである。
¹³⁰⁾

これらは恐らくダキアのボエチウスから引き出さ
れてきたのだろう。教会当局としては急進的アリス
トテレス主義が追求する「哲学のための哲学」など
絶対に認められないことだった。そんなことをした
ら啓示に基づく自らの権威が相対化されてしまうか
らである。ゆえに自立の傾向が顕著になっていた哲
学を牽制するのは理解できる。だが同時に次のよう
な命題も弾劾されていた。

- 神は、質料なしに一つの種の下で個別者を
多数化することはできない。¹³¹⁾
- 知性実体は質料をもたないゆえに、神は同
じ種に属する多数の知的実体を造ることは
できない。¹³²⁾
- 離在した靈魂は、いかなる仕方によっても火
によって苦しめられるということはない。¹³³⁾

これらの純粹に神学的命題が弾劾されている背景
を探っていくと、この1277年の弾劾はもはや哲学だ
けでなく、ある有名な神学者も標的にしていたこと
が浮かび上がってくる。

パリでのステファヌスの弾劾に続いて3月18日に
はカンタベリー大司教のロベルトゥス・キルウオド
ビー（1215頃-1279没）もオクスフォードで流布し
ていた様々な命題を取り上げて、「これらのいずれか
を自分の信念で唱えたり教えたり擁護したなら、教
師の場合は教務から外したうえで組合から除名、見
習の場合は教師への昇任を認めず大学より放校」と
弾劾した。¹³⁴⁾ この年から翌年初めの時期に彼がコリ
ントの大司教であるコンフルエンチアのペトルスに
送った手紙によると、この禁止令は彼の一存による
ものではなく、オクスフォードの全教授の同意を得
たうえでのものだったらしい。¹³⁵⁾ すると当時の常識
からすれば相当に不評な考えが語られていたものと
推測できよう。

弾劾された命題は文法、論理学、自然学にわたり
全部で26あったが、そのうちの自然学方面は16箇条
で、それらの中に次のようなものがあった。

- 胚の中には植物的なもの、感覚的なもの、
知性的なものが時間的に同時にある。¹³⁶⁾
- 知性的なものが入り込むと、感覚的なもの
と植物的なものは滅びる。¹³⁷⁾
- 植物的なもの、感覚的なもの、知性的なも
のは一つの単純な形相である。¹³⁸⁾
- 生者の身体と死者の身体は多義的意味での
身体である。¹³⁹⁾
- 質料と形相は本質によって区別されるべき
ではない。¹⁴⁰⁾

キルウオドビーは元来パリ大学学芸学部の教師だ
ったが途中から神学に転じ、48年から61年までオク
スフォードで神学教授を勤めた人物で、トマスと同
じドミニコ会に所属していた。

ドミニコ会はイスパニア出身のドミニクス
（1170-1221）により1206年に結成された托鉢修道会
である。清貧を重んじる同じ托鉢修道会としては、
ほぼ同じ時期にアシジのフランシスコ（1182-1226）
により設立されたフランシスコ会（「小さき兄弟会」
Ordo Fratrum Minorum）があるが、ドミニコ会の場合
は「説教者兄弟会」Ordo fratrum Praedicatorumという
正式名称が示しているように、そもそもの目的は当
時、南フランスに根を張っていた異端のアルビ派を

説教によって折伏することにあつた。そのためには深い学識に裏づけられた聖書の正しい知識が必要だったから、設立当初から学問を重んじ、労働の義務を廃して勉学に集中する環境を優秀な若者に与えることで都市部を中心に飛躍的な発展を遂げた。しかも、いかなる司教区にも属さず法王直属だったから、恐らくキルウォドビーもドミニコ会士Dominicanisとして、それこそ「主の番犬」Domini canisたらんとする使命感で危険思想の撲滅に動いたのだろう。

二節 ペッカムのドミニコ会批判

このキルウォドビーが1279年に亡くなると、時の法王ニコラウス3世の指名によりカンタベリー大司教に就任したのがフランシスコ会に所属するヨハネス・ペッカム(1230頃-1292頃)だった。彼はパリでボナベントゥーラに師事し、1270年には神学部教授として「人間の実体的形相は一つか」という問題でトマス・アクィナスを相手に公開討論をしたこともある人物だった。¹⁴¹⁾ キルウォドビーの弾劾があつた77年当時は神学顧問として法王庁にいた。そのため当時の状況について実に興味深い内幕をオクスフォードの文書局長ロゲルスに宛てた1284年12月7日の手紙の中で伝えている。

「亡き兄弟トマス・アクィナスの学説の沙汰につきまして、彼の学説をドミニコ会士たちは今では自分たちの教団の学説と言っておりますが、それを当時のパリ司教のステファヌスはパリの神学教授たちの判断に基づきまして、私ども法王庁に委ねたのです。でも神の恩寵あられます当時のローマ法王ヨハネス聖下が天に召されて聖なる座が空席となっておりますので、私どもは留保すると伝えました。そこで今は亡きステファヌスは神学者たちを集めてトマスの諸箇条を検討させようと考えたようです。でも法王庁の尊敬すべき方々から彼に、別命あるまでトマスの学説を審議するのは絶対に控えるように、と命じられたと言われております」¹⁴²⁾

なんと1277年3月7日の弾劾の直後、パリ司教のステファヌスはトマスも弾劾する気でいたのである。ただ偶然にも同じ年の5月20日に法王ヨハネス21世が死去したため、トマスの学説は追及を免れたに過ぎなかった。だが同じ手紙においてペッカムは何とも気になることを仄めかしている。

—— 私どもは、彼らドミニコ会にも彼らの意見にも、それがドミニコ会だからというだけ

の理由で反対する気持ちは毛頭ありません。ただ、先任のキルウォドビー師により自由学芸の中に見つけだされ、博士たちの会議で非難を浴び、多くの人々を再び躓かせることになる様々な間違いにつきましては、彼が行なった審議を正義によって実行するつもりでいます。¹⁴³⁾

—— 私どもは双方の見解をさらに検討し、「人間にはただ一つの形相しかない」と考える人々の誤りをこぞって斥け、この間違いを軽率にも弁護する者たちは全くの破滅の陥穽に陥っていることを認識するに至りました。つまり彼らなら「仮に人間が理性的靈魂とは別の形相を持っているとするなら、数的には同一である腐敗した遺体が奇蹟によって復活することなどあり得ないはずだ」と言いそうですし書きそうです。¹⁴⁴⁾

どうやらペッカムはトマスの学説について独自に審議を進めようとしていたことが窺われる。

—— こうしたわけでトマスや他のドミニコ会士の裁判につきまして許可はまだありませんが、私どもは神に恵みを求めるものです。なお、この件につきまして私どもはフランシスコ会士たちに全く内密で進めたのですから、私どものこの裁判にフランシスコ会士たちは何の責任も問われるべきではありません。ですから、これにより我々が二つの教団のあいだに不和の種を撒いたと言われるとしたら、それは違います。¹⁴⁵⁾

許可もないのに大司教の職権を発動したりすれば、法王直属であるドミニコ会が反発するのは必至である。それにもかかわらず、あえて審議を開始するということは事態が憂慮に堪えないほど深刻化していたということであろうし、またそれだけの大義名分があつたわけである。すなわちペッカムとしては「あくまで謬説を糾すのが目的でありドミニコ会に対し何ら含むものはない」ということだった。だが、そうは言いながらもドミニコ会への対抗意識を彼は隠しきれなかった。

「さらに私どもは、ドミニコ会の何人かが公然と『フランシスコ会よりもドミニコ会の方が真理の教えが栄えている』と言っていることを知りました。その反対です。なぜなら教会の高位の人々やより知恵のある人々は我々の側なのですから、彼らの自慢は間違いだと私どもは思いま

す。このことは書物と書物、人物と人物、有名な業績と業績を比較してみれば容易にわかることでしょう」¹⁴⁶⁾

年が明けた85年の1月1日、彼は法王庁に宛てて、前任のキルウォドビーがかつて弾劾した謬説がまた台頭してきていることを訴え、こう書いている。

「かの様々な謬説の中でも私どもが特に触れ、様々な明瞭な理由により非難している説は次のようなことを述べています。人間の中にはただ一つの形相しか存在しないこと。そのことから帰結することとして、聖なる方の身体は全体としても部分としても、地上のどこにもローマにも存在しないこと。総体的あるいは種的形相の単一性がなければ、いかなる身体も数的に一つではあり得ないこと。するとこのことから別の無数の不都合が生じてくるのです。そして実のところ、これが亡き兄弟トマス・アクィナスの意見だったのです」¹⁴⁷⁾

この言葉から、様々な謬説の元凶とは「世界の永遠性」とか「知性単一説」などを説くアリストテレスやシゲルスなど哲学者というよりもむしろ神学者トマス・アクィナスであり、その中核は実体的形相単一説と考えられていたことがわかる。ペッカムはさらに次のようにも述べている。

「聖なる父よ、それゆえ私どもはあなた方に書きます。この件につきまして、仮にあなた方の知恵のお耳に何かざわめくものがありましたら、事を誤ることなく認識なさいますように。また、疑問の余地あるあらゆる点において二つの教団の教えは今やほとんど完全に対立しており、そのうちの一方の教えは聖人たちの教えから離れ、それを軽視し、哲学の様々な独断にほとんど全面的に依拠していることに最聖なるローマ教会が気づいて下さいますように」¹⁴⁸⁾

執拗なトマス批判は翌85年6月1日にリンカーンの司教オリベルスに宛てた書簡にも現われている。

「神学的玄義に仕える限りは、私どもは哲学者たちの研究を少しも排斥しません。しかしここ20年のあいだに、聖人たちを侮辱し哲学的真理にも反するにもかかわらず、神学の高みに入り込んだ新しい不敬な学説については抗議の声をあげるものです。それは聖人たちが言われたことを明らかに捨てて軽視しているのです。いったいどちらの方がより確実で健全でしょうか。一つは聖フランシスコの子たち、つまり亡き兄弟

アレクサンデルや兄弟ボナベントゥーラ、またあらゆる欺瞞に無縁な著述において聖人たちや哲学者たちに依拠する同じような人々の教えです。もう一つは新奇な、ほとんど正反対の教えです。こちらは、アウグスチヌスが教えている永遠の基準と不変の光や、靈魂の諸能力や、質料に埋め込まれている種子的ラチオやこれらに類する無数のことについては何であれ、語句の詮索を全世界に持ち込み、力づくで破壊し弱めているのです」¹⁴⁹⁾

ペッカムの「ここ20年」 *citra viginti annos* という言葉をそのまま受け取ると、不敬な学説が登場したのは1265年ということになる。すると筆者は思い出す。前の章で見たシゲルスが最初に記録に登場するのは1266年だったことを。そこで仮にこの「20年」がシゲルスのことだとすると、ペッカムはトマスの思想をシゲルスの延長線上に見ていたわけで、哲学と神学の違いはあれ、どちらも理性主義の現れと考えていたことになろう。

以上から我々は、(1)アリストテレスの流入により生じた思想的地殻変動により当初の神学と哲学の対立は今や神学内の対立にまで及んでいたこと、(2)その神学における対立とはトマスの「哲学的な神学」とボナベントゥーラに代表される「哲学に否定的な神学」の対立であったこと、(3)両者の対立の核心はトマスが唱える実体的形相単一説にあったこと、(4)同説をめぐる見解の相違はドミニコ会とフランシスコ会という二つの托鉢修道会の対立にまで深刻化していたこと、を見てとることができよう。

三節 実体的形相単一説

実体的形相が単一であるとはどういうことか。

実体的形相が一つであることに何か不都合があるのだろうか。

実体的形相についてトマスはこう述べている。

「……実体的形相 *forma substantialis* が偶有的形相 *forma accidentalis* と異なるのは次の点である。すなわち偶有的形相が与えるのは端的な意味での存在 *esse simpliciter* ではなく、しかじかの存在 *esse tale* であることである。ちょうど熱はその基体を端的に存在せしめるのではなく、熱いものたらしめるように。……だが実体的形相は端的な意味での存在を与える。ゆえに、それが到来することで或るものが端的に生じると言われ、それが去ることで端的に滅びると言わ

れるのである」¹⁵⁰⁾

すなわち実体的形相とはまさに「在る」ということをもたらし原理である。そして「人間には、ただ知性的靈魂しか実体的形相はない」¹⁵¹⁾というのがトマスの主張である。

伝統的に人間はプラトンの霊肉二元論で、つまり靈魂と身体という全く異質な二要素から成る存在と考えられていた。これは人間が「私」という意識を強く持つ存在である以上、ごく自然なことだろう。この立場でいくと、今この拙論を書いている「私」とはあくまで靈魂のことであろうから、結局のところ「人間とはつまるところ靈魂」ということになり、身体は靈魂とは別に存在する何かということになる。すると、ちょうど「運転手と自動車」のように、靈魂は靈魂で、身体は身体で、それぞれ別々に存在していることになるから、一人の人間の中に「靈魂」の形相と「身体」の形相が水と油のように並存していることになろう。つまりおのずと実体的形相複数説になることだろう。

この伝統的人間観とは異なる立場を採ったのがトマスだった。その根底には彼が採用した新しい存在論があった。

伝統的な存在論はアリストテレスに発する。彼の思想はヘレニズムの典型だったから、世界を創造する人格的な神など登場しない。一応、恒星天の彼方に神々が存在することになっているが、この世界とは全く無関係である。だから事物の存在について問われても「形相が質料に結びつくことで、事物は初めて存在する。ゆえに形相こそ事物を存在せしめる原理である」という説明で事は足りる。

だがヘブライズムでは神による創造が説かれる。その創造とは「存在の賦与」であるから、事物を存在せしめているのはその事物の形相ではない。あくまでも神である。すると事物は、神から存在を賦与される以前は、アリストテレス的に言えば、可能的に事物であったことになろう。そこで、神から存在を受け取る以前の、可能態としての事物は本質 *essentia* として理解されるようになった。

思想史上このように「神だけが存在で、神以外のものは存在と本質の複合体」という考えを打ち出したのはイスラムの神学者アビケンナらしい。これでいくと、神は存在そのものであるから必然的に存在するが、神以外のすべての事物は神から存在を与えられることで初めて存在することになる。こうした

被造物における「存在と本質の分離」の考えをトマスは採用した。するとどうなるか。

—— ただ神だけが存在を与える。その存在を受け取ることで人間は人間として存在する。
すると人間の本質には靈魂だけでなく身体も含まれることになる。

「人間は身体も含めて人間」となると、どうしてもプラトンの霊肉二元論では収まらなくなる。「運転手と自動車」のように靈魂が一方的に身体に働きかけているのではなく、靈魂と身体が一体となって様々な働きをしていることになろう。

—— 「感覚する」というのは単に靈魂の働きではなく、「この私」の働きである。だから人間とは靈魂だけではなく、靈魂と身体の両方から成り立つ何かである。¹⁵²⁾

—— 事物は、それが有する形相によって働く。さて身体は靈魂によって生の働きをする。ゆえに靈魂とは身体の形相である。¹⁵³⁾

—— 靈魂は身体の形相であるから、自らの存在を通して身体と直接的に一つになっている。

¹⁵⁴⁾

このように靈魂と身体結びつきが強調されると、一人の人間のなかに「靈魂」と「身体」の二つが水と油のように並存しているのではなく、両者が形相と質料として本来的に結びつき、それに存在が与えられることで「この私」という単一の実体が形成されることが考えられることになろう。するとこの場合の人間には靈魂しか形相はないわけだから、実体的形相単一説になるわけである。トマスは言う。

「仮に靈魂は形相としてではなく動者として身体と結合しているとすると、確かにプラトンの意見も維持できるだろう。……しかし形相として身体と結合されているなら、一つの身体の中に本質的に異なる複数の靈魂が存在するとは考えられるのは絶対に不可能に思われる。……第一には、複数の靈魂があるような動物は端的な意味で一なる動物ではないからである。……従って仮に人間が栄養的靈魂から生物であることを、感覚的靈魂から動物であることを、理性的靈魂から人間であることを得ているなら、人間は端的に一なるものではないことになろう。……ゆえに数的に同一の靈魂が人間においては感覚的であり知性的であり栄養的であると言うべきである。……かくして知性的靈魂はその能力において、獣たちの感覚的靈魂や植物たちの栄養的靈魂が

持つものをすべて含んでいるのである」¹⁵⁵⁾

しかし伝統的立場に立つ人々は、この考えでいくと靈魂と身体結びつきが強くなりすぎることに危惧を覚えた。

—— 「靈魂と身体で人間」と言うなら、肉体が減れば靈魂も減びてしまうではないか。これでは靈魂の不死を言えなくなる。

これについてトマスに言わせれば、人間の靈魂は知性的なるがゆえに、個別的な事物ではなく事物の本性を認識するのであり、またそのために靈魂自身は純粋な形相であるから、¹⁵⁶⁾ 質料である身体が減びても、永遠に存続する。¹⁵⁷⁾ 従って実体的形相単一説でも靈魂の不死性が損なわれることは全くない。ところがこれについても保守派は反対した。

—— 靈魂は形相だけだから不滅と言うが、質料を持たないなら靈魂は区分されないことになろう。するとアベロエスが「全人類に能動知性は一つしかない」と言ったのと同じことになってしまうではないか。

—— それに靈魂が形相だけなら、受動とは質料あつての話だから、身体から分離した死後の靈魂は外から何も作用を受けないことになろう。すると地獄に落ちても苦しまないし、天国で至福を味わうこともあり得ないことになる。

そこで保守派は、各人に靈魂を確保しつつ同時にその靈魂に受動を可能にする方法を考えた。

—— 身体が変化するように、心にも変化がある。例えば悪人が善人になるとか、世俗の哲学を学んでいくうちにキリスト教に帰依したり、とかいうように。これらは靈魂が変化するということだ。しかるに変化とは、質料が形相を実現していく過程であるから、靈魂にも何かしら質料的なものがあることになろう。また、そうした質料性ゆえに靈魂は人それぞれで違うわけである。

かくして**靈的質料** *materia spiritualis* という概念が唱えられるようになった。アリストテレスでは物質的な事物にのみ限定されていた質料を靈的なものにも認めるわけである。

さらに保守派は「死によって靈魂が去った後の身体も依然として身体である」と言う必要があると考えた。というのは仮に「靈魂だけが身体の形相」とすると、身体はただの質料ということになってしまい、それでは秘蹟においてパンがキリストの肉つまり身体に変わることが説明できなくなってしまうか

らである。

—— トマスが言うように人間の実体的形相はただ一つ靈魂だけだとすると、死によって靈魂が去った後の身体には形相がないことになる。すると、それはもはや身体ではなく、ただの質料にすぎないことになろう。しかし『ヨハネ福音書』19章34節では十字架から降ろされたキリストの脇腹を兵士が槍で突くと血と水が流れたと書かれている。ということは靈魂が離れた後でも、そこには依然として身体があったわけだ。

するとキリストにおいても靈魂とは別に、身体独自の形相があったと考えられよう。そしてまた実際そう考えた方が秘蹟における聖体変化を説明するうえでも好都合である。つまり「司祭の祝福と同時にキリストの身体の形相がパンに入り込む。それによりパンがキリストの肉に変わる」と言えばいいわけである。すると、この点からも実体的形相単一説は具合が悪いことになろう。

四節 『兄弟トマスの訂正』とその反論書

このようにフランシスコ会を中心とする保守派のあいだでは、実体的形相単一説を中核とするトマスの神学は問題が多いと否定的に見られていたにもかかわらず、トマスの影響力には絶大なものがあり、フランシスコ会の中にもトマスの著作を読む者が存在した。そこで事態を憂慮したオクスフォードのフランシスコ会士ギレルムス・ラマレンシス（ラ・マルのギョーム、1230頃－1290頃）はトマスの著作から問題と思われる118箇所を抜き出し、それらの内容を大まかに説明したあと、自分の批判を加えたトマス批判書を著した。それが1278年から79年の頃に出版された『兄弟トマスの訂正』 *Correctorium fratris Thomae* である。同書は大きな反響を呼び、82年にシュトラスブルクで開かれたフランシスコ会の総会では、同教団の神学の教師はこの批判書なしではトマスの『神学大全』を所持してはならないこと、テキストの改変を防ぐため複写に際しては俗人に委託してはならないことが定められた。¹⁵⁸⁾

こうしたフランシスコ会のトマス批判に対してドミニコ会も反撃した。1279年にトマスの学説を同会公認とすると、1286年にはすべてのドミニコ会士はトマス説を擁護すべきと決定した。するとその結果であろうか、『兄弟トマスの訂正』に著者ギレルムスへの批判を追加した一群の反論書が次々に記され

た。それらのうちの最初でまた最も資料価値が高いのはイギリスのドミニコ会士で神学博士のリカルドゥス・クラポリ (リチャード・クラップウェル) が80年代の早い時期に書いたと推定されているものである。同書はリカルドゥスがギレルムス批判を始める部分の言葉「君たちの誰も私に反論できる者はいないのに、どうして君たちは真理の言葉から逃げたのか」(Quare detraxistis sermonibus veritatis cum e vobis nullus sit qui possit arguere me?)¹⁵⁹⁾ にちなみ Quare と呼ばれている。以下において (1) 実体的形相の単一性と (2) 霊的質料, そして (3) 霊的実体の個別化について, ギレルムスのトマス批判とリカルドゥスによるトマス擁護を見てみよう。

(1) 先に見たようにトマスは, 人間の実体的形相は一つ, すなわち知性的靈魂があるだけで, この知性的靈魂一つで人間は物体でもあり, 植物でもあり, 動物でもあり, 人間でもあると主張した。

—— あくまでも魂は一つであり, それが胎児において最初は栄養的, 次第に感覚的, そして最終的に知性的靈魂へと成長していくのである。三つの魂があるのではない。¹⁶⁰⁾

まずトマスのこの立場に対するギレルムスの批判。

「実体的形相単一説は, 第一にはカトリックの信仰に反することが複数の論拠から出てくるから, 第二には哲学とも矛盾するから, 第三には聖書にも反するから, 以上により学者たちから拒否されている」¹⁶¹⁾

ギレルムスに言わせれば, 種子から人間が生成されるに際してはまず存在が, 次に植物的靈魂が, その次に感覚的靈魂がもたらされ, 最後に理性的靈魂が吹き込まれるのであるが, どれも同一の個体に関係しているのだから, 理性的靈魂が流入したところで先行する感覚的靈魂や植物的靈魂が減じるわけではない。これらは階層的gradusに依然として存在しているのであり, それらの中では最後に来る理性的靈魂が一なる存在をもたらししているとする。¹⁶²⁾

次にギレルムスのこの見解に対して, トマスを擁護するリカルドゥスからの反論。

「……人間には一つの単純な靈魂しかなく, それに植物的な力が生じて, その限りで植物的靈魂と言われる。また先に述べられたすべての感覚的能力が生じて, その限りで同じ靈魂が感覚的靈魂と言われる。さらに知性的能力が生じて,

その限りで理性的靈魂と言われる。このことは確かなこととして保持されるべきである」¹⁶³⁾

彼によれば仮に人間の中に植物的靈魂, 感覚的靈魂, 理性的靈魂が並存しているなら, 理性的靈魂は身体 of 形相ではなく動者になってしまい, そうなると靈魂が身体に対する関係は, ちょうど運転手が自動車に対するように, 偶然なものになってしまう。

¹⁶⁴⁾ また, こうも言う。

「さらに彼ら(ギレルムス)が考え出した別の回答には何の価値もない。種子から理性的靈魂の流入に至るまで, 質料における備えが進行することは認めるとしても, 種子と胚は違うし, 胚と人間は違うとしなければならない。従ってあるものの生成は別のものの滅亡であるからには, 胚の生成は種子の滅亡であり, 同じく人間の生成は胚の滅亡のはずである」¹⁶⁵⁾

ギレルムスは, 種子から胚そして人間まで同一の個体であるから理性的靈魂が最後に入り込んでも先行する植物的靈魂や感覚的靈魂は維持されると考えるのに対し, リカルドゥスは種子と胚と人間は別物だから, それぞれの形相となっている靈魂も別物のはずで, 理性的靈魂が最後に登場すると先行する靈魂はもはや存在しないと考えるわけである。どちらにしても「人間を人間として存在せしめている形相は理性的靈魂」という点では変わりはないのだが, このように実体的形相の数をめぐる見解の相違により靈魂観にも大きな違いが出てくることになる。

(2) トマスによれば, 知性的靈魂は事物を認識する際に, その事物をあれこれの個別的な事物としてではなく, あくまでも普遍的なものとして認識する。それと言うのも知性認識の対象は質料から抽象された形象 species であり, 質料抜きである以上, その認識は個別的ではなく普遍的なものだからである。だから例えば遠方に馬がいれば, 視覚なら「あの馬」とか「この馬」というように一頭ごとに認識するのに対し, 知性は単純に「馬」として普遍的に認識するわけである。このことから逆に, 知性的靈魂は, 非質料的な形象を受け取るがゆえに, それ自体は質料をもたないとされる。つまり知性認識をする靈魂は, それが天使であれ人間の靈魂であれ, 質料を持たない純粋な形相なのである。¹⁶⁶⁾

このトマスの主張をギレルムスは批判する。

—— 仮にトマスが言うように「靈魂には質料な

どない」とすると、働きを形相に、能力を質料に帰している哲学に反することになる。

靈魂が純粹な形相なら、その能力はすべて能動的で、受動的なものは全くなくなってしまわないか。¹⁶⁷⁾

- すると地獄の火による罰もなければ、神による至福を受け取ることもないだろう。受け取るというのは受動的能力のことで、それは質料あってこそ可能なからだ。¹⁶⁸⁾
- そもそも不変なのは神だけである。しかるに『マタイ福音書』25章41節には「呪われた者ども、私から離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ」とある。ここでの悪魔の手下とは墮天使のことである。ということは天使は墮落可能な存在ということになるから、天使ですら何らかの質料を持っているはずだ。¹⁶⁹⁾

かくしてギレルムスはアウグスチヌスの『創世記逐語解』第5巻5章を挙げて天使に靈的質料を想定する。¹⁷⁰⁾ 天使にすら靈的質料があるなら、人間の靈魂は当然それ以上に形相と靈的質料から成る合成体と考えるべきだろう。

こうした「すべての靈魂は質料を有している」とするギレルムスの主張に対してリカルドゥスは「天使や人間の靈魂には、たとえ靈的なものであれ質料などない」と反論する。

「彼らがここで言っていることはある虚偽に依拠している。それにより彼らは靈的質料なるものをでっち上げ、その靈的質料と形相から天使と靈魂は合成されているのだとしている。そんなことをアリストテレスは言っていないし、アウグスチヌスも靈的質料と名づけている箇所でもその手の質料のことを考えていたのではなかった」¹⁷¹⁾

確かに天使や靈魂にも変化があることをリカルドゥスも認める。しかし彼らに変化が生じる原因は「質料を有するから」ではない。

- 天使なら「天使」、靈魂なら「靈魂」という本質が形相と質料から合成されていると考えるべきではない。天使であれ靈魂であれ靈的被造物の本質は形相だけである。それが神から与えられた存在と結合することで、天使も靈魂もはじめて存在できるのである。ということは、神から存在が与えられるまでは、天使も靈魂も可能態なわけである。そ

こで、本質のこうした可能性を指して、アウグスチヌスは靈的質料と呼んだのだ。¹⁷²⁾

そしてギレルムスが『創世記逐語解』を挙げて靈的質料を想定したのに対抗して、リカルドゥスも同じ『創世記逐語解』を挙げる。¹⁷³⁾ 同じ聖人の同じ著書が対立する二つの主張の双方から権威として挙げられるとなると、筆者のような懷疑の徒には、どちらも自分に都合のいい部分だけを取り上げているように思われ、それこそベレンガリウスが指摘していた恣意性を感じてしまう。

(3) 靈的質料を認めるか否かの問題はそのまま天使や靈魂など靈的実体の個別化の問題に直結する。そして、そこから神の全能 *omnipotentia Dei* が問われることになる。

Quare の11項では「同一の種に天使が二人いるのは不可能なこと」と題されている。これについてトマスはこう考える。

- 「種としては同じだが数的に異なるようなもの」というのは「形相においては一致するが質料的に異なるもの」である。しかるに天使には質料などないから、同じ種に二人の天使が存在するということはあり得ない。それは、ちょうど「白さ」は複数の実体において存在しない限り、複数の「白さ」があると言われないようなものである。¹⁷⁴⁾
- あるものを他のものから分かつ原理は質料であるが、天使は物体ではないから、量的に区分されるのではなく、能力の多様性で区分される。それが熾天使から天使まで九種の天使なのだ。¹⁷⁵⁾

かくしてトマスによれば世界には一種に一人ずつ全部で九種九人の天使しかいないとされる。これについてギレルムスは批判する。

「この立場は神の全能を損なうことになるから、カトリックの信仰に反しているように思われる。というのは天使が多であるか一であるかは自然の働きによるのではなく神の能力の働きによるから、同一の種に二人の天使がいることは不可能と言うことは、神はこのことを為し得ない、あるいは為せなかったということになる。それはパリの司教と教授たちにより弾劾されたことである」¹⁷⁶⁾

この引用の最後の一文については本章の一節で見た1277年の弾劾の第81箇条に「知性実体は質料をも

たないゆえに、神は同じ種に属する多数の知的実体を造ることはできない」とあったことを思い出してほしい。同箇条は実はトマスを非難したものだったのだ。それは詰まるところトマスが行なった哲学の知識を神学の知恵ために役立てようとする試みへの警告だったのである。トマス自身はあくまで「神学のための哲学」であり、水を葡萄酒に変えているつもりだったのだが、フランシスコ会を中心とする保守派からすれば哲学を用いること自体が聖書に理性主義を招き入れ、遅かれ早かれ葡萄酒を水にしてしまう行為だったのである。だからシゲルスのような急進的アリストテレス主義者は当然であるが、敬虔無比なトマスでさえ理性主義という点では同じ穴の貉と見られ、排撃の対象と考えられていたわけである。

フランシスコ会の一員であるギレルムスもその方針に従い、トマス神学に潜む理性主義に目を光らせる。そして「天使には質料はない。質料は事物を個別化する原理である。ゆえに天使は多数の個体に分かれることなく単一の個体である」というトマスの論理に理性主義を嗅ぎつけ、神の全能に対する冒瀆として非難するわけである。ギレルムスに言わせれば、神の能力は無限であるから自然的な制約を受けることはあり得ず、従って、どのような天使を何人造るかなどはすべて神の意志次第なのである。

このように神の全能を強調するギレルムスに対し、リカルドゥスは正面から反対する。

「天使の単純性ということから、同じ種に二人の天使が存在することは不可能であることは明らかである。このことは信仰に反することではないし、神の能力を減じるものでもない。天使たちは質料なしに自存する単純な形相なるがゆえに、彼らが、種に多様性をもたらす形相的種差のみにより異なっていることは明らかであるから、『天使たちは同じ種ではあり得ない』と言うことは、『何であれ種によって異なるものは同じ種ではあり得ない』と言うことと同じく、何ら神の能力を減じることにはならない」¹⁷⁷⁾

この問題での二人の立場の違いとは結局のところ霊的質料を認めるか認めないかである。

ギレルムスによれば霊的質料があるからこそ、天使も霊魂も多なるものとして存在するのである。仮に霊的質料などないとしたら、深刻な誤謬に陥ると彼は考える。

—— トマスは『神学大全』の第1部の第76問題の第2項の第1異論回答において「人間の霊魂は天使と同じく質料を持たない」としている。ただし天使とは異なり、人間の霊魂は身体の形相であるから、質料が区別されることにより、人間という単一の種に多数の霊魂が存在すると言う。……でも、多数の身体へと組み込まれることが霊魂の多数化の原因というなら、身体から離れることは霊魂が一つになるということだろう。すると死後の人間の霊魂は単一ということになり、至福や地獄など死後の応報が説明できなくなってしまう。これではアベロエスの能動知性単一説の誤謬と実質的に変わらないではないか。¹⁷⁸⁾

これに対しリカルドゥスはトマスの立場からはいかなる誤謬も出てこないと反論する。

—— 全人類に知性は一つしかないというアベロエスの誤謬に対し、トマスは同じ箇所や他の多くの箇所でも誰よりも批判している。¹⁷⁹⁾

—— 仮に知性的霊魂が身体から存在を持つとするなら、確かに身体が減れば霊魂も減びてしまうであろう。でもそれは間違いだ。身体が形成される際に創造者である神から受け取る存在を、その多数性とと同じく、霊魂は永遠に保持するのである。¹⁸⁰⁾

どちらの言い分に説得力があるだろうか。これまで見てきたことから分かるように双方とも噛み合わない主張を繰り返すばかりである。

—— 人間には実体的形相はただ一つ、知性的霊魂しかない。その一つだけで人間は生物でもあり動物でもあり人間でもある。

—— いや違う。複数の霊魂が形相になっている。我々は植物的霊魂により生物であり、感覚的霊魂により動物であり、知性的霊魂により人間なのだ。

—— 人間には知性的霊魂しかないから、人間の霊魂には質料はない。

—— いや違う。天使にも人間の霊魂にもある種の質料がある。

—— 天使には霊的実体であるから質料はない。ゆえに一種に一人の天使がいるだけである。

—— いや違う。霊的実体にも霊的質料があるから、それにより複数の天使が存在している。こういう雲を掴むような議論の応酬を世間では

「神学論争」と呼ぶ。議論の不毛さに実はリカルドゥス自身も気づいていたようで、第48項では実体的形相が複数あるとする人々に対して愚痴とも言い訳ともつかない独り言が書かれている。

「……よく思うことだが、仮に私が、そういうことを述べている様々な議論をいかにすれば論破できるのか知っているなら、逐一、回答を示せるのだが、私は嘘をつくわけにはいかないから、神の御前において見ていただきたい。だから私は、傲慢と見られないように我慢して何も断言しないでいるし、作りごとやたわ言を言わないように、自分の無力あるいは無知を自覚して、先に述べられた様々な議論に対して何も答えないようにしているのである」¹⁸¹⁾

何とも頼りない言葉である。神と言う絶対の真理を探究している神学者でありながら、神について本当に確かなことは実は分からないようなのである。すると「何も答えない」ではなく「何も答えられない」が真実だろう。こんな調子では何か言ったとしても「作りごとやたわ言」になるのが落ちだろう。その自覚があったからこそリカルドゥスは「私は嘘をつくわけにはいかないから」と述べているわけだが、これはこれでまた問題発言である。つまり一見、謙遜ともとれる言葉の裏に「君も本当は嘘をついている。しかも君の場合は、私と違って嘘の自覚がないから、なおさら性質が悪い」という強烈な皮肉がこめられているのである。彼は続ける。

「恐らくカンタベリーの監督か、あるいはこの監督から真理をもっと明確に示してもらえる誰かが、我々に答えを教えてくれることだろう。この項においても先に論じた他の諸項においても我々が主であるイエス・キリスト自身が、探求されている真理を我々が理解できるように教えてくれるはずである、そしてその教えによって真理が理解され、名誉と栄光がとこしえにある方を褒め讃えることであろう。アーメン」¹⁸²⁾

つまりカンタベリー大司教のペッカムに対し「そんなに神の全能と言うなら、実体的形相が複数であることを証明してみなさい、神なら理解力に乏しい人間にも分かるようにしてくれるはずだろう」と不遜とも取れる挑発をしているのである。

これが直接の理由かどうかは定かでないが、1286年4月30日、ペッカムは彼の管区に異端の学説がまた広まってきたとして弾劾した。

—— かつて異端として弾劾された様々な誤謬が

また新たに生じていると聞く。新たに流布しているこれら諸箇条について、それらを擁護する者は誰であれ全員、頑迷な異端者であり、間違った新奇な学説により虚名を得ている輩と見なす。…… いかなる言葉で取り繕おうとも、これらを公然であれ密かであれ、強情にも肯んずる者は破門され呪われるべきことを告知する。¹⁸³⁾

彼は異端として八箇条を挙げているが、それらの最初の六つはキリストの遺体に身体の形相があったか否かという問題と、¹⁸⁴⁾ それに付随する秘蹟のパンに関するものだった。¹⁸⁵⁾ そして、これら誤謬の原因として、やはり実体的形相単一説を指摘した。

「第八には、人間にはただ一つの形相すなわち理性的靈魂だけがあり、他には何も実体的形相はない、というものである。この考えから上に述べたすべての異端説が出てくるように思われる」¹⁸⁶⁾

ペッカムは具体的に名を挙げたわけではなかったが、リカルドゥスと彼が所属するイングランドのドミニコ会はただちに反発、リカルドゥス自らローマに赴き、法王に非難の不当を訴えた。しかし時の法王ニコラウス4世はフランシスコ会出身でリカルドゥスの直訴に対し無言のままだったと伝えられている。こうなると、もはや二つの托鉢修道会の泥仕合である。どこに知恵があるのだろうか。それに、こんな有様では知恵の源泉をうたう法王の権威も形無しだろう。実際いま挙げたペッカムの弾劾においても教会の権威をものとしめない風潮が異端として挙げられている。

「第七には、これらのことを説く者たちは、グレゴリウスやアウグスチヌスといった司祭や博士たちの権威には信頼を寄せておらず、ただ聖書の権威と必然的な理性とに依っている」¹⁸⁷⁾

教会ではなく**聖書と理性** —— それはまことに来る時代を予告するものだった。

結論

西欧へのアリストテレス思想の流入は思想界に革命的变化をもたらした。聖書と哲学の矛盾という事実を突きつけられた人々は、啓示と理性が、トマスが言うように、本当に調和するのか疑問に思うようになったのである。

矛盾が露呈した当座は神学はもちろん哲学の側に

においても「あくまで啓示だけが真理」と考えられていた。そのように考えられたのは、ステンベルヘンによれば「誰であれアリストテレスを学んだ以上は、彼が掲げる矛盾律を無視できない」という単純明快な理由によるものだった。¹⁸⁸⁾

矛盾律とは同一律、排中律と並びアリストテレス論理学の根本原理の一つであり、「同一のものについて同時に肯定し、かつ否定することはできない」ということである。だからアリストテレスの説くところが聖書と食い違っている場合は両方とも正しいと言うことはできない。ゆえに伝統的に二重真理の徒と目されていたシゲルスでさえ聖書とアリストテレスが対立した場合は常に聖書の方が正しいとすることで、矛盾律を遵守していたのである。矛盾を避けようとした点で彼はアリストテレスの教えに忠実だったわけである。先に見た『知性的靈魂論』の七章にはこんな言葉が見出される。

「仮に誰かが『知性的靈魂は私において存在する何かであるが、神はそれに似た別のものを造れるのだから、複数の知性的靈魂が存在するであろう』と言うなら、『矛盾していて同時に反対なことは神でもできないし、全員がソクラテスであるような人間を複数造ることもできない』と言うべきである。というのは仮に神が、そうした人々が複数にして一人であるように造るとすると、彼らは複数でありながら複数ではなく、一人でありながら一人ではないことになってしまうからである。だから仮に知性的靈魂がその定義上ソクラテスのような何らかの個体で自存するものなら、今あるものと同じ種に属する別の知性的靈魂を造ることは、それを別でありつつ同じものに創るということになろう。さて質料から分かれたものどもにおいては個体は種そのものであるから、種としては別の個体であるものが別の個体に含まれることになってしまう。だがそんなことは不可能である」¹⁸⁹⁾

ここには矛盾律を神にまで一貫させようとする姿勢が如実に現われている。だが、このように矛盾律を絶対として、神ですら矛盾したことは不可能という主張はある意味で理性主義の極みであるから、哲学に警戒的な保守派の神学者は反発するようになった。つまり「そんな主張を認めたら、神よりも論理法則の方が上ということになってしまう」というわけである。

かくして13世紀も終わりに近づくと、論理を重視

する理性主義に対抗するため、神の全能が強調されるようになった。最後の節で見たフランシスコ会士ギレルムス・ラマレンシスの「神の全能を以てすれば、一つの種にいくらでも天使を創造できる」という主張などはその典型だろう。そして「神は全能である」という主張は、神は論理に従って動くのではなく自らの意志で動くということであるから、ここから神の意志が強調されるようになり、次第に神を合理的というよりも意志的な存在とする主意主義の神学が保守的なフランシスコ会士のあいだで模索されるようになっていった。

だが、このように神の全能が強調されるようになると、神は矛盾したこともできるということだから、聖書と哲学とで矛盾があってもそれほど神経質になる必要はないだろう。かくしてステンベルヘンが言うところでは、13世紀の終わり頃には公然と二重真理が語られるようになっていたらしい。その例として彼はヨハネス・ジャンダン（1285頃-1328）を挙げる。¹⁹⁰⁾ 1310年頃にパリ大学学芸学部で教えていたジャンダンはアリストテレスとアペロエスの模倣者と公言し、二重真理を表明していたらしい。神は不可能なことも可能に出来るとなれば、神学と哲学が矛盾したままでも一向に構わないわけである。これが一代前のシゲルスなら、聖書と哲学とで矛盾があれば「聖書の方が正しい」と宣言したうえで、テキスト上に展開されている論理を追いかけて哲学がどこで間違えたのか知ろうとした。だがジャンダンになると対立する主張を並列させたまま、自分には克服できないと述べるばかりである。「啓示と理性が対立した場合は啓示が正しい」ではもはやないのである。これは見方によれば、それだけ神学が相対化されたということだろう。神学が標榜する知恵は今や決して絶対ではなくなったのである。

- アリストテレスの流入。
- 論理を重視する理性主義の流行。
- 保守派による神の全能の強調。
- 二つの修道会の神学的対立。
- 神学そのものの権威の相対的低下。

これらの思想的動向に加えて1303年には王権の伸長を図るフランス国王フィリップ4世の意を体した一党が、ローマ南東のアナーニに滞在していた時の法王ボニファティウス8世を拉致せんとして捕縛、殴打を加える事件が発生した。法王は救出されたものの余りの屈辱と心労で一月後に悶死した。

さらに1309年にはフィリップ4世の強い慫慂によ

り法王クレメンス5世はプロバンスのアビニョンに遷座、これにより現実政治においても法王の聖権に対する世俗の王権の優位は誰の目にも明らかになった。学問においても政治においても時代の趨勢は今や世俗化だったのである。

思えば歴史的に神学のみが唯一絶対に正しい学問と考えられていた。例えばカッシオドルスはこう述べていた。

「なぜなら神学的学問は真理という不変の権威を擁している以上、この学問のみは欺くことはあり得ないからである」¹⁹¹⁾

トマスも哲学より神学の方が優れている理由として確実性を挙げていた。

「人間理性は神的な事柄においては多くの間違いをする。その証拠は、人間の事柄について自然的探究をしている哲学者たちが多くの点において誤り、互いに反対のことを表明してきたことである。ゆえに人々が神について疑いのない確実な認識を持てるようにするために、いわば欺くことができない神によって語られたこととして、神的な事柄が信仰という形で人々に伝えられねばならないのである」¹⁹²⁾

しかるに現実はどうだろうか。聖書とアリストテレス哲学の矛盾から明らかになったことは、神学の疑わしさだった。恐らく当時の知識人たちはこう思ったことだろう。

——哲学者たちの説くところが様々であり矛盾しているというのは確かにその通りである。では我々に確実性を約束している神学の方はどうなのだろうか。実のところ神学も哲学に負けず劣らず言うことが矛盾しているではないか。知恵は唯一絶対ではなかったのか。神の啓示に基づいているはずなのに、どうしてドミニコ会とフランシスコ会で教えるところが違うのだろうか。どちらの修道会も「知解を求める信仰」を実践して日夜ひたすら神に祈り、神の恩寵の光で照明されているはずであろうに。こうして見ると啓示に基づく神学の知恵とやらも確実ではないように思われる。

かくして神学に対する失望が次第に広がるなか、十三世紀の終わりから十四世紀にかけて二つの思想的傾向が強まっていった。

(その一) 哲学との違いを明確化するために、認識の根拠を神の照明に求め、学問としての神学を再構築しようとする試み。

(その二) 認識の対象を自然界に限定することで哲学をもはや神学の婢女ではなく、自立した学問として追求してゆこうとする動き。

前者はフランシスコ会を中心とした主意主義の神学であり、後者は学芸学部 of 哲学教師たちを中心とした中世自然学の系譜である。知恵が優位を失うその一方で、知識が独り立ちを始めたのである。

脚 注

邦訳のない文献についてはすべて拙訳であるため、確認のために原文をつけておく。筆者の誤訳や曲解などを見つめられた方は御教示いただければ幸いである。

- [1] 『ピュロン主義哲学の概要』3巻3章3節 p.264
- [2] 同上 3巻3章4-6節 pp.264-266
- [3] 『異教徒たちへの異議の書』Liber de praescriptionibus adversus haereticos.c.7, PL.2,col.20-21. “ Quid ergo Athenis et Hierosolymis ? quid Academiae et Ecclesiae ? Quid haereticis et Christianis ? Nostra institutio de Porticu Salomonis est, qui et ipse tradiderat Dominum in simplicitate cordis esse quaerendum.Viderint, qui stoicum et platonicum et dialecticum Christianismum protulerunt. Nobis curiositate opus non eat, post Christum Jesum; nec inquisitione, post Evangelium. Cum credimus, nihil desideramus ultra credere. Hoc enim prius credimus, non esse quod ultra credere debeamus.”
- [4] 『護教論』46章18節 p.136
- [5] 『コロサイ人への手紙』2章8節
- [6] 『ローマ人への手紙』1章20節
- [7] 『真の宗教』52-101.p.388
- [8] 『三位一体論』5巻2章 p.169
- [9] 『信の効用』1-2,p.16 「……僕たちがある人々（マニ教徒）の仲間ひきずり込まれた理由は、彼らが、恐ろしい権威を切り捨てて、ただ単純な理性のみによって、自分たちの言うことを聞こうと望んでいる人々を、神に導き、かつすべての誤謬から解放すると公言していたからにほかならなかった。いったい僕が、子供の時から両親によって植えつけられた宗教を軽蔑して、九年間あの人々に従い、かつあの人々の言うことに熱心に耳を傾けざるを得なかったのは、彼らが、僕たちは迷信におそれ従い、理性以前に信仰を持つように命じられている、しかし自分たちはあらかじめ真理について議論し、これを明らかにするのでなければ、誰一人として信仰をおしつけるようなことはしない、と言っていたということ以外のどんな理由であったであろうか」
- [10] アウグスチヌス『告白』6巻4章6節 p.269
- [11] 同上 5巻10章19節 p.251 「……アカデミア派と呼ばれている哲学者たちの方が、他の人々よりも思慮深いのではなからうか、という考えが私の中でふくらんでいました。彼らは、すべてを疑うべきだと考え、どんな真実も人間には捉えることはできないと判断していました」

- [12] 『信の効用』 8-20, p.45
 [13] 『三位一体論』 12巻15章 p.354
 [14] 同上 12巻12章 p.347
 [15] 同上 9巻8章 p.270
 [16] 説教61, p.182
 [17] 『キリスト教の教え』 2巻39章58節 p.139
 [18] 『出エジプト記』 12章35-36節「イスラエルの人々はモーゼの言葉どおりに行い、エジプト人から金銀の装飾品や衣類を求めた。主は、この民にエジプト人の好意を得させるようにされたので、エジプト人は彼らの求めに応じた。彼らはこうして、エジプト人の物を分捕り物とした」
 [19] 『キリスト教の教え』 2巻40章60節 p.141
 [20] 同上 2巻40章60節 p.141
 [21] 同上 2巻40章60節 p.141
 [22] 同上 2巻40章60節 p.141
 [23] 同上 2巻40章60節 pp.140-141
 [24] 『秩序』 1巻11章32節 p.251
 [25] 『真の宗教』 24-45 p.329
 [26] 『自由意志論』 2巻2章6節 p.75
 [27] 『三位一体論』 15巻27章 p.508
 [28] 『フランク史』 10巻の歴史』 p.4
 [29] そのプラトンにしたところで十二世紀までに知られていたのは『パイドン』、『メノン』、『ティマイオス』程度だった。
 [30] 『聖餐論』 De sacra coena adversus Lanfrancum. p.99. “.....sacris, inquis tu, auctritatibus relictis ad dialecticam confugium facis, et quidem de misterio fidei auditurus ac responsurus, quae ad rem debeant pertinere, mallem audire ac respondere sacras auctritates, quam dialecticas rationes. Verum contra haec quoque nostri erit studii respondere, ne ipsius artis inopia me putes in hac tibi parte deesse.”
 [31] ibid. p.100. “ Quod relinquere me, inquo ego, sacras auctoritates non dubitas scriber, manifestum fiet divinitate propicia, illud de calumpnia scriber te, non de veritate, ubi deducendi sacras auctoritates in medium necessitate inde agenda locus occurrerit, quanquam ratione agere in perceptione veritatis incomparabiliter superius esse, quia in evidenti res est, sine vecordiae coecitate nullus negaverit. Unde ipse dominus, adhuc modicum, inquit, in vobis lumen est, ambulate,”
 [32] ibid. pp.100-101. “ Verbis dialecticis ad manifestationem veritatis agere non erat ad dialecticam confugium confugisse, a quo ipsam Dei sapientiam et Dei virtutem video minime abhorrere, sed suos inimicos arte revincere.”
 [33] ibid. p.101. “ Maximi plane cordis est, per omnia ad dialecticam confugere, quo qui non confugit, cum secundum rationem sit factus ad imaginem Dei, suum honorem reliquit, nec potest renovari de die in diem ad imaginem Dei.”
 [34] 『神の全能について』 De divina omnipotentia.c.5, PL.145,col.603. “ Et quia inter rudimenta discentium vel artis humanae nullam apprehendere peritiam, curiositatis suae nubilo perturbant puritatis ecclesiasticae disciplinam. Haec plane quae ex dialecticorum, vel rhetorum prodeunt argumentis, non facile divinae virtutis sunt aptanda mysteriis;Quae tamen artis humanae peritia, si quando tractandis sacris eloquiis adhibetur, non debet jus magisterii sibimet arroganter arripere; sed velut ancilla dominae quodam famulatus obsequio subservire, ne si paecedit, oberret, et dum exteriorum verborum sequitur consequentias, intimae virtutis lumen et rectum veritatis tramitem perdat.”
 [35] 『書簡117 聖なる純朴について』 『中世思想原典集成 第7巻 前期スコラ学』 p.35 「というのも全能の神は、人々を御許に呼び寄せるために、我々の文法学者を必要とはなさらないからである。人間の贖いを始めるにあたり、新しい信仰の種を蒔き広めるために哲学者や雄弁家ではなく、むしろ純朴な者、無学な者、漁師を遣わすことがより必要であるとお考えになった」
 [36] 同上 p.41 「いったい誰が太陽を見ようとしてランプに火を灯すだろうか。誰がきらめく星の光を見るのに蠟燭を用いるだろうか。だから純粋な眼差しで神とその聖徒たちを求める人は、真の光を眺めるために他所の光を必要としない。なぜなら真の知恵自身が求める者に自らを開示し、偽りの光の助けを借りることなく、消えることのない光の輝きが姿を現すのである」
 [37] 『第一コリント書註解』 Epistola B.Pauli Apostoli ad Corinthios prima cum Glossula interjecta B.Lanfranci. PL.150, col.157. “ Sapientiam, ubi dialecticam dicit, per quam crux, id est, mors Christi eam aimpliciter intelli gentibus evacuari videtur, quia Deus immortalis, Christus autem Deus; Christus igitur immortalis. Si autem immortalis; mori non potuit. Sic de partu Virgiius, et quibusdam aliis sacramentis, perspicaciter tamen intuentibus, dialectica sacramenta Dei non impugnat; sed cum res exigit, si rectissime teneatur, astruit et confirmat.”
 [38] 『モノロギオン』序文『中世思想原典集成 第7巻 前期スコラ学』 p.55
 [39] 同上 p.54
 [40] 同上 p.55
 [41] 同上 p.56. ただし、この部分の引用はミーニュ版からの拙訳である。De divinitatis essentia Monologium. PL.158, Col.144. “ Unam summam naturam existere, sibi sufficientem, et a cuius omnipotentii bonitate omnia alia sint, pluraque alia quae de Deo credimus, sola ratio magna ex parte persuadere potest.”
 [42] 『プロスロギオン』序文『中世思想原典集成 第7巻 前期スコラ学』 p.184
 [43] 同上 p.189
 [44] 同上 p.190
 [45] 『神はなぜ人間となられたか』序文『アンセルムス全集』 p.443
 [46] 『エロイーズとアベラール ものではなく』 p.36
 [47] 『アベラールとエロイーズ 愛と修道の手紙』 pp.19-20
 [48] 同上 pp.37-38
 [49] 同上 p.43
 [50] 『然りと否』序文『中世思想原典集成 第7巻 前期スコラ学』 p.504
 [51] 同上 p.504
 [52] 同上 p.517
 [53] 同上 pp.519-520
 [54] 同上 p.520
 [55] 『倫理学』『中世思想原典集成 第7巻 前期スコラ学』 p.540
 [56] 『ガリレイの道』 p.270.
 [57] Charturarium Universitas Parisiensis (以下CUPと略す) 20節.p.78. “ Nullus legat Parisius de artibus citra vicesimum primun etatis sue annum, et quod sex annis audierit de artibus ad minus, antequam ad legendum accedat, et quod protestetur se lecturum duobus annis ad minus, nisi rationabilis causa intervenerit,.....”
 [58] 特に1215年のラテラノ公会議で教会公認の教科書となったため一層普及し、パリのソルボンヌ学寮には1338年の時点で50部もの『命題集』が、118冊の注釈書と共に所蔵されていた。(『12世紀ルネサンス』 p.313)

- [59] CUP. 20節p.79. “Circa statum theologorum statuimus, quod nullus Parisius legat citra tricesimumquintum etatis sue annum, et nisi studuerit per octo annos ad minus, et libros fideliter et in scholis audierit, et quinque annis audiat theologiam, antequam privatas lectiones legat publice, et illorum nullus legat ante tertiam in diebus, quando magistri legunt.”
- [60] 註59を参照せよ。
- [61] 『大学の起源』 pp.208-210.
- [62] 『靈魂論』 414a12-14
- [63] 同上 429a22-29
- [64] CUP. 11節p.70. “.....nec libri Aristotelis de naturali philosophia nec commenta legantur Parisius publice vel secreto, et hoc sub penae xcommunicationis inhibemus.”
- [65] ibid. 20節pp.78-79. “Et quod legant libros Aristotelis de dialectica tam de veteri quam de nova in scholis ordinarie et non ad cursum.Non legant in festivis diebus nisi philosophos et rhetoricas, et quadrivialia, et barbarismum, et ethicam, si placet, et quartum topichorum. Non legantur libri Aristotelis de methaphisica et de naturali philosophia, nec summe de eisdem,”
- [66] “The Philosophical Movement in the 13th century”. p.49
- [67] CUP. 59節pp.114-115. “Magistris in theologia Parisius regentibus.....Et quidem theologicus intellectus quasi vir habet preesse cuilibet facultati, et quasi spiritus in carnem dominium exercere, ac eam in viam dirigere rectitudinis ne aberret. Denique qui verba celestis oraculi adulterine philosophorum doctrine commixtione a sui sensus molitur inflatus et nichil sciens puritate divertere inclinans eadem ad philosophicum intellectum Cum enim theologiam secundum approbatas traditiones sanctorum exponere debeant, et non carnalibus armis, set Deo potentibus destruere omnem altitudinem extollentem se adversus scientiam Dei et captivum in obsequium Christi omnem reducere intellectum, ipsi doctrinis variis et peregrinis abducti redigunt caput in caudam et ancille cogunt famulari reginam, videlicet documentis terrenis celeste, quod est gratie tribuendo nature.”
- [68] ibid. 79節p.138. “Ad hoc jubemus, ut magistri artium unam lectionem de Prisciano et unum post alium ordinarie semper legant, et libris illis naturalibus, qui in Concilio provinciali ex certa causa prohibiti fuere, Parisius non utantur, quousque examinati fuerint et ab omni errorum suspitione purgati.”
- [69] ibid. 79節p.138. “Magistri vero et scholares theologie in facultate quam profitentur se studeant laudabiliter exercere, nec philosophos se ostentent, sed satagant fieri theodoti,.....sed de illis tantum in scholis questionibus disputant, que per libros theologicos et sanctorum patrum tractatus valeant terminari.”
- [70] ibid. 87節pp.143-144. “Cum sapientie sacre pagine relique scientie debeant famulari,.....Ceterum cum sicut intelleximus libri naturalium, qui Parisius in Concilio provinciali fuere prohibiti, quedam utilia et inutilia continere dicantur, ne utile per inutile vitietur, discretioni vestre,.....quantius libros ipsos examinantes sicut convenit subtiliter et prudenter, que ibi erronea seu scandalii vel offendi culi legentibus inveneritis illativa, penitus resecetis ut que sunt suspecta remotis incunctanter ac inoffense in reliquis studeatur.”
- [71] “The Philosophical Movement in the 13th century”. p.50
- [72] 『水とワイン』 p.24
- [73] CUP. 128節p.170. “Primus, quod divina essential in se nec ab homine nec ab angelo videbitur.”
- [74] ibid. 128節p.170. “.....Deus in sua essentia vel substantia videbitur ab angelis et omnibus sanctis et videtur ab animabus glorificatis.”
- [75] ibid. 128節p.171. “Quartus, quod anime glorificate non sunt in celo empire cum angelis, nec corpora glorificata erunt ibi, sed in celo aqueo vel cristallino, quod supra firmamentum est, quod et de beata Virgine presumitur.”
- [76] ibid. 128節p.171. “Septimus, quod multe veritates sunt ab eterno, que non sunt Deus.”
- [77] 「第一に知るべきは、原因についての知識と原因より生じたものについての知識があるということである。.....知識という名前は原因より生じたものについての知識にふさわしいが、知恵という名前は様々な原因のそのまた原因についての知識にふさわしい。だから哲学者アリストテレスも、それ自身によってあり、また諸原因の原因についての学問である第一哲学は知恵と呼ばれるべきだと言っている。同じような理由により、他のあらゆる知識を超越している神学の教えは知恵と呼ばれるべきである」
- “Primo notandum quod est scientia causae et scientia causati.....Nomen ergo scientiae appropriatur scientiae causatorum, nomen vero sapientiae scientiae causae causarum. Unde et ipse Philosophus dicit quod Philosophia Prima, quae est sui gratia et de causa causarum, debet dici sapientia. Simili ratione doctrina theologica, quae transcendit omnes alias scientias, debet dici sapientia.”
- “Summa Theologica”. tomus I . p.2. Quaracchi,1924.
- [78] 『大学の起源』 pp.198-199.
- [79] CUP. 383節p.427. “Non decet nos vobis apostolicum negare favorem, quem vobis vestris videmini meritis comparare, dum dantes operam sapientie, que plurimum nos delectat, nostre vos gratie coaptetis,.....Hinc est, quod quieti vestre paterna volentes diligentia providere, ad instar fel. rec. Gregorii pape predecessoris nostri, auctritate vobis presentium indulgemus ut nullus in universitatem magistrorum vel scolarium seu rectorem vel procuratorem eorum aut quemquam alium pro facto vel occasione Universitatis excommunicationis, suspensionis vel interdicti sententias audeat promulgare absque sedis apostolice licentia speciali, et si fuerit promulgata, ipso jure sit irrita et inanis.”
- [80] 『中世思想原典集成 第19巻 中世末期の言語・自然哲学』 p.310
- [81] 同上 p.311
- [82] 同上 p.314
- [83] 同上 p.317
- [84] 『中世思想原典集成 第13巻 盛期スコラ学』 pp.647-648
- [85] CUP. 441節p.499. “.....statuimus et ordinamus quod nullus magister vel bachellarius nostre facultatis aliquam questionem pure theologicam, utpote de Trinitate et Incarnatione sicque de consimilibus omnibus, determinare seu etiam disputare presumat, tanquam sibi determinatos limites transgrediens,.....Quod si presumpserit,.....ex tunc a nostra societate perpetuo sit privatus.”
- [86] ibid. 441節p.499. “Statuimus insuper et ordinamus quod si questionem aliquam, que fidem videatur attingere simulque philosophiam, alicubi disputaverit Parisius, si illam contra fidem determinaverit, ex tunc ab eadem nostra societate tanquam hereticus perpetuo sit privatus,.....”
- [87] 『神曲』 下巻 p.72
- [88] CUP. 409節p.450. 「またピカルディー団の教師シゲルスは、このギレルムスの捕縛について疑念を抱いていたそうで、監督団の決定を正当と認めた」
- “.....quodque magister Sygerus de nacione Picardorum, [quia] super huiusmodi ejusdem Guillelmi captione ipsum

- suspectum dicebant, ad ipsorum archidiaconorum arbitrium se purgaret.”
- [89] 『形而上学問題集』第6巻 第1問題の講評, William Dunphyのテキストではp.361. “Ex quibus iam dictis apparet quod pessime volunt procedere illi qui in illa scientia volunt procedere in omnibus modo demonstrative. Principia enim demonstrationis debent esse nota via sensus, memoriae et experimenti. Principia autem illius scientiae nota sunt, ut visum est, per revelationem divinam.”
- [90] 『形而上学問題集』第3巻 第15問題, Armand Maurerのテキストではp.110. “Propter etiam ea quae fidei sunt non est velanda intentio Philosophi, sicut quidam voluerunt, dicentes Philosophum non intendere mundum simpliciter esse aeternum, et alia huiusmodi. Via enim credenda intentionem Philosophi est ratio humana, et alia est via ad credendum quae sunt fidei, ut dictum est.”
- [91] 『知性的靈魂論』序文, p.70. “.....exposcentibus amicis, eorum desiderio pro modulo nostrae possibilitatis satisfacere cupientes, quid circa praedicta sentiendum sit secundum documenta philosophorum probatorum, non aliquid ex nobis asserentes, praesenti tractatu proponimus declarare.”
- [92] 『知性的靈魂論』Bazánのテキストではp.83-84. “Quaerimus enim hic solum intentionem philosophorum et parecipue Aristotelis, etsi forte Philosophus senserit aliter quam veritas se habeat et sapientia, quae per revelationem de anima sint tradita, quae per rationes naturales concludi non possunt. Sed nihil ad nos nunc de Dei miraculis, cum de naturalibus naturaliter disseramus.”
- [93] ibid. p.101. 「.....知性的靈魂は、人間の身体が多数化されることにより、多数化されるのかということについて、アリストテレスに関係する限りで、また人間の理性と経験によって把握可能な限りで、詳しく考えてみるべきである。その際、我々は哲学的に進めていくべきであるから、真理よりもむしろアリストテレスの意図を問うことにする。というのは偽りのあり得ない真理によれば、知性的靈魂が人体の多数化により多数化されることは確実であるが、ある哲学者たちは逆のことを考えていて、哲学の道からすればこちらの反対意見の方が正しく思われるからである」 “videlicet utrum anima intellectiva multiplicetur multiolicatione corporum humanorum, dilligenter considerandum, quantum pertinent ad philosophum, et ut ratione humana et experientia comprehendi potest, quarendo intentionem philosophorum in hoc magis quam veritatem, cum philosophice procedamus. Certum est enim secundum veritatem quae mentiri non potest, quod animae intellectivae multiplican tur multiplicatione corporum humanorum. Tamen aliqui philosophi contrarium senserunt, et per viam philosophiae contrarium videtur.”
- [94] ibid. p.88. “Hoc dicimus sensisse Philosophum de unione animae intellectivae ad corpus; sententiam tamen sanctae fidei catholicae, si contraria huic sit sententiae Philosophi, praeferre volentes, sicut in aliis quibuscumque.”
- [95] 『世界の永遠性について』4章, p.132. “Haec autem dicimus opinionem Philosophi recitando, non ea asserendo tamquam vera.”
- [96] 『形而上学問題集』第3巻 第15問題への講評部分 William Dunphyのテキストではp.132. “sic autem velare philosophiam non est bonum : unde non est hic intentio Aristotelis celanda, licet sit contraria veritati.”
- [97] CUP. 468節p.539. “.....nos attendentes occulta conventicula ad docendum sacris canonibus interdicta et inimical sapientie (cujus professors existimus), que mentes hominum illuminans tenebras detestatur, communi utilitate pensata presumptioni quorumdam malignantium obviare volentes de communi consensus statuimus ac etiam ordinamus, quod nullus magister vel bachallarius cujuscumque fuerit facultatis, legere decetero acceptant in locis privatis aliquos libros propter multa pericula, que inde emergere possunt, sed in locis communibus ubi omnes possint confluere, qui ea que ibi docentur valeant reportare fideliter, exceptis dumtaxat libris gramaticalibus ac logicalibus, in quibus nulla presumption potest esse.....Si quis autem contra hoc statutum seu ordinationem venire presumpserit, privationem societatis magistrorum et scholarium se noverit incursum.”
- [98] 『対異教徒大全』第1巻 第7章44節p.11. “Principiorum autem naturaliter notorum cognitio nobis divinitus est indita : cum ipse Deus sit nostrae auctor naturae. Haec ergo principia etiam divina sapientia continet. Quicquid igitur principiis huiusmodi contrarium est, divinae sapientiae contrariatur. Non igitur a Deo esse potest. Ea igitur quae ex revelatione divina per fidem tenentur, non possunt naturali cognitioni esse contraria.”
- [99] 『ボエチウス 三位一体論註解』序論 第2問題 第3項主文 p.333. “Dicendum, quod dona gratiarum hoc modo naturae adduntur quod eam non tollunt, sed magis perficiunt ; unde et lumen fidei, quod nobis gratis infunditur, non destruit lumen naturalis cognitionis nobis naturaliter inditum. Quamvis autem naturale lumen mentis humanae sit insufficiens ad manifestationem eorum quae per fidem manifestantur, tamen impossibile est quod ea quae per fidem nobis traduntur divinitus sint contraria his quae per naturam nobis sunt indita.....Sicut autem sacra doctrina fundatur super lumen fidei, ita philosophia super lumen naturale rationis. Unde impossibile est quod ea quae sunt philosophiae, sint contraria iis quae sunt fidei, sed deficient ab eis.....Si quid autem in dictis philosophorum inveniatur contrarium fidei, hoc non est philosophiae, sed magis philosophiae abusus ex defectu rationis.”
- [100] 『神学大全』第1部 第1問題 第2項主文
- [101] 同上 第1部 第1問題 第1項主文
- [102] 同上 第1部 第1問題 第1項主文
- [103] 同上 第2-2部 第2問題 第4項主文
- [104] 同上 第2-2部 第2問題 第4項主文
- [105] 拙論『なぜ哲学は神学になったのか 人間の認識能力の限界と恵みの神の要請』名寄市立大学紀要 第9巻 pp.19-51 2015年
- [106] 『神学大全』第2-2部 第1問題 第5項 第4異論回答
- [107] 『ボエチウス 三位一体論註解』序論 第2問題 第1項 第4異論回答 p.329. “.....quod non licet hoc modo scrutari divina mysteria, ut ad eorum comprehensionem intention habeatur ;”
- [108] 『神学大全』第1部 第1問題 第5項 第2異論回答
- [109] Sermones, n.2. “inveniuntur aliqui qui student in philosophia, et dicunt aliqua quae non sunt vera secundum fidem ; et cum dicitur eis quod hoc repugnat fidei, dicunt quod philosophus dicit hoc, sed ipsi non asserunt : immo solum recitant verba philosophi. talis est falsus propheta, sive falsus doctor, quia idem est dubitationem movere et eam non solve quod eam concedere ;” S.Thomae Aquinatis Opera Omnia, vol.VI, p.35, col.c, curante Roberto Busa, Frommann-Holzboog,1980.
- [110] 『ボエチウス 三位一体論註解』序論 第2問題 第3項 第5異論回答p.334. “Unde illi qui utuntur philosophicis documentis in sacra Scriptura redigendo in

obsequium fidei, non miscent aquam vino, sed convertunt aquam in vinum.”

- [111] 『命題集註解』第2巻 第1区分 第1項 第2問題本文 p.22.「すべての事物は無から産出されたとしながら、世界は永遠であるとか永遠に産出されたものであるとすることは真理や理性にまったく反するものと言うべきである。……またさらにもっともらしいことは、哲学者たちの中でもより優れているかのアリストテレスも、聖人たちが指弾し、注釈者たちが彼の言葉を展開して説明するところによれば、(世界は永遠という) この間違いに陥っていたということである」 “Dicendum, quod ponere, mundum aeternum esse sive aeternaliter productum, ponendo res omnes ex nihilo productas, omnino est contra veritatem et rationem,et adeo rationabilius, ut etiam ille excellentior inter philosophos, Aristoteles, secundum quod Sancti imponunt, et commentators exponunt, et verba eius praetendunt, in hunc errorem dilapsus fuerit.”
- [112] 『すべての者の唯一の教師キリスト』18-19節 『中世思想原典集成 第12巻 フランシスコ会学派』p.415-416
- [113] 『命題集註解』第3巻 第24区分 第2項 第3問題 第4異論回答p524. “.....fides est de his quae sunt supra rationem, et scientia de his quae sunt infra; dicendum, quod sicut nihil impedit, unum et idem esse latens et patens; sic nihil impedit, unum et idem secundum alium et alium cognoscendi modum esse infra et supra; et ita scitum et creditum. Licet enim sempiterna virtus et Divinitas nosci possit per scientiam acquisitam, vel etiam innatam, in se; tamen prout comparator ad pluralitatem personarum, vel ad humilitatem humanitatis nostrae, quam Deus assumit, omnino supra rationem est et supra scientiam. Si quis enim iudicio rationis et scientiae innitatur, nequaquam crederet possibile,.....Unde valde parum attingit scientia cognitionem divinorum, nisi fidei innitatur ;.....Propter quod dicit Apostolus, stultam fecisse Deum sapientiam huius mundi; quia omnis sapientia de Deo in via absque fide magis est stultitia quam vera scientia. Deprimit enim perscrutantem in errorem, nisi dirigatur et iuvetur per fidei illuminationem; unde per ipsam non expellitur, sed magis perficitur.”
- [114] 『命題集註解』第2巻 第18区分 第2項 第1問題 第6異論回答p.448. “Deficit etiam in hoc, quod etsi anima separaretur a corpore, resumet tamen aliquando corpus suum per resurrectionem; quod etiam Philosophus ignoravit; et ideo non est mirum, si in huiusmodi deficit. Necesse est enim, philosophantem in aliquem errorem labi, nisi adiuvetur per radium fidei.”
- [115] 『神学綱要』序論p.18-19
- [116] 同上 1-1-2, p.27
- [117] Dominica IV post epiphaniam, Sermo 1, tomus IX, p.186 b.「ゆえに『列王記』上巻の第二章では『古いものはあなたの口から出ていけ』と言われていのである。なぜなら神はもろもろの知識の主であり、様々な思考は神へと整えられるからである。『古いもの』とは何の価値もないソフィストの理性と哲学の議論のことであり、それが『あなたの口から出ていけ』とあるのは、哲学について語るなどということではなく、それに拠りかかるなどということである。なぜなら知恵と知識のあらゆる宝がそこにある主なるイエス・キリストはもろもろの知識の神であり、最新のことも古いこともすべて知っているからである」 “Unde dicitur primi Regnum secundo : Recedant vetera de ore vestro, quia Deus scientiarum Dominus est, et ipsi praeparantur cogitationes. -Vetera, sophisticae rationis et philosophicae argumentationis quasi nullius

valoris, recedant de ore vestro, non quod non debeatis de philosophia loqui, sed quod non debeatis ei inniti, quia Dominus Iesus Christus, in quo sunt omnes thesauri sapientiae et scientiae, est Deus scientiarum, cognoscens omnia, novissima et antiqua.”

- [118] 『十戒についての講話』第2講話28節p.515. “Audivi, cum fui scholaris, de Aristotele, quod posuit mundum aeternum ; et cum audivi rationes et argumenta, quae fiebant ab hoc, incepit concuti cor meum et incepit cogitare, quomodo potest hoc esse ? ”
- [119] 同上 第2講話24-25節p.514. “Omnes autem falsae et superstitiosae adinventiones errorum proveniunt aut ex improbo ausu investigationis philosophicae, aut ex perverso intellectu sacrae Scripturae, aut ex inordinato affectu carnalitatis humanae. Ex improbo ausu investigationis philosophicae procedunt errores in philosophis, sicut est ponere mundum aeternum, et quod unus intellectus sit in omnibus.”
- [120] 『聖霊の七つの賜物についての講話』第4講話5節 p.474. “Scientia philosophica nihil aliud est quam veritatis ut scrutabilis notitia certa. Scientia theologica est veritatis ut credibilis notitia pia.”
- [121] 同上 第4講話12節p.476. “Esto, quod homo habeat scientiam naturalem et metaphysicam, quae se extendit ad substantias summas, et ibi deveniat homo, ut ibi quiescat; hoc est impossibile, quin cadat in errorem, nisi sit adiutus lumine fidei, scilicet ut credit homo Deum trinum et unum, potentissimum et optimum secundum ultimam influentiam bonitatis.”
- [122] 『創造の六日間についての講話』第6講話2-4節 p.360-361.「神は光を闇から分けたとは天使について言われたものだが、様々な哲学についても言われたものだったのである。……ある人々はその中(第一原因)に諸事物の範型があったことを否定した。その頭目はアリストテレスだったように思われる。彼は『形而上学』の始めの部分と終わりの部分で、またその他の多くの箇所でもプラトンのアイデアを忌み嫌った。それで仮は言う、神は自分自身だけを認識し、他のいかなる事物の知識もなく、望まれたもの、愛されたものとして動かすのだと。……この間違いから神は予知も摂理も持たないという別の間違いが生じることになった。だが神はそれを通して自らのうちに諸事物の観念を持つのであり、それら観念を通して認識するのだ。……このことから、すべてのものは偶然あるいは運命の必然によって生じたということになる。……このことから真理の隠匿すなわち罰と栄光について備えの世俗化が生じる。……アリストテレスもこの世の後に悪魔も至福も措定していないように思われる。ゆえに範型、神の摂理、備えの世俗化という三つの無知が生じるわけである。これらから三つの盲目あるいは暗愚が生じる。すなわち世界の永遠性についての盲目である。……これら知性の単一性に関する別の盲目が続く。……これら二つから、この世の後は幸福も罰もないということが続くことになる」 “Divisit tamen Deus lucem a tenebris, ut, sicut dictum est de Angelis, sic dicatur de philosophis.....Nam aliqui negaverunt, in ipsa esse exemplaria rerum; quorum princeps videtur fuisse Aristoteles, qui et in principio Metaphysicae et in fine et in multis aliis locis execratur ideas Platonis. Unde dicit, quod Deus solum novit se et non indiget notitia alicuius alterius rei et move tut desideratum et amatum.....Ex isto errore sequitur alius error, scilicet quod Deus non habet praescientiam nec providentiam, ex quo non habet rationes rerum in se, per quas cognoscat.....Et ex hoc sequitur, quod omnia fiant a casu, vel necessitate

fatali.....Ex hoc sequitur veritas occultata, scilicet dispositionis mundialium secundum poenas et gloriam.....nec Aristoteles unquam posuit daemone nec beatitudinem post hanc vitam, ut videtur. Iste est ergo triplex error, scilicet occultatio exemplaritatis, divinae providentiae, dispositionis mundanae.Ex quibus sequitur caecitas vel caligo, scilicet de aeternitate mundi,Ex isto sequitur alia caecitas de unitate intellectus,Ex his duobus sequitur, quod post hanc vitam non est felicitas nec poena.”

- [123] Dominica tertia adventus, Sermo 2, tomusIX, p.63a-b.
“ Qui diligunt sacram Scripturam diligunt etiam philosophiam, ut per eam confirmet fidem; sed philosophia est lignum scientiae boni et mali, quia veritatis permixta est falsitas. Sed si es aemulator philosophorum, dicis: quomodo potuit decipi Aristoteles ? Et non diligis sacram Scripturam ; necessario cadis a fide. Si dicis mundum aeternum, nihil scis de Christo. Si dicis unum intellectum in omnibus, et non esse felicitatem post hanc vitam nec resurrectionem murtuorum ; Si manducas de isto ligno scientiae boni et mali ; cadis a fide. Cavere debent sibi discentes quae sunt philosophiae ; fugiendum est omne illud, quod est contrarium doctrinae Christi, sicut interfectivum animae.”
- [124] 『聖霊の七つの賜物についての講話』第4講話12節 p.476. “ Philosophica scientia via est ad alias scientias; sed qui ibi vult stare cadit in tenebras.”
- [125] 『創造の六日間についての講話』第19講話14節 p.422. “ Non igitur tantum miscendum est de aqua philosophiae in vinum sacrae Scripturae, quod de vino fiat aqua; hoc pessimum miraculum esset; et legimus, quod Christus de aqua fecit vinum, non e converso.”
- [126] CUP. 471節p.541. “.....quod Parisius, ubi fons vivus sapientie salutaris habundanter huc usque scaturit suos rivos limpidissimos fidem patefacientes catholicam usque ad terminos orbis terre diffundens, quidem errores in prejudicium ejusdem fidei de novo pullulasse dicuntur. Volumus itaque tibi auctoritate presentium districte precipiendo mandamus quatinus diligenter facias inspicere vel inquiri, a quibus personis et in quibus locis errores hujusmodi dicti sunt sive scripti,.....”
- [127] 『中世思想原典集成 第13巻 盛期スコラ学』 p.649.
- [128] 同上 p.649-650
- [129] 同上 第40箇条p.651
- [130] 同上 第154命題p.651
- [131] 同上 第96箇条p.656
- [132] 同上 第81箇条p.656
- [133] 同上 第19箇条p.675
- [134] CUP. 474節p.559. “ Qui sustinet, docet, vel defendit ex intencione propria aliquid istorum predictorum, si sit magister, ab officio magisterii deponatur ex communi consilio, si bachelarius, ad magisterium non promoveatur sed ab Universitate expellatur.”
- [135] ibid. 474節p.560, 注2. “ Solus non fui in ista prohibitione, immo ut scripsistis omnium magistrorum Oxon. assensus accessit,.....”
- [136] ibid. 474節 p.559. “.....vegetativa, sensitiva et intellectiva sunt simul in embrione tempore.”
- [137] ibid. 474節p.559. “.....intellectiva introducta corrumpitur sensitiva et vegetativa.”
- [138] ibid. 474節p.559. “.....vegetativa, sensitiva et intellectiva sint una forma simplex.”
- [139] ibid. 474節p.559. “.....corpus vivum et mortuum est equivoce corpus,.....”
- [140] ibid. 474節p.559. “.....materia et forma non

distinguuntur per essentiam.”

- [141] この時の対話の様子についてベッカム本人とドミニコ会側とは全く食い違った報告がなされている。「トマスとベッカムの「論争」については、そこで示された、前者の寛大で謙遜な態度と後者の尊大さを強調する初期の伝記者たちの証言と、ベッカム自身が、大司教になったあとで往時を振り返って書翰に認めているところとは、完全に食い違っている。すなわち、トマスの伝記者たちによると、若いベッカムが無礼な態度でトマスの学説を攻撃したのに対して、トマスは最後まで謙遜・温和かつ礼儀正しい態度をくずさなかったことになっている。しかしベッカムによると、トマスの見解が、パリ司教・神学教授団およびトマスが属しているドミニコ会の修道士たちによってきびしく批判されたとき、彼だけはトマスの側に立って、できるかぎり弁護したが、最後にトマスは自説を教授団の判定に委ねた、というのである」（稲垣良典『トマス・アクィナス』210頁、講談社、1999）前後関係から考えてベッカムの回想はどう見ても辻褄が合わない。真相はドミニコ会の言う通りだったと思われる。
- [142] CUP. 517節p.625. “ Causam vero opinionum bone memorie fratris Thome de Aquino, quas fratres ipsi opinions sui Ordinis esse dicunt, quas tamen in nostra presentia subiecit idem reverendus frater theologorum arbitrio Parisiensium magistrorum, pendere diximus in Romana curia indecisam pro eo quod cum vacante sede apostolica per mortem sancte memorie domini Johannis, Dei gratia tunc temporis Romani pontificis, episcopus Parisiensis Stephanus bone memorie ad discussionem ipsorum articulorum de consilio magistrorum procedere cogitaret : mandatum fuisse dicitur eidem episcopo per quosdam Romane curie dominos reverendos, ut de facto illarum opinionum supersederet penitus, donec aliud reciperet in mandatis.”
- [143] ibid. 517節p.624-625. “.....quod nec Ordini eorum nec opinionibus ipsius Ordinis, pro eo quod sunt Ordinis, intendebamus quomodolibet adversari, sed factum predecessoris nostri circa errores ab eo inventos in liberalibus disciplinis, ac dampnatos de consilio magistrorum, et in parte suscitatos denuo in scandalum plurimorum, prosequi iustitia mediante.”
- [144] ibid. 517節p.625. “ Procedentibus demum nobis ambobus ulterius in tractando, et errorem ponentium 《in homine existere tantummodo formam unam》 concorditer detestando, subjunximus nos quosdam istius erroris temerarios defensores in tante subversionis foveam corruisse, ut dixerint scilicet et scripserint, quod si homo haberet aliam formam ab anima rationali, non posset corpus hominis corruptum idem numero etiam per miraculum reparari.”
- [145] ibid. 517節p.625. “ Et sicut circa processus hujusmodi vel quoscunque alios fratrum Predicatorum licentia nondum, Deo gratias, indigemus : sic, quia quod in hac parte fecimus fratribus Minoribus imputari. Falso ergo dictum est, nos per hoc discordiam inter Ordines seminasse.”
- [146] ibid. 517節p.625-626. “ Intelleximus insuper quod quidam fratres ejusdem Ordinis Predicatorum ausi sunt se publice jactitare, doctrinam veritatis plus in suo Ordine, quam in alio sibi contemporaneo viguise ; cujus contrarium quia tenere putamus viros majores et sapientiores ecclesie militantis, ipsam eorum jactantiam asserimus esse falsam, quod non esset difficile declarare, nisi esset comparaio odiosa, comparando scilicet scripta scriptis, personas personis, et labors laboribus satis notis.”

- [147] ibid. 518節p.626. “Quandam autem illarum opinionum tetigimus specialiter, eam manifestis rationibus impugnantes, ponentium videlicet, in homine existere tantummodo formam unam, pro eo quod ex ipsa sequitur, nullum corpus Sancti totaliter vel partialiter in toto orbe existere vel in urbe, cum sine unitate forme generalis aut specialis nullum corpus possit numeraliter esse unum. Alia etiam inconvenientia sequuntur innumera ex hoc ipso. Fuit revera illa opinio fratris Thome sancte memorie de Aquino;”
- [148] ibid. 518節p.627. “Hec idcirco vobis scribimus, sancte pater, ut si forsitan aliqua de hac materia insonuerint sapientie vestre auribus, facti noveritis infallibilem veritatem, et ut sacrosancta Romana ecclesia attendere dignaretur, quod cum doctrina duorum Ordinum in omnibus dubitabilibus sibi pene penitus hodie adversetur, cumque doctrina alterius eorundem, abjectis et ex parte vilipensis Sanctorum sentiis, philosophicis dogmatibus quasi totaliter innitatur,.....”
- [149] ibid. 523節p.634. “.....philosophorum studia minime reprobamus, quatinus mysteriis theologicis famulantur; set profans vocum novitates, que contra philosophicam veritatem sunt in sanctorum injuriam citra viginti annos in altitudines theologicas introducte, abjectis et vilipensis sanctorum assertionibus evidenter. Que sit ergo solidior et sanior doctrina, vel filiorum beati Francisci, sancte scilicet memorie fratris Alexandri ac fratris Bonaventure et consimilium, qui in suis tractatibus ab omni calumnia alienis sanctis et philosophis innituntur : vel illa novella quasi tota contraria, que quicquid docet Augustinus de regulis eternis, de luce incommutabili, de potentiis anime, de rationibus seminalibus inditis materie, et consimilibus innumeris, destruit pro viribus et enervat, pugnas verborum inferens toti mundo ?”
- [150] 『神学大全』第1部 第76問題 第4項主文
- [151] 同上 第1部 第76問題 第4項主文
- [152] 同上 第1部 第75問題 第4項主文
- [153] 同上 第1部 第76問題 第1項主文
- [154] 同上 第1部 第76問題 第7項 第3異論回答
- [155] 同上 第1部 第76問題 第3項
- [156] 同上 第1部 第75問題 第5項主文
- [157] 同上 第1部 第75問題 第6項主文
- [158] “Correctorium fratris Thomae” in Les premières polemiques thomistes 1 : Le correctorium corruptorii “Quare” 序文 p.ix, 注2.
- [159] “Quare” p.5.
- [160] 『神学大全』第1部 第118問題 第2項 第2異論回答
- [161] “Quare” p.129. “Haec positio de unitate formae substantialis reprobatur a magistris, primo, quia ex ipsa plura sequuntur contraria fidei catholicae ; secundo, quia contradicit philosophiae, tertio, quia repugnant Sacrae Scripturae.”
- [162] ibid.p.396. “.....res in qua est multitudo et gradus formarum, est una per formam ultimam.....nam in generatione hominis ex semine primo inducitur esse, secundo anuma vegetabilis, postea sensitive et tandem infunditur rationalis ; et haec omnia pertinent ad generationem unius et eiusdem ; et ideo non oportet quod per infusionem animae rationalis corrumpatur sensibilis et vegetabilis quia ad eiusdem individui generationem pertinent.”
- [163] ibid.p.206. “.....in homine non est nisi una anima simplex ad quam consequuntur vires vegetativae, et eatenus dicitur anima vegetative ; et omnes praedictae virtutes sensitivae, et eatenus dicitur eadem ipsa anima sensitive ; et ulterius virtus intellective, et eatenus dicitur anima rationalis. Illud tenendum est pro certo,.....”
- [164] ibid.p.206. “quia si virtus vegetative et sensitive non radicarentur in ipsa essentiali animae rationalis in homine, nec ipsam perficientem materiam corpori humani consequerentur, manifestum est quod nulla virtus esset in humano corpore, ratione intellectivae animae sibi unitae; ex quo posset concludi quod non unitur corpori humano ut forma, sed solum ut motor, quod est haereticum.”
- [165] ibid.p.397. “Item alia responsio quam fingunt nihil valet. Quamvis enim concedendus sit totus iste processus dispositionis materiae a semine usque ad infusionem animae rationalis, tamen necesse est ponere quod semen differt ab embrione et embrio ab homine. Cum igitur generatio unius sit corruptio alterius, necesse est quod generatio hominis corruptio embrionis.”
- [166] 『神学大全』第1部 第75問題 第5項主文ならびに第1異論回答
- [167] “Quare” p.119. “.....dicta positio est contra philosophiam quae tantum potentiam rei attribuit ratione materiae et actionem ratione formae. Si anima ergo esset pura forma non composita ex materia et forma, omnes eius potentiae essent activae et nulla passiva, quod patet esse falsum.”
- [168] ibid.p.120. “Ergo si anima non habet materiam, non sustinet poenam ab igne inferni, nec recipit beatitudinem a Deo, quia non recipit hoc quod recipere non potest; posse autem recipere est potentiae passivae, quod esse non potest nisi in eo quod habet materiam.”
- [169] ibid.pp.49-50. “.....Matt.XXV : ite maledicti, etc.....quia fides tenet et Scriptura dicit solum Deum esse immutabilem.....quia fides tenet quod angelus nec beatus nec malus creatus fuit, sed beatitudinis et miseriae capax,.....Dicendum ergo quod angelus est compositus ex materia spirituali et forma.”
- [170] ibid.p.50. “Quod autem sit ponere materiam spiritualem patet per Augustinum, libro V super Genesim ad litteram, capitulo 8 :.....” 原文では『創世記逐語解』第5巻8章とあるが、実際は5章である。またギレルムスは靈的質料の典拠としてアウグスチヌスの同書の第5巻4章ならびに第7巻27章もあげている。これについては Quare のp.376を参照せよ。
- [171] ibid.p.378. “Quod hic dicunt innititur cuidam falsitati qua fingunt quamdam materiam spiritualem ex qua cum forma angelus et anima componantur, quam nunquam Philosophus posuit, nec etiam Augustinus de huiusmodi materia intellexit ubi materiam spiritualem nominavit.”
- [172] ibid.p.54. “.....cum dicit Boetius quod angelus et anima sunt unum coniunctione, etc.; non sic habet intelligi quod in ipsa quidditate angeli vel animae sunt duo principia simul iuncta, materia scilicet et forma, sed ista coniunctio est quidditatis ipsius, quae forma simplex est in utroque, cum suo esse quod participat, respect cuius ipsa quidditas est in potential ; propter quod sicut quidditas angeli est in potential ad esse quod participat per naturam, sic etiam in suis naturalibus constitutus, ipse angelus est in potential ad perfectiorem essendi modum, per melioris ac verioris esse participationem pleniorum, quod fit per gratiam et gloriam ; et propter hanc potentialitatem vocat Augustinus angelicam naturam materiam spiritualem,tamquam informem quoad perfectionem sapientiae, donec ad suum creatorem vel principium converteretur per amorem, sicut patet super Genesim ad Litteram, libro I, capitulo 5 per totum,.....”
- [173] 前の註172の最後の部分を参照せよ。
- [174] 『神学大全』第1部 第50問題 第4項主文

- [175] 同上 第1部 第50問題 第4項主文
- [176] “Quare”.p.60. “Illa positio videtur esse contraria fidei catholicae quia derogat omnipotentiae divinae. Cum enim multitudo angelorum vel unitas quaecumque non sit ab opere naturae sed potentiae divinae, dicere quod impossibile est duos angelos eiusdem speciei esse, est dicere quod Deus non posset hoc facere aut fecisse, quod est damnatum per episcopum et magistros Parisienses.”
- [177] ibid.p.62. “Ex simplicitate angeli,.....manifestum est quod impossibile est duos angelos eiusdem speciei esse. Nec est hoc contra fidem, nec derogat potentiae divinae. Cum enim, eo ipso quod sint simplices formae, sine materia subsistentes, manifestum sit eos differre sola differentia formali quae facit diversitatem in specie, dicere eos non posse eiusdem speciei, non plus derogat potentiae divinae quam dicere quod quaecumque differunt specie non possunt esse eiusdem speciei.”
- [178] ibid.pp.124-125. “Item, quaestione 76, articulo 2, in responsione 1 argumenti dicit quod licet anima intellectiva non habeat materiam ex qua fiat, sicut nec angelus, quia tamen est forma alicuius materiae scilicet corporis, et non angelus, ideo secundum divisionem materiae sunt unius speciei multae animae, sed multi angeli unius speciei non possunt esse.....ergo si information diversorum corporum est causa multiplicationis animarum, oportet quod separatio a corporibus sit causa unionis earum. Et sic redit error Averrois super III^m de Anima quod saltem post mortem erit unitas animarum.”
- [179] ibid.p.126. “Ex illa positione nullus sequitur error. Primum enim errorem ipsius Averrois quod unus sit intellectus omnium, destruit frater Thomas in responsione principali huius articuli et alibi multoties quo nemo melius.”
- [180] ibid.p.127. “procedit enim ac si animae intellectivae haberent esse a corporibus ; sic enim sequeretur quod illis destructis periret earum esse, quod falsum est ; immo esse quod a Deo creante in corporibus formatis receperunt perpetuo retinent, et sicut esse sic et multiplicationem,.....”
- [181] ibid.p.206. “Et ecce coram Deo quia non mentior, si scirem argumenta quae hoc ostendunt dissolvere, ut quandoque credebam, responsum per singula posuissem ; sicut enim nihil pertinaciter affirmo ne videar fieri praesumptuosus, sic meam cognoscens impotentiam vel ignorantiam nihil respondeo ad argumenta praedicta, ne ficta et fatua dicere cogar.”
- [182] ibid. pp.206-207. “Forsan Dominus Cantuariensis vel aliquis cui Dominus istam veritatem lucidius voluerit revelare docebit nos respondere. Ipse Dominus Noster Iesus Christus doceat nos in hoc et in aliis articulis praetactis veritatem investigatam intelligere, intellectam docendo declarare ad eius honorem et laudem cui est honor et gloria per infinita saeculorum saecula.Amen.”
- [183] “Registrum epistolarum fratris Johannis Peckham : archiepiscopi cantuariensis”. pp.921-923.
“..... infrascriptos errores , quos de novo audierat in sua provincial suscitatos , tanquam haereses declaravit , et pronunciavit esse damnatos , in scriptis proferens sub hac forma . Hii sunt articuli noviter divulgati , quos inter haereses damnatas in se vel in suis similibus numerandas esse credimus ; et haereticos esse censemus pertinaces eorum omnium et cujuslibet defensores , tanquam falsarum et novarum opinionum causa inanis gloriae sectatores.....omnes eorum affirmatores pertinaces publice vel occulte , sub quocumque verborum pallio , excommunicatos esse et anathematizatos denunciavimus ; ”
- [184] ibid. p.922. 「第二に、死において新しい実体的形相や新しい形象もしくは本性が入り込んだというものである。.....するとこのことから、神の子は人間ではなく、名づけようのない別の種だったことになってしまう」 “Secundus est , quod in morte fuit introducta nova forma substantialis , et nova species , vel natura , quamvis non nova assumptione vel unione Verbo copulata ; ex quo sequitur , quod Filius Dei non fuerit tantum homo , sed alterius speciei innominatae.”
- [185] ibid. p.922. 「第三箇条は、仮に墓の中での死の三日間において神化があったとすれば、『これは私の体である』という秘蹟の言葉により、パンは死を通して新たに入り込んだ形相もしくは本性へと聖体変化したことになる、というものである」 “Tertius est , quod in illam formam vel naturam de novo introductam per mortem facta fuisset transsubstantiatio panis , virtute verborum sacramentalium , scilicet “hoc est corpus meum,” si in triduo mortis fuisset facta consecratio.”
- [186] ibid. p.923. “Octavus est , quod in homine est tantum una forma , scilicet anima rationalis , et nulla alia forma substantialis ; ex qua opinione sequi videntur omnes haereses supradictae.”
- [187] ibid. p.923. “Septimus est , quod qui vult ista docere , non tenetur in talibus fidem adhibere auctoritati papae , vel Gregorii vel Augustini et similium , aut cujuscunque magistri ; sed tantum auctoritati Bibliae , et necessariae rationi. ”
- [188] 『トマス・アクィナスと急進のアリストテレス主義』 p.101
- [189] 『知性的靈魂論』 Bazánのテキストではp.103.
“Quod si quis dicat : cum sit anima intellectiva aliqua in me, Deus potest facere aliam simile ei et erunt plures, dicendum quod Deus non potest contradictoria et opposita simul, nec potest Deus facere quod sint plures homines quorum quilibet sit iste Socrates:sic enim faceret quod ipsi essent plures homines et unus, plures et non plures, et unus et non unus. Quod si anima intellectiva de sui ratione est aliquid individuum, per se subsistens et sicut Socrates, facere aliam animam intellectivam eiusdem speciei cum aliqua quae nunc est, esset illam factam esse aliam et eandem cum alia.In separatis enim a materia, individuum est ipsa sua species, et ideo aliud individuum esse sub specie est etiam ipsum contineri sub alio individuo, quod est impossibile.”
- [190] 『トマス・アクィナスと急進のアリストテレス主義』 p.103
- [191] 『聖俗の学問の綱要』 『中世思想原典集成 第5巻 後期ラテン教父』 p.379
- [192] 『神学大全』 第2-2部 第2問題 第4項主文

文 献

- 『アウグスチヌス著作集』 宮谷宣史ほか訳, 教文館, 1979-2015年
- アベラルドゥス『アベラールとエロイーズ 愛と修道の手紙』 畠中尚志訳, 岩波書店, 1964年
- 『アンセルムス全集』 古田暁訳, 聖文舎, 1980年
- 青木靖三『ガリレイの道』 平凡社, 1980年
- 稲垣良典『トマス・アクィナス』 講談社, 1999年
- エチエンヌ・ジルソン『中世哲学史』 渡辺秀訳, エンデル

レ書店, 昭和24年

エミール・ブレイエ『中世・ルネサンスの哲学』渡辺義雄訳, 筑摩書房, 1986年

川添信介『水とワイン 西欧13世紀における哲学の諸概念』京都大学学術出版会, 2005年

グレゴリウス『フランク史 10巻の歴史』杉本正俊訳, 新評論, 2007年

コプルストン『中世哲学史』箕輪秀二・柏木英彦訳, 創文社, 昭和45年

聖ボナヴェンツウラ『神学綱要』関根豊明訳, エンデルレ書店, 1991年

セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』金山弥平・金山万里子訳, 京都大学学術出版会, 1998年

ダンテ『神曲』山川丙三郎訳, 岩波書店, 1952年

『中世思想原典集成』上智大学中世思想研究所編訳, 平凡社, 1992-2002年

テルトゥリアヌス『護教論』金井寿男訳, 水府出版, 1984年

ハスキンス『十二世紀ルネサンス』野口洋二訳, 創文社, 昭和60年

——『大学の起源』青木靖三, 三浦常司訳, 八坂書房, 2009年

トマス・アクィナス『神学大全』高田三郎ほか訳, 創文社, 1963-2012年

服部英次郎編『キリスト教会とイスラム』平凡社, 昭和40年

J.G.ブージュロル『聖ボナヴェンツウラ』中央出版社 昭和56年

マリアテレーザ・フマガッリ=ベオニア=ブロッキエーリ『エロイズとアベラルー ものではなく言葉を』白崎容子・石岡ひろみ・伊藤博明訳, 法政大学出版局, 2004年

Migne Patrologia Latina-Documenta Catholica Omnia.
www.documentacatholicaomnia.eu/1815-1875,
(『ミーニュ教父全集 ラテン編』PLと略す。テルトゥリアヌスは第2巻, ペトルス・ダミアニは第145巻, ランフランクスは第150巻, アンセルムスは第158巻である)

“Chartularium Universitatis parisiensis”, tomus 1
https://archive.org/details/bub_gb_VmrMTNvijekC
(『パリ大学文書集成』第1巻, CUPと略す)

“De sacra coena adversus Lanfrancum liber posterior”,
https://books.google.co.jp/books?id=KcQ8AAAAcAAJ&printsec=frontcover&dq=de+sacra+coena+adversus+lanfrancum&hl=ja&sa=X&redir_esc=y#v=onepage&q=de%20sacra%20coena%20adversus%20lanfrancum&f=false

Doctris seraphici S.Bonaventura opera omnia.
collegium S.Bonaventurae, Roma, (Quaracchi版)

Registrum epistolarum fratris Johannis Peckham : archiepiscopi cantuariensis.
https://books.google.co.jp/books?id=8ZpHAAAAYAAJ&pg=PA888&dq=john+peckham&hl=ja&source=gbs_toc_r&cad=3#v=onepage&q=john%20peckham&f=false

S.Thomae Aquinatis Opera Omnia.
(Marietti版 原典について特に記載がない註はすべてこの版による)

S.Thomae Aquinatis Opera Omnia, vol. VI,
curante Roberto Busa, Frommann-Holzboog, 1980.

Siger de Brabant.
“Quaestiones in tertium de Anima. De Anima Intellectiva. De Aeternitate mundi.”
ed. Bernardo Bazán, Louvain/Paris, 1972.

“Quaestiones in metaphysicam.”
ed. William Dunphy, Louvain/Paris, 1981.

“Quaestiones in metaphysicam.”
ed. Armand Maurer, Louvain/Paris, 1983.

Guillaume de la Mare.
“Correctorium fratris Thomae” in Les premières polemiques thomistes 1 : Le correctorium corruptorii “Quare”.
ed. P. Glorieux, Kain : Saulchoir, 1927.

Armand A. Maurer, “Medieval Philosophy”, Random House, New York, 1962.

F.V. Steenberghen, “Thomas Aquinas and radical Aristotelianism”,
The Catholic University of America Press, Washington, 1980.

——“The Philosophical Movement in the 13th Century”, Edinburgh, 1995.

Sapientia and Scientia **- the ideal of theology and the real of rationalism -**

Tokuo HURUMAKI *

¹⁾ Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

Abstract: Confronting the limits of human cognition, ancient philosophers voluntarily became theologians in order to overcome skepticism towards the suppositions that a merciful god illuminates mankind's natural reason and helps us to know the truth. However, from the 12th century, when many of Aristotle's works were introduced in Western Europe, people began to notice the contradictions between theology and philosophy. Though most theologians attempted to defend theology against Aristotelian rationalism, the discussion exchanged among them were ultimately unproductive. As a result, the authority of theology was shaken and people began to question its truthfulness. The outline of this treatise is as follows.

1. From Augustinus to monastic theology
2. The rise of scholasticism and an influx of Aristotelianism
3. The relationship between theology and philosophy in the late 13th century
4. The Theological controversy between Dominicans and Franciscans

Key words: rationalism, theory of double truth, theory of unity of substantial form